
次元戦士エクセリオン

宇宙ひらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元戦士エクセリヲン

【Nコード】

N0955X

【作者名】

宇宙ひらめ

【あらすじ】

自称・平凡な私立聖祥大学付属高校の一年生”高町レイジ”どこか単調な毎日に退屈を感じていた…そんなある日、赤い宝石を手に入れる。彼はその日を境に非日常の世界に踏み込んでいく。ある日、不穏なものを感じながらも、それを迎えるべく家を出るレイジ。それが、後にある出来事の幕開けだった。

次元戦士エクセリヲン

これは、平行世界の海鳴市のもう一つの話。

メタルヒーローとなり、戦う青年の物語である。

最初に・注意書き

はじめに・注意書き

ひらめの駄作製造所へようこそ。

以下の注意点参照。いろいろ注意して、お読みください。

- ・ この作品はスーパー戦隊35周年&仮面ライダー40周年を記念して、魔法少女シリーズ作品をメタルヒーローにリメイクした作品です。
- ・ 作者は中二病を患っています。
- ・ 他作品同様、独自解釈、独自設定アリです。作者の勘違い、公式設定等を教えていただけるのは大歓迎です。ですがそれでお話を修正するかという程度によります。修正がない場合はこのSSの仕様です。
- ・ これは昔(2011/3/6)に投稿したヒーロー戦記内で展開していた”エクセリオン編”を連載にしたものです。
- ・ バトル以外にも暴力描写あります。出来るだけ薄めるので年齢制限はかけません。

では宜しければ、お付き合いよろしくお願いします。

追記、物書きドベです。誤字脱字があれば教えてください。

St・s・i 海鳴市の少年

「……………」

栗色、短髪の少年は夢を見ていた…、

「君は力が欲しいのか……………」

「え……………」

急いで振り向くと、 3人の女性が立っていた…………。その3人の姿は1人は白い服を着て髪型が栗色のサイドテールの女性、2人目はショートヘアーの茶髪に髪留めをしている女性、3人目は黒い服に裏地が赤の黒いマントを羽織った金髪の女性、その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分にしか見えない。

「力を欲しい…？ 何のために……………」

「ん？ あ…よくわかんね…そうだな。みんなを守る…………いや、それって当たり前のことかもな……………」

「みんなを……………」

女性の言葉に、少年はまた考える。自分の命を優先に人を守る事など、考えられることではない。彼にとってはそんなことが思い浮かばないのが正しい。だが彼は理解した。

短髪の少年は目を覚まし、時計を見る。朝の7時。彼は窓を開けた

……

「急に風が強くなったな。」

目が覚めると、まだ意識が覚醒していないのだが、今日は何やら身体中に冷や汗をかいていた。

「んっ？」

彼は振り返った。すると、目の前に何かが落ちていた。拾い上げて周囲を見渡した。

「・・・紅い宝石？」

それは、赤色でシンプルな宝石だった。もう一度、辺りを見回したが人影は無かった。

「ビーダマ？…にしてはデカすぎるな・・・何の宝石だ？」

少年は不思議そうに宝石を見ていた。

・・・彼 ”高町レイジ” はこれから起こる何かを感じながら。

”私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室”

「おはようございます」

「」「」「おはようございます」「」「」

今は朝のホームルーム。まだ教師は話を続けている。

「・・・というわけで今日は1時限目から移動教室となります。必要なものだけでもって、さっさと移動しましょう。」

――数時間後 昼

「やっと、昼か？」

午前中の授業は全部、聞き流していたレイジ。

「よっ、高町レイジ!!!」

「おう、中島ホクト。」

今、挨拶したのは「中島ホクト」レイジの同級生で同じクラス。格闘技ヲタクで、特撮ヒーロー、アニメヲタクだ。

「聞いたか？レイジ。」

「何を？」

ホクトがきくと、

「”メタルヒーロー”だよ！」

「おい、またその話かよ……」

「いいだろ別に！」

またかよ……。と思うレイジだった

そして更に数時間後…

同場所 1 - B教室 放課後 16:15

「以上が連絡事項だ、週末で遊びに行く時は何人か友達を連れて行動するように！以上！！」

「起立！、礼！、解散！！」

学級委員長がそう言った後、クラス全員は教室から出て行った…

とある通り

「じゃあなレイジ、また学校でな。」

「おう、また学校で。」

レイジはふらふらになりながら帰宅する。

「ただいま、母さん。」

帰ってきて、玄関で靴を脱いで上がったばかりなのにも関わらず、

「お帰りなさい。ねえレイジくん、御使いにいつて来てくれる？…
ハイ！これ、チラシね！」

翠屋の店長にしてレイジの母、高町 なのはに御使いを頼まれた・

「・・・わかったよ。いつてきます！間に合ってくれよタイムセー
ル！..！」

どこぞの特撮ヒーローの様に、レイジはスーパーへと走っていた。

「ん？ 誰だろ」

レイジが出た後、母はFAX機能を持った留守番電話機のランプ
が光っていることに気付いた。点滅する再生ボタンを押すと合成音
声が録音された日時と件数を告げ、メッセージが流れた。

『ああ、うん……俺だ、母さん、レイジ！元気か？』

「この声は、士郎君ね？」

発信者は高町家の長男”士郎”だった。

『今月は仕事が忙しくて、次に帰るのは来月になると思う』

レイジの母がカレンダーを見ると、まだあと半月ほど残っている。

『母さんとレイジなら大丈夫だと思うけど、何かあったらオレの携
帯電話に連絡を入れてくれ。』

本当は職場の連絡先も知りたかった様だが、なぜだか教えてはくれない。レイジは気にしてなかったが・・・両親は困ったみたいだ。

『まったく、仕事仕事と息子らしいことも兄貴らしいことを口クにしていないな。みんながしっかりしているからこそなんとかなるんだけど……。』

「そんなことはないよ、土郎君が居たからこそレイジ君は頑張れるんだよ。」

と母、

『最後になるが・・・レイジ、帰ったら久しぶりに特訓だ。』

メッセージはそこで終わった。

次の日…

教室は今日入ってくる編入生の話で持ちきりだ。

「おい、レイジ」

「何だ、ホクト？」

「今日って編入生が入ってくるって聞いているけど少し遅すぎないか？」

悪友のホクトはレイジに聞いてみた。

「そうだな、大方初日のお前みたいに寝坊か何かだろうな。編入生の事が気になるのは分かるけど、それで足元をすくわれなよ。」

「分かってるよ!」

ホクトがそういった時、クラスのドアが開き担任先生と一緒に見知らぬ生徒が入ってくる。

「全員揃ってますね。これよりHRを始めます。」

黒板の前で可愛く笑うのは担任の”虹原いんく先生”。
大人なのだが、とてもそうは見えないロリ体型。どこでも小学生と間違われる感を醸し出しているが、左手をよく見ると、薬指に指輪がはまっている(驚)。

「はい。それではスクライア君、自己紹介をしてください。」

「はじめまして。シャルル・スクライアです。気軽にシャルルと呼んでください。」

趣味は読書、特技というほどでは無いですが、学問と家事全般がそれなりに出来ます。よろしくお願いします。」

クラスメート(女)全員がキヤーキヤーうるさい。

「皆さん、よろしく願いします！」

『はいっ！』

主に女子が中心となつて元気な返事。そんな中、彼は心の中で「れまでの出来事を考えていた。」

「高町くん？」

「あ、すみません。えー……えっと、はい。」

呼ばれたレイジはを見るようにして頭を下げた。「それより、いんく先生の声が自身の母と声が似ているような？」

「次、ル・ルシエさん」

数分後…

自己紹介が終わると、いんく先生は脚立の上にとった。

あれで背伸びまでしてるんだから、バランスは大丈夫なのか？とクラス全員が見守る。

「はいはい、皆さん！まだうちのクラスは他校との合同『学園祭』の出し物が何一つ決まってないんですから！！朝のHRホームルームを使

って決めてもらいますよ！！ということでバニングスさん、お願いしますー」

「わかりました」

ガタリ、と音を立てながら立ち上がる学級委員長「バニングス」。

「みんな！！うちの学校でまだ決まってないのはこのクラスだけなのよ！？何か案がある人！！」

そういつとバニングスは黒板に、『教室での出し物』『舞台の出し物(クラス全員)』『舞台の出し物(少数ずつ)』と書いていく。

すると、ホクトが手をあげた。

「俺は、メイドを始め・・・あらゆる属性の女の子を出す喫茶店がいいと思いま・・・アベシツ！！？」

バニングスのチョークがホクトの脳天にグレートゲキレッツアタックする！

「今度言ったら、風穴開けるわよ！！次！！」

しかも華麗にとばす。と、こんな具合で進んで、教室での出し物は『喫茶店』になり、

担任に促され適当に席に着きHRを終えた。

それから数時間後：放課後 16：15

「あゝ疲れた」

このクラス……、本当に疲れそうだ……と思う、レイジ。

「レイジ、帰ろうぜ」

ホクトが俺に呼びかけてきた。幼稚園からの友人と言うより、もはや腐れ縁だ。

時刻は夕方、

学校を終えたレイジはおつかいをすませて、いつも通りの道を通り自宅へと向かっていた

特に何も変わり無く自宅へと向かっていたすると、

（……君のデバイスはどこだい？）

「あ？」

ふと、何処からか声が聞こえた、声からして少年のようであった

「……やっぱり、君が持ってたか。」

「！？ お前は、確か……転校生の”スクライア”か」

「シャルルでいいよ。ちょっと、いいかな？」

レイジの後ろには、転校生のシャルル・スクライアがいた

「……まあ、寄り道するつもりだったからいいぜ。」

1人呟いてレイジは彼の話聞きながら、何時も通る道とは違った道を進んだ。

レイジとシャルルは公園のベンチに座り込んでいた

「……へえ、この”赤い宝石”お前のか？」

レイジは立ち上がり

「……ほらよ、返す。」

「いや、それはもうレイジ君をマスターとして選んだから……君にしか使えないようにプロテクトがかかってるんだ。」

レイジは驚いた

「ふえ〜、随分ハイテクなビードマだな？」

「……ビードマじゃないってば。」

「ま、いいわ……一応、貰っとく。」

帰宅しようとした、その時……。

キイイイインツ

「ツ?! な、なんだ?!」

突然、妙な感覚とキイインという耳障りな音が、レイジを襲った。

ドガアアアアン!!!

突如向こうの方から爆発音が響いた。それを聞いた途端、周りにいた人々が取り乱しながら音と逆方向へ急いで逃げ出す。

……カッ! ……

建物に何かに気づいてとある方向を指差す。歩行者がその方向を見ると、其処には建物の壁をぶち抜き、真っ赤に爛々と光る目を持った得体の知れない怪物がでてくる光景があった。

「なんだ!?! あの生物ナマモノは!?!」

レイジはその光景を啞然として見るが、化け物達は突然次々と爆発を起こし、辺り一面を火の海に変えていく。

「やっぱ!?!」

「と、とりあえずどうしよう?」

怪物は壁の破片を撒き散らし、不気味な唸り声を上げながら、弾丸じみた動きでレイジ達を追う。

「いったん逃げよう!」

「いや、こういうモンに限って背中を見せると何か・・・あぶねえッ!」

そうしている内に動き出した怪物が腕のニードルで攻撃、レイジはシャルルを押し、自分もニードルをかわす。

「・・・つ、悪い。大丈夫か?」

「...平気。それよりも・・・!?!」

その時、不思議な事が起こった・・・レイジの服のポケットが光りはじめる、彼は取り出した『紅い宝石』を自分の前にかざす。

「!?!? 光ってる・・・。」

《stand by ready》

『紅い宝石』は粒子化し、レイジの携帯電話に吸い込まれるよう入っていった。

「…俺の携帯!?!?!」

彼の”旧式の携帯電話”がメカニカルな携帯電話型ツールに変化する、

(…彼には資質がある…よし!)

シャルルは頷いて、

「レイジ君、セットアップだ!」

「ちょっと待って!!?!」

突然の事だが彼は…

「なんだか、解からないけど…ん?」

このツールの使い方が脳裏に浮かんだ。

(…つか…?)

レイジは携帯を開くと、素早く『CVK792-A』+エンターの順にキーを押した・・・すると急に光りだす。

《sealing mode》

(…確か、こっ…?)

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!

「セットアップ!」

《set up》

体にコンバットスーツが装着。

「何だこれ、姿が変わった!?!」

”次元戦士エクセリオン”…… コンバットスーツをセットアップするタイムは、わずか0.05秒に過ぎない…… では、セットアッププロセスをもう1度見てみよう……

「セットアップ!」

《set up》

「セットアップ」 それは 高町レイジが力を発現させ、”先ほど変わったレイジの携帯”に圧縮されている、微粒子状に分解された桜色、黒、金色の”フィン形特殊軽合金”が体に吹き付けられるようにスーツを構成していき、”次元戦士エクセリオン”となる現象である……

発光する複眼、ベルトの腰に本の形をしたツール、レイジが小学生の時に着ていた、聖祥大付属小学校の制服のデザインに似たボディ、胸部の所に金属パーツが装飾され、腕、腰の部分に青いラインが入っており、青いレッグには赤いラインが入っていた。

そうこうしている内に・・・怪物が、変身したレイジ・・・”エクセリオン”に向かって戦闘態勢を整え、上空に飛び上がった。

一気に攻撃対象と見られたエクセリオン目掛けて落ちて来る。まるで巨大な鉄球の様だ。

「来るよ!!」

ウオオオオオオツ!

シャルルは、目の前で茫然としているエクセリオンに向かって叫んだ。

エクセリオンが怪物に挑む。

怪物がエクセリオン目掛けて突進する!

「破あつ！！！」

反射的にエクセリオンが拳を振るって殴りつけ、投げ飛ばす。

「これが……これが俺の力？」

自分の力に驚くエクセリオンの隙をつき、怪物の攻撃が炸裂。

「チツ！ 油断した！」

怪物がエクセリオンを捕え、自分ごと空間に飛ばす。

この怪物は地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！」

怪物の長い腕を振りほどもぎ、蹴りが炸裂する。

距離をとり、彼は啞然としていた。

怪物は爆発した様に飛び散ったが、みるみるうちに元の姿に集まって行く。

「自己再生？」

するといろんな所から障害物が迫ってくる。

「11のっ……！」

エクセリオンのパンチが障害物を破壊。

「行くぞ！ はあっ！！」

怪物がエクセリオンを翻弄。

今度は緑の炎が吹き出す。

「あぶねえッ！！」

すると今度は怪物が迫ってくる。

「やっぱり、コイツ再生してやがる！！」

この怪物は、魔空エネルギーを得て、地上の3倍のパワーを持つことができるのだ！

元の姿に戻った怪物は唸り声を上げ、体に生えている触手を弾丸の様に繰り出して来た。その時、シャルルの念話が聞こえる。

『レイジ君！何でもいいから、魔法を「はあ！？馬鹿言え、俺が使えるわk・・・」いいから！』

すると彼は別の空間に飛ばされ、怪物の猛攻に苦戦する。

相手を突き飛ばし、距離をとると・・・複眼が発光し、情報が投影される。

「フラッシュインパクト？・・・やってみるか！」

エクセリオンは怪物の攻撃を、両手で受け止めた。

腕にエネルギーが伝達され、フィンが展開：桜色、黄、黒のフィンが現れ、発光した。エクセリオンは体制を低くし構えた。

エクセリオンと怪物が格闘を繰り広げる。

「ん？何だかわからないが・・・腕に力が漲ってくる。」

強烈な光が輝く・・・両手に集中し出し、彼の力を溜めていく。

『フラッシュインパクト!!』

フラッシュインパクトが炸裂。

桜色のエネルギーを纏った光の拳で怪物の体を貫く。

ギエエエエツ!!!!

一閃と共に、怪物の体にぽっかりと風穴が開き、爆発四散。光の粒子となり、跡形も無く崩れ去った。

「なんだか、面倒事に巻き込まれたな・・・。」

魔空間も消え、元の世界に戻る。

かくして、次元戦士エクセリオン…… 謎の未確認生命体との、
熾烈な戦いの幕が切って落とされた。セットアップせよ、次元戦士
エクセリオン！

T
O

B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

St・s・2 その名はエクセリオン！

私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室

「はああ……………」

なんだか午前中は、授業が耳に入ってこなかった。

レイジは集中しようとしても、頭のどこかでこれまでの事がグルグル回ってしまっている。

「うつつ……………」

彼は思わず机に突っ伏すと、完全に呆けてしまっていた。そんな彼の所に悪友が寄って来る。

「どうしたんだ？ レイジ」

「ん〜？」

「やっぱ、気を遣いすぎて疲れたか？」

「あ〜」（駄目だ、全然言葉が出てこない。もうちょっと愛想よくしたいんだけど、完全にガス欠状態だ。）

「おいおい、本当にどうしたんだよ」

悪友も心配する。

「いや、なんでもないよ。気疲れしただけかもな。」

「はははっ、『最強の男』の息子も流石にぐったりか？」

「…ここで、それは言うなって…だりい。」

「しっかりしろよ、おい」

「ここで、彼は1つ疑問に思う。

「ああ、ありがと。」（でも、待てよ。昨日あれだけの事があったのに、そんなに表だって噂とかになってないな。）

「で、疲れてるところなんだけど、レイジ、お前昼飯どつするんだ？」

「あっ、そうか。もう昼か？」

時計に目をやると12:00を回っていた。

「どつりで、腹減ってる訳だ。」

「どこまでボケボケだよ、レイジ？」

「悪い……確か母さんの弁当が…。」

「そついえば、「おばさん」の作る飯美味いんだよな？」

「お前、母さん本人の前で「おばさん」って言ったら怒られるぞ。」

母、本人曰く”永遠の17歳”

「ははっ、ワリイ。」

「…さて、屋上で食うか。」

そついうと、レイジは屋上へと向かった。

「えっ…?」

「あつ、高町…レイジ君?」

振り返ると、そこには少女の姿があった。

「えーと、”風斬・テストロッサ・アリシア”…だったっけ?」

「うん…でも…アリシアでいいよ。」

クラスでは、姫、天使、女神等と言われている”風斬・テストロッサ・アリシア”だ

「じゃあ、俺もレイジでいいよ…っっていうか、俺の名前知ってるんだ?」

「えっ、うん、まあ生徒会長だから…」

あまりの説得力のない答えに彼は思わず突っ込みを入れてしまう。

「…その生徒会長様は、全校生徒の名前を覚えているのか?」

「うん…そう。」

そんな事いった割には、彼女の目は泳いでいた。

「それより、レイジ君。お昼食べた？」

「あ？いや、まだ手に持ってるけど…どうかしたのか？」

彼女の手にはレイジの弁当箱と同じくらいの大きさのランチボックスが、

「屋上で一緒に食べる？」

「別にいいけど…」

「よかった。」

流石に断る理由がなかったのか、レイジはアリシアと学校の屋上へと上がっていった。

私立聖祥大学付属高校 屋上

屋上は涼しい風が吹いていて、ロケーションも最高である、アリシアは持参したランチボックスを黙々と食べていた。

「それにしても、静かだな。」

「美味しそうね……」

レイジがお昼を食べ始めると、アリシアはまず、そこに食いついてきた。

「翠屋…知ってるだろ？俺の親はその店主だ。」

「あつ、そ、そうなんだ……」

そう言うと「なんだか妙に気まずい」と思っていた彼は辺りを見回してみる…だが、二人以外の人影はなく異常なほど静かである。

「食った食った…さて、教室に戻るか…。」

「…ご馳走さま。」

その時だった。

ヒュンッ！

「危ないッ。」

「キヤアッ…。」

異形の姿をした緑色の未確認生命体が現れる。

『……早くニ確定ニ済マセマス』

アリシアが異形の姿を見て後退り。

TVでも、学校でも、未確認生命体には要注意といわれているため、用心している様子。それでも、この異形の姿だ。一人の少女が見てしまえば後退りする気持ちも分からないわけでもない。

「クラールヴィント。導ケ！」

指の飾りが振り子型へと変形してアリシアに向けてはなってきた。

「きゃあああああああ！！！」

逃げ遅れたアリシアは、そのまま振り子による攻撃を…

「セットアップ！」

《set up》

キーンッ！

・・・当たる前に防いだ。

「ナニ！？」

振り子攻撃を妨げるエクセリオン。

「キサマハ！？」

レイジがエクセリオンにセットアップ。

「次元戦士エクセリオン!!」

次元戦士エクセリオンは、わずか0.05秒でセットアップを完了する。ではその原理を測定しよう…… 次元戦士エクセリオンは、微粒子状に分解された3色の”フィン形特殊軽合金”を浴びて、わずか0.05秒で、セットアップを完了するのだ!

「そら!」

攻撃を防いだその拳が振り子を弾き飛ばした。

「ぐあ!」

反動で転げまわる未確認生命体。

「あ……レイジ君?その格好は……」

少女の前に立ちはだかるエクセリオンの姿。

緑の生命体の攻撃をかわし、アリシアの方を見る。

「アリシア!…ん?」

彼女の後ろに”女性の姿”が一瞬だけ見えた、その時だった…複眼が発光し、情報が投影される。

「『Aggressor Mode』…、なんだこれ?」

すると、さらに情報が浮かび上がっていき、黒い文字で『Aggr

essor Mode』と書かれていた・・・そして、エクセリオンは彼女の問いに、

「気にするな、只の”コスプレ”だ。」

「え？え？」

いきなり現れた白騎士の姿に、少女は戸惑いを隠せない。

「とにかく、今のうちに逃げる。コイツは俺が引き受ける！」

「でも・・・」

少女は一度未確認生命体の異形の姿を確認する。

おぞましいその姿・・・アリシアは身震いし。

「ごめんなさい！」

その場から立ち上がると急いでその場を後にした。

「空間に……引キズリ込ンデヤル！！」

この未確認生命体は、地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！

するとエクセリオンは別の空間に飛ばされる。

内部が揺れ、エクセリオンはバランスを崩す。

「ククク、我々ハコノ空間で、3倍ノパワーヲ持ツコトガデキルノ
ダ……」

未確認生命体の猛攻に苦戦するエクセリオン。

「フン！」

「な、何っ！？手品か何かか!？」

エクセリオンは自分の背後から出ている”それ”を見て驚きを隠せ
ない。

「マダダッ！」

エクセリオンが見て驚いている”それ”とは……。
未確認生命体の腕だった。

緑の未確認生命体は、緑色の空間に左手を突っ込んでいた。
一旦抜いてからもう一度左手を突っ込む。

「チツ、面倒なやつだ！」

エクセリオンは拳を強く握り締めていた。

携帯型ツールへCVK792-Rと入力する。

「……お前らが3倍なら……こっちは4倍だ！」

《Aggressor Mode!》

エンターを押すと、コンバットスーツのカラーリングがネイビーブルーとブラックにかわる・・・そして、左腰に携行されるI P A D型の専用ツール。”リインブッカー”を取り出しソードモードに切り替える。

《Sword Mode!》

「リインブッカー…ソードモード!」

電子音声が響くと、刃にバリア貫通能力を付加し、同時に刃部分を強化。

電子音と共に強化された刃は鋼鉄をも容易く切り裂く威力に。

「はあっ!!!」

エクセリオンは地面を蹴り上げ、高速移動をしながら未確認生命体にリインブッカーを振るう。

緑の生命体「!?!」

未確認生命体はエクセリオンの攻撃を、振り子でその刃で防ぐ。エクセリオンはリインブッカーを右手だけで持ち、左手を未確認生命体の前に出す。その左手に球体の波動弾が電撃を纏いながら形成されていく。

「ストレイトバスタ

!!!」

形成された魔力弾、超近距離で直射砲が未確認生命体に放たれた。

リインブッカーを防いでいた未確認生命体は避けることも出来ず直射砲をその胸に撃ち抜かれる。

「グアあああ!!!」

直撃を受け、未確認生命体の胸から火花が激しく散り、爆発し濁った宝石が弾け飛んだ。

エクセリオンが現実世界に戻る。

未確認生命体が消滅した跡に、そこには青く輝く『宝石』があった。

「な…なんだ…これ？」

気になったエクセリオンは何気なく拾おうと手を伸ばそうとした、その時だった。

「待つて！駄目だよ！」

違和感に気づき、駆けつけてきたシャルルが注意するが、言う間にエクセリオンは、宝石に触れたが・・・何ともなかった。

「ッ！なんで、何ともないの？」

「…さあな、処で・・・コイツはなんだ？」

「ロストログア」・・・これは、『ジュエルシード』かな？多分、リインブッカーを使えば、回収できるよ。」

「…OK、こうか？」

エクセリオンは宝石のほうへリインブッカーを向けた。

《Sammlung》

すると、光り輝く宝石のようなものがリインブッカーへと吸い込まれていった。

「……へえ」

その一部始終を目の当たりにしたエクセリオンは啞然としていた。

非現実的は慣れているが、ちょっと、面白い光景だったからだ。

「こんな感じで町内の平和を守る……って、俺のガラじゃないな。」

変身するとき、ため息をつくレイジ。

「ハハハ……」

この日からレイジの『ロストロギア』集めが始まったのである。

S t · s · 3 封・印・解・除 〈 r e l e a s e 〉

数年前、とある世界……。

「本日より三週間、君達の空戦教導を担当することになった。ちょっとハードな訓練になると思うがしっかりとついて来いよ」

「はい！」

戦技教導官、そして空戦魔導師の男は、今日も後進を守り、育て続ける

「さあて、それじゃ元気に頑張っていくか！」

一同「はい！」

それから、3年後。

「シャルル！」

その日……時空管理局のとある通路を
親友の名を叫びながら1人の少年が走っていた

「……どうしたの？フェルト……」

フェルトの叫び声に足を止め彼の方を振り向いた少年はシャルルついで先程までフェルトと同じく時空管理局の魔導師『だった』

「局を辞めるってどういう事だ!？」

シャルルの元に駆け寄ったフェルトは現実が信じられないという顔をしていた

「……………」プロト・レイジング・ハート”……………知ってるでしょ？」

「……………何があつたんだ……………?」

彼はシャルルの胸元を掴み訳が分からないという顔で叫ぶ

「……………僕は星光の遺跡の中で”プロト・レイジング・ハート”を発見して局に保管して貰ったんだけど、運んでいた時空間船が事故か何らかの人為的災害に会ってしまつて……………」

「……………そんなの……………お前が悪くないだろ……………」

「行つて来る。」

彼はフェルトの手をほどくと、目の前にあつた扉を開け歩き出した

「待て！シャルル！！」

「じゃあね…フェルト…」

フェルトの言葉を断ち切る様にシャルルが通過した
扉は閉じたのだった

「……さて…別れを言う人は彼だけ…？もう1人居たな…行く」

立ち止まって少し考え事をしていたシャルルに

「スクライア……」

「…先生…」

彼の前方から歩いて来たのは彼が局で
世話になった数少ない人物だ

「……本当にすまない」

「……先生が謝る事はないですよ……」

「……そうか……いや……人の感情に敏感な君だからこそ……もう此所にはいられないのか……」

「そういう事です……それでは、世話になりました」

彼は男に軽く頭を下げると歩きだし、直ぐに彼の視界からは消えてしまった

現在、”私立聖祥大学付属高校 1 - B教室”

レイジは学校の授業を受けつつ、シャルルから、これまでのことや大体の事情を聞いていた。

『端末』の補助による念話で、頭の中で話していた。

《…レイジ君、プロト・レイジングハートの調子どうかな?…》

《…プロト・れ?…やっぱ、言い辛え…『レイフォン』!
それがいいな…》

デバイスに愛称をつける魔導師はよくいるが、彼のひねりのないネーミングセンスには、流石にため息をつくシャルル。

《…微妙だけど、君が言い易いなら…それでいいよ。》

苦笑するシャルル。

《ところで…こないだ、現れた”魔獣”とか言う未確認…
あれはなんだ?》

《…あれは、元々この世界や僕のいた世界には存在しない…
いや、存在してはいけない生命体なんだ。》

《?...そんなモンがなんで...こっちに出てくるんだよ...?》

存在しないものが出てきた。気になるだろう。

《…おそらく…何者かが…送り込んできた…か。》

シャルルは、頷きながら…前に、ある人物から聞いたことを思
い出す。

《あれ程の生命体を生み出すには…『ロストログア』を使うか…S
+ランク

魔道師ぐらいか…?》

シャルルは難しい顔をして、ノートをとりながら、

《…それにしても”マリアージュ”って、何だろう?聞いたこと
もない…。》

《まり?…なんだそれ…》

レイジが聞くと、我に返る

《…うっん、なんでもないよ》

《なあ、シャルル。ロストログアって、何んだ……？》

《“遺失世界の遺産”…次元空間の中にはいくつもの世界があつて。その中には、良くない形で進化し過ぎてしまった世界の技術や科学が、自分達の世界を滅ぼしてしまうんだ。その後に取り残された、危険な遺産…それらを総称してロストログアと呼ぶんだ……。》

《…そうなんだ……》

レイジはシャルルの難しい話を聞き、額に汗をかいた。

次の日… 学校が終わり、自宅に帰ったレイジは、何かの異変に気付く。

同じ様に、シャルルも何かを感じ取ったかのように、背筋に何か冷たいものを感じた、彼等は念話で話しながら、自転車で街中を走っていた。

シャルルとは現場前で合流した。そこは近所の高台に在る神社である。

2人は神社の長い石段を一気に駆け上がった。

「あれかつ!？」

石段の天辺に綺麗に着地したレイジ。鳥居の向こう側に、異形の姿があった。

大きい体の目が複数ある、クモの様な見た目をした魔獣だ。

シャルルは魔獣を見て、

「…他の生物を取り込んでいる・・・!? レイジ君、あれは多分・・・。」

「他の魔獣より、能力が上がってる・・・だろ？」

レイジはレイフォンを開くと、素早くキーを押した・・・すると急

に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ！

「セットアップ！」

《set up》

次元戦士エクセリオンは、わずか0.05秒でセットアップを完了する。次元戦士エクセリオンは、微粒子状に分解された3色の”フィン形特殊軽合金”を浴びて、わずか0.05秒で、セットアップを完了するのだ！」

体にコンバットスーツが装着され、頭部に仮面が形成される。

「はああああっ！！！」

突進して来る魔獣に、エクセリオンはパンチを叩き込んだ。

強烈な拳が炸裂し、魔獣が吹っ飛ばす。

(…バトルスタイルなら、陸戦AAAかも…)

シャルルは戦法を見て、感心した。

そうしている内に…エクセリオンの複眼が発光し、情報が投影される。『Gun Mode』と書かれていた…、

「『Gun Mode』…後で使ってみるか!」

エクセリオンは腰の”iPad形ツール”『リンブッカー』を一度ソードモードに切り替え、魔獣に向かって攻撃を開始する。

「ハアアッ!」

魔獣は前足でエクセリオンに攻撃するが、避けられてしまい、反撃させられる結果になる。

『グオオオッ!』

この魔獣は地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作り出すことができるのだ!」

「畏にぶっ飛んでたまるか!」

魔獣が飛び込む。

「チツ！」

魔獣の猛攻に苦戦するエクセリオン。

「あいつやっぱさっきより……強くなってるな！……だが、1度でダメなら何度でも決めるだけだ！」

《G U N m o d e》

エクセリオンは『リインブッカー』をガンモードに切り替え、魔獣の攻撃にひるまず前に突き進む。

《D i v i n e S h o o t e r F u l l P o w e r》

「はああっ!!！」

エクセリオンの凄まじい銃撃に魔獣は抵抗出来ずに後退していく。

《S w o r d m o d e》

「……紫電一閃!!！」

そして勢い良く、リインブッカー（ソードモード）を構えながら魔獣へと突っ込み、縦に一刀両断していった。

「はああああッ!!！」

『ヌグオオオオオオーッ!!』

紫電一閃を受けた魔獣は断末魔をあげながら碎け散っていった。

空間も消え、元の世界に戻る。

「・・・未確認生命体を倒すなんて大した者だ。」

「誰だ？」

後ろを向くと、発色のよい亜麻色の整った髪、服装は黒いスーツに色柄もののカッターシャツを着用した男が近づくと、エクセリオンはロギアを回収すると変身を解いた。

「高町・・・レイジ君、だね？」

「誰？」

その後、レイジは男に聞いた。

「あ、そうだったね。俺はこんな者だ」

男がエクセリオンに渡したのは名刺。書いてあったのは・・・。

『ティータ・三浦・ランスター』

と書かれていた。

St · s · 4 Giant Step

海鳴市警察署

”ティード”という男とここの休憩室でレイジは話をしていた。

「えっと・・・君がさっき変身してた”あれ”のことだけど・・・
？」

彼はカップに紅茶を注ぐ、その時に、ポットをかなり高い位置に引き上げてまた戻すという、独特な注ぎ方をする。レイジは思った、
「この人はかなりの紅茶通だ。」

「・・・はい。」

「なんでもいい。詳しい事、聞かせてくれるかな？」

「良く知らないんですよ...ただ、『エクセリオン』ってあれの名前以外。」

ティードはレイジに話しを聞いていたがレイジは答えられなかった。自分もこないだ、変わったばかりだからだ。

「エク…？話しが全然進まない…。」

「…拾った宝石が俺の旧式携帯に吸い込まれたら変わって…自分も変わって、もう何がなんだか。」

「…そうか、悪かった。」

すると、一人の女性がやって来る。

「…お待たせしました。調べてみたんですけど…解析できませんでした…。」

「弓華君か？ご苦労…どうだった？」

「あの”レイフォン”はインテリジェントデバイスともストレージデバイスともブーストデバイスとも呼べない代物なんです。もちろんアームドデバイスではないですし、見た通りユニゾンデバイスでもありません」

今、彼女が述べたのはデバイスの分類名だ。デバイスは魔法行使を補助するための道具だけど、使う魔法は人それぞれ。だから種類もたくさんある。

簡単に言えば、インテリジェントデバイスが疑似人格によって主

人をサポートしてくれるデバイス。

ストレージデバイスは疑似人格を搭載していない一般的なデバイス全般のこと。

ブーストデバイスは補助魔法の使用をサポートする専門的なデバイス。

アームドデバイスはベルカ式という特殊な魔法の使用を補助し、さらには名前通り武器としても使われるデバイス。

ちなみに一般的にはミッドチルダ式魔法が使われる。

最後のユニゾンデバイスは魔導師とユニゾンして本人の能力を底上げるデバイス。普段は人の姿を取っている。

「あの、レイフォンはですね、ある意味夢のデバイスですよ。何せ、リンカーコアを持たない彼が魔法を使えるようになる奇跡のデバイスですからね！」

その言葉に、ティータの思考は止まった。

「待て。じゃあ、彼が魔法を使ったのは……」

「はい！レイフォンのお陰ですね！」

弓華は満面の笑みで答えた。

「だが、どうやって？」

「簡単な話です。レイフォンにはリンカーコアと同様の魔力精製器官が存在するからですよ！」

リンカーコア。それは特定の人物しか持たない魔導師の証だ。あらゆる場所に存在する魔力素を取り込み、魔力に変換する器官。数多の研究者が解明に挑み、しかし未だに多くの謎を抱えている器官だ。

「弓華君、そんなことが有り得るのか？」

「まあ、私だつて驚きましたよ・・・さて、取りにきてくれるかな、レイジ君？」

弓華は小首を傾げる。

鑑識課

コンソールの上に、彼の端末、レイフォンが置かれていた。

「これは、君が持っていた方がいい・・・また、あの魔獣が出るといけないからね！」

「えっ？・・・いいんですか？」

「・・・分解できないし、君以外に使用できない上に、他人に触れ

ることが出来ないようにプロテクトがかかっているしね・・・スキヤニングはできたけど・・・。」

レイジはコンソールの上にある自分の端末をとる。

「早く帰りたいんですけど・・・いいですか？」

レイジは疲れた様子で言った。そんな中、休憩室にあるテレビから臨時ニュースが流れた。

『突如オーロラと共に現れた未確認生命体は街にいる人々を襲い始めました。一部の情報によると、オーロラの中にある、濁った宝石が未確認生命体となって現れる等...』

「クツ...行くしかないか...」

「...このままじゃ被害が広がってしまうわ」

ティータは未確認生命体達を殲滅しに警察署を抜け出そうとする。
その時...

『うわァー.....!...!』

「…あれ、なんだろう？なんだか今、すごく聞き慣れた声が聞こえたような…」

突然テレビから聞き慣れた声が聞こえ、レイジはテレビを見た。其処に映っていたのは……

未確認生命体の攻撃から必死に逃げているレイジのクラスメート、中島ホクトの姿だった。

「な、なんでホクトがあんなところに?!」

レイジは未確認生命体の攻撃をかわしながら逃げるホクトを見て驚いた。

「あの……どうかしたの？」

「レイジ君、彼は君の知り合いか？」

レイジの表情は険しいものだった。

「ええ!…つたく、こんな面倒な時に…あいつを助けに行くか!」
するとレイジは走り出した。

「えっ!?!ちよっと!」

レイジはまずホクトを救出する事を先決し、急いで警察署から出ていった。

「待つんだ、レイジ君！」

とある通り

壁に叩きつけられ、身動きできないホクトにちかづいてくる、紅い未確認生命体は手にしたハンマーを振り上げる。

ホクトは震える傷だらけの手で落ちていた鉄パイプを紅い未確認生命体に向けるが、視界が霞み。腕が震えて狙いが付けられない。

(こんなので、おわりなのか？いやだ……まだ、見終わっていないアニメが……マンガが……)

ホクトはここには、いない悪友の名前を心の中で叫ぶ。

(レイジッ！！)

彼はぎゅっと目を瞑る。だが、降ってきたのは、ハンマーではなく人の声。しかも聞いた覚えのある声。誰なんだ？

「目を瞑ると危ないだろ？ホクト。」

恐る恐ると眼を開けると、目の前には発光する複眼、ベルトの腰に本の形をしたツール、聖祥大付属小学校制服のデザインに似たボ

デイ、胸部の所に金属パーツが裝飾され、腕、腰の部分に青いラインが入っており、青いレッグには赤いラインが入っていた仮面戦士”エクセリオン”の後姿。

その戦士の右手は、あのハンマーの先端を握っている。

「アクセルスマッシュ！！！」

エクセリオンは懐に飛び込み、間合いを縮め、中心を目掛けて紅い未確認生命体に殴かかる・・・右手で『アクセルスマッシュ』を放ち、今度は左で放つ。

グオオオオオオツ！

すると、謎の生物は小さい鉱物を出しながら吹き飛んだ。

「空間に……引キズリ込ンデヤル！！」

この未確認生命体は、地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！

…エクセリオンは構え、紅い未確認生命体を睨んだ。

紅い未確認生命体は後ろを振り向かずそのまま後退し、体制を整

えた。

エクセリオンは紅い生命体の姿を捉えていた。

何かを展開しているが、何をしようとしているかはわからない。

紅い生命体は左手に小型鉄球を四個出現させ、放り投げる。

『シュワルベフリーゲン』

四個同時に打ち付けて、戦士に向けて放つ、鉄球はこちらに向かってくる。

「くっ!!」

エクセリオンは鉄球四個をどう巻くかを考えながら走っていた。

一直線で射出されてそれで終わりというわけではないようだ。

その証拠に誘導弾のようにして、しつこくついてくる。

右へ左へと道路を駆け回る。

「（キリがない…だったら…）フラッシュインパクト!」

エクセリオンは飛翔して、追尾してくる鉄球を桜色のエネルギーを帯びた右正拳で鉄球を弾いた。

目論見通り、鉄球はすべて破壊された。

「オラアアア！」

紅い生命体は手にしたハンマーを右斜めに振り下ろしてから何かを展開させる。

「カートリッジロード！」

紅い生命体の手にしたハンマーのハンマー部分が自身に向かってスライドする。

ガシユンという音を立てながら。

冷却処理をするための通気口から蒸気が噴出す。

手にしたハンマーはハンマー形態から削岩機の先端のような状態になった。

「ツブス！」

紅い生命体はこのとき『修羅』となった。

（なにいつ！？）

エクセリオンは紅い生命体の手にしたハンマーの形態変化に驚いた。

「ブチ抜ケエエエエ！」

先ほどの尖った部分とは違う明らかに噴出口の部分が点火される。

ブシューウウウという音を立てる。

最後に大きく巨大な武器を振り回した。

「ヤバッ!?!」

エクセリオンは後方の障害物へと吹き飛ばされた。

「クッ!?!」

別の空間に飛ばされ、障害物に叩きつけられた。

「どうする?あの化け物に、どうやって?」

エクセリオンと紅い生命体は体勢を直し、再び戦闘に入る。

「はあああああああああああ!?!」

『パンツァーシルト』

何かの障壁が発動し、攻撃を受け止める。

「くっ!かてえ」

ぶつかり合った衝撃は、以前の何かの障壁とは違い明らかに強化されていた。

(まさか同じ攻撃が通用しないなんてな…接近戦は不利か!)

紅い生命体はエクセリオンに向けハンマーを振り下ろす！

「カートリッジロード！！クラエ！ラケーテンハンマア！」

エクセリオンは少しあせっているようだった。

「ぐあっ！くそっ・・・だったら、これだ！」

その声に応じ、エネルギーを両手にチャージ。

「デイバイン……バスターア……！！！」

エクセリオンは両手に集めたありつたけの力を紅い生命体のゼロ距離で解放し、砲撃技を発動して紅い生命体を撃ち抜く、防御障壁がガラスのように砕け散った

「……とどめだっ！！フラッシュインパクト！！！」

そしてエクセリオンは紅い生命体目掛け、胴体を貫く。

「ウボアアアアア！！！」

強烈なパンチによるトドメの一撃が直撃し、紅い生命体はガラスのように砕け、大量の宝石が辺りに散らばる、

エクセリオンが現実世界に戻る。

「とりあえずは勝った……のかな？」

「なんなんだ・・・一体？」

ティードは不思議そうに言った。

海鳴市警察署。

「……なるほど、大体解かったよ。」

椅子に腰掛けているティードがそう呟く。

「戻ろうかと思ったんですが、あれはもう彼の物だし、未確認の事も気になりますしね。」

シャルルがそう言った後、ティードは立ち上がって、お茶を淹れ始める。

「まあ、これでも飲んで落ち着きなさい。」

カップに紅茶を注ぐ、その時に、ポットをかなり高い位置に引き上げてまた戻すという、独特な注ぎ方をする。

「…いただきます」

少し躊躇していたシャルルだが、最終的にカップの飲み口に口をつける。

「どうだ？ 俺がブレンドした茶の味は？」

「美味しいですね…なんか後引く美味さって感じですよ」

「お、分かってくれる人がいて嬉しいな」

落ち着いたと思ったら、やっぱり不安になってくるシャルル。果たして自分に何が出来るだろうか？と、

「大丈夫だ、心配しなくても…君になら何か出来るさ！」

「あ、有難うございます。」

不安になるシャルルをティードが励ます

~~~~~

時は経ち、今は夜

「ただいま」

レイジは自宅に帰宅して、ただいまと言う。大抵両親がおかえりというのが常だが、今回はかりは違った。

「おかえりレイジ」

「兄さん!？」

2階から士郎の返事が返ってきたのだ。レイジは急いで靴を抜いで階段を駆け上がる。

さらに数時間後… 19:55

「相変わらず世話をかけるな」

椅子に座るレイジの兄、士郎。前のテーブルにはケーキとティーカップが置かれている。

「それは言わない約束だぜ、ア・ニ・キ!」

「おう!」

兄弟仲良く、ハイタッチをするが……レイジの体が揺れる。

「痛<sup>い</sup>つてえなあ……」

レイジはお茶を淹れながら文句を言う。恨みがましい視線を送るが兄、士郎は知らん顔だ。

「参ったなあ……」

「どうかしたのか？」

レイジは難しい顔をしていた兄を心配する。

「いや、大丈夫だ、ごちそうさま。」

皿洗いをしながら返事する。

「おう。」

「……レイジ。お前変わったな！」

「そんなことないよ、兄さんみたいに、強さも技術もない……あんな格闘技もできない……俺、才能ないんだよ。だから……」

レイジの言葉に、呆れた表情の兄、士郎はデコピンをお見舞いする。

この威力、相変わらずだ。以前の『鉄パイプで鉄板を切る』なんて冗談を言っても信じられそうなくらいである。

「痛<sup>つ</sup>てえ……何すんだよ！」

「レイジ、お前は少し勘違いをしているようだ」

「か、勘違い？」

「お前は確かに未熟者だが、決して、弱くはないし、才能もあるし、俺に持っていないもの”がある・・・少なくとも俺はそう思う”

士郎の言葉に対して驚いた表情になるレイジ。

「それに、俺と親父がお前に教えることなんてなんもないぞ？」

「え？」

「前にもいったら？修行なんて何処でも出来るんだ、高みを目指し、学び、変わる。それさえあればな・・・それに、」

士郎は優しく笑いながらレイジに言った。

「なんだよ？」

「・・・そうだ、彼女の一人でも作ったらどうだ？お前は朴念仁だからな。いつも女の好意を誤解する。」

「・・・凜さんを困らせてる兄貴に言われたくないよ！」

「言ったな！？その言葉・・・高くつくぜ、来い！！！」

「ちよっ、ちよっと、あにき　アッー！」

このあとレイジが兄、士郎と組み手をしてレイジがボコボコにされたのは言うまでもない

彼の端末、レイフォンが光っている・・・”聖王のゆりかご”と書かれていた・・・。

謎の未確認生命体との戦い・・・これはまだ序章に過ぎなかった。

S t · s · 5 知恵と勇気だメタルヒーロー！

4月12日…PM7:39…

「チイツ！一体何がどうなってやがんだ？！」

とあるビルの屋上では男が消えていくオーロラを毒づきながら眺めていた。オーロラは消えたビルの元へ向かう為に屋上から降りようとするが……

「…ん？」

男の後ろからマゼンダの未確認生命体が姿を現し、男に近づき片手剣を構え、目の前に立ち止まっていく。

「…悪いが、お前に用はない。あばよ！」

男は姿を消した。

その頃…鳴桜邸、近所から『幽霊屋敷』と有名なボロい洋館。

屋敷から2人の少年、少女が出てくる。

男の方は普通のどこいでもいる高校生に見える。

「うわぁ！遅刻だ！」

女の方は普通の少女だ。

「トモが寝坊するからでしょー！」

翠屋、レイジの部屋

…ピピピッ！

「…ん？ホクト…？」

突然レイフォンがなり、レイジは電話を取る。

『レイジ、お前のバイク直ったぞ。』

「！？ 本当か……？」

『ああ…取りに来いよ。』

海鳴市にある町工場「中島製作所」

ここにやって来たレイジはホクトに会い、さっそくバイクを受け取る。

「で、俺のバイクは何処いった？」

はあ…とため息をついたレイジ、ホクトの父ナガレはお茶を淹れながら事情を説明しだす。

「ん？レイジ君の注文どおり、カスタマイズしておいたよ。」

「誰が、魔改造しろって言った!？」

ホクトに怒鳴るレイジ

「いや、だって・・・ヒーローって言ったら専用バイクだろ？」

「こんなに乗ったら、捕まるだろ!？」

そんな時、ティーダがやって来る。

「…いや、構わないよ。俺が色々手続きしておいてあげよう!」

「ティーダさん。」

そう言うと、”レイジのバイクだったもの”に触れ、答える。



「こういう力も後々、必要になるだろう?」

次の週の休日の朝、ティードは”洛高第三生徒会”の生徒会長である女性と一緒に私立洛芦らくろ和高校の屋上に来ていた。そこにはいかにも、剣で斬りつけたような痕がそこかしこにあった。

「これで、20件目ですね、ティード警部。」

「ああ、襲われたのは学園の生徒みいだな。どう思う?黒崎朱湮さん」

ティードはしばらく考え込んでいた。事件の始まりは一週間前だ。一週間前、洛高の生徒が、倒れている姿を発見された。この時、まだティードが未確認生命体の事件の件で、朱湮は生徒に気をつけるようにと伝えただけだったが、それから何度も同じようなことがあり、朱湮は知り合いであるティードに捜査協力を依頼したのだった。

「明らかに未確認生命体の仕業だと思うけど……この刃渡りの広い斬り後は何でしょう?」

「未確認生命体か。彼には悪いけど、レイジ君に任せよう。」

ティードと朱湮は現場を他の者に任せ、レイジのところへ向かったのだった。

「…で、如何してティードさんがここに居んの？」

あの事件後、休日にティード警部がレイジの家を訪ねる、パジャマから私服に着替えたレイジは、何故ティードが自分の家に来たのか理由を聞いてみた。

「君には今から、私立洛芦つゆ和高校に行ってもらいたい…」

如何やら彼にいつてもらいたい場所があるみたいだ…

「レイジくん…あら、お客様？」

「『自分』は特命係の「ティード・三浦・ランスター」といいます。…お邪魔してすみません『高町なのは』さん。」

「いいんですよ、それより警部さんうちの子がなにか？」

「余計な事聞かなくていいよ。じゃあ、俺いくから…ったく…」

彼の母はとてもアラフォーには見えなくらいすごく若く見える。

「…レイジ君？今、すごく失礼な事言わなかった？少しOH  
ANA SIIしようか??？」

彼の母は何故か黒いオーラを放ち、それを見たレイジは危険を察知し…。

「・・・言ってます、行って来ます！」

レイジは幼少の頃に父親から貰った木刀を持って家を出た。

### 私立洛芦和高校

キヤアアアアアアッ！！

突如校舎の方から悲鳴が聞こえ、レイジ達は思わずその方角を振り向いた。

「今の悲鳴は…？」

「何かあったみたいだな。レイジ君、行くぞ！」

「は、はい！」

ティードとレイジは状況を確認める為に校舎へと向かっていった。

洛芦和高校の中。この場所で、先程の悲鳴をあげた少女が片手剣を構えたマゼンダの未確認生命体に追われていた。

「こ、こないで…!」

『紫電一閃!』

少女は必死に命乞いするが、未確認生命体は聞く耳持たずといった感じで剣を振り上げた、その時…

「ハッ!」

少女が見たものはなんと…レイジが未確認生命体に木刀で攻撃をしているというなんとも異様な光景。

「向こうに行ってる!」

「うん!」

(ここで変身していいのか?やるしかないか!)

レイジは心の中で毒づきながらも未確認生命体を洛芦和高校の外へ誘き出す。するとマゼンダの未確認が話しかけてきた。

『ナンダ、貴様ハ?』

(…やっぱり、未確認は人の言葉を…?)

レイジは少し間合いを離し、レイフォンのエンターキーを押す…すると携帯が急に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!!

「セットアップ!」

《set up》

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。光が消え去ると、そこにいた彼はエクセリオンに姿は変る。

「ナニツ!」

”次元戦士エクセリオン”…… コンバットスーツをセットアップするタイムは、わずか0.05秒に過ぎない……

「次元戦士エクセリオン…… まっすぐ…… いくぜ!」

エクセリオンはマゼンダの生命体の攻撃をかわしながら応戦する。そんな中、近くにいたティータがエクセリオンに命令する。

「もっとしっかり相手をよく見るんだ、レイジ君!」

「分かっています……ん?」

エクセリオンはティータと話していると、彼の後ろに「オレンジ髪のツインテール少女」のシルエットが見えた。

「……どうしたんだ?」

すると・・・複眼が発光し、情報が投影される。オレンジ色の文字で『Optic Hide』や『Fake Silhouette』と書かれていた。

「ん？『Optic Hide』、『Fake Silhouette』・・・？やってみるか！」

エクセリオンはレイフォンにXC-03と入力する…

《Optic Hide》

すると、エクセリオンの姿が消える・・・そして。

「・・・確かに便利だ。ほらよっ！！」

後ろから吹き飛ばされる魔獣。

『グアアアアア！！オノレッツ！！』

滅茶苦茶な戦い方でマゼンダの生命体と戦うエクセリオンの銃器での連射力はティードの考えより速かった。

「なっ！？」

《GUN mode》

戦士は魔獣の攻撃にひるまず前に突き進む。

《Divine Shooter》

戦士の凄まじい銃撃に魔獣は抵抗出来ずに後退していく。

「これでっー！」

遠距離よりも近距離を得意とするエクセリオンは接近戦のソードモードに切り替える。リンブッカーからはオレンジの刃が形成された。

「真っ直ぐ…行くぜっー！」

「ナンドトツ！」

《Fake Silhouette》

エクセリオンの周りに何かが形成されると、その叫びと共にエクセリオンが数人に分身する。50人に分身したのだ。

『うおおおおおおお！！！！！！』

『！？』

その場にいたティード達全員が驚いた。

エクセリオン「達」はかく乱するように左右に散らばっていく。

『いけええええええ！』

四方八方から放たれる、銃と剣による攻撃の嵐。

『グオアアアア!?!』

マゼンダの生命体は断末魔の悲鳴をあげながらガラスのように砕け、  
宝石へと化していった。

その時だった、少女がこつち側にとんで来た。

「キャッ!」

エクセリオンが少女を受け止めると少年が目の前に現れた。

「大丈夫か操緒!?!」

「あつ、トモ。うん、なんとか・・・その、コスプレのお兄さん  
もありがとう。」

その言い方に、エクセリオンは少し怒る。

「だれがコスプレだ。俺も好きでこんなカツコ……ん、だれだ?」

エクセリオン達を影で見っていた別の何かが近づいてくる”狼型の  
未確認生命体”だ。

『グルル・・・見ツケタゾ。イレギュラーメ!』

「…………チッ」



「危ない！」

”狼型の未確認生命体”の攻撃をかわし、少年の方を見る。

「誰だ！…ん？」

彼の影から”漆黒の巨人”のようなものが一瞬だけ見えた、その時だった・・・再び、複眼が発光し、情報が投影される。青と銀色の文字で『Unchain Knuckle』と書かれていた・・・がその時、

「空間に……引キズリ込ンデヤル！」

この未確認生命体も、地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作り出すことができるのだ！

「またか・・・？やってみるか！」

エクセリオンは再びレイフォンを操作すると…

《Unchain Knuckle》

「はあああ！！！！」

繋がれぬ拳で空間を砕きつつ、衝撃波で”狼型の未確認生命体”を吹き飛ばした。

「もう一発!!」

「ナニツ!?グアツ!」

エクセリオンは両手の拳に何らかの力を集め、渾身の一撃を放った。

「フラッシュインパクト!」

「ぐうわあああああつ…!」

直撃。

「……終わったか。」

狼型の未確認が爆発し、濁った宝石が散らばっていったのだった。

エクセリオンが現実世界に戻る。

私立洛芦らくろ和高校前、

先ほど遭遇した少年は夏目智春、少女は水無神操緒というらしい。エクセリオンは変身を解き、彼等に事情を説明。

それはさておき、道の中央にバイクが停まっていた。

「何だあれ？」

「わゝ。かつこいいバイクだ。」

智春と操緒が不思議そうに言った。

すると、バイクに乗っていた漆黒のライダースーツの女性がこちらに近づいて来た。女性は端末でディスプレイを展開する。

するとモニターから一人の男が映し出された。

「な、何だ？」

レイジは驚いていた。

『始めまして、高町レイジ君！』

男は笑いながら言った。レイジは疑問に思っていた。何故男が自分の事を知っているのかを。

「だれですか？」

「……………それはこれから話そう。」

漆黒のライダースーツを着た女性が話すと、モニターの男が喋り始める

「申し遅れたなあ。ワイはヴォルケンリッター社の社長……………八神一郎”や。」

「ヴォルケンリッター社！？」

八神一郎の言葉に智春は驚いた。

「ヴォルケンリッター社？何だそれ？」

「ヴォルケンリッター社・・・ねえ、トモ！確か・・・」

操緒が智春に聞く。

「夏目君の弟さんかな？君のお兄さんとは、何回か”色々な物”を共同開発をした事があるで。」

「はあ。」

八神一郎は笑顔で言った。

「で・・・ヴォルケンリッター社の社長さんが俺に何の用ですか？」

「その事やけど・・・どうやレイジ君！君の”プロト・レイジンググハート”の調子は？」

『！・・・』

「あんだ、コイツの事知ってるのか？」

レイジが不思議そうに聞いた。

「・・・おう、あれを発見したのは、シャルル君とワイらや・・・」

八神一郎の言った言葉にレイジは驚く。

「・・・発見した？」

レイジはまた、質問する。

「・・・おう、ワイらが発見したアレは元々”祈願型プログラム”によって、持ち主のイメージを基に”から構築”するデバイス達の始祖なんや！」

「・・・そういえば、君は”自分の旧式携帯電話が変化した”と言ったね？」

と、ティータ、

「ええ、あの時”新しい携帯が欲しい”って思ってたから…。」

それで、こうなったのか…と”プロト・レイジングハート”を見て、心の中で思うレイジ。

「…シャルル君も言うてたけど…輸送中に勝手にどっか飛んでっしてもうた。」

「それで、俺の家に…。」

「…ですが、なぜ彼なのですか？それと”プロト”と言う事は次世代機が存在しているのでは？」

「質問多いなあ…なぜ彼かはわからんし、次世代機の存在はしらへんな…。ただ”プロト・レイジングハート”を扱えるのは”選ばれし不屈の心の持ち主”だけ…みたいやな。」

(”選ばれし不屈の心の持ち主”…？)

「…まあ、それは置いて、レイジ君…今回は君と相談をしようと思っんやけど。」

「相談？」

八神一郎は向こうで机に何かを並べながら言った。

「ワイらはこれからも君達に便利な道具を提供・・・更にエクセリオンの新たなる武器や新作のレリックロイドの開発を進め、君達を支援しよう・・・セルティ君！」

「お近づきの印した。」

漆黒のライダースーツの女性セルティはBOXをレイジに渡した。

「それではレイジ君！グッドラックやー！」

セルティは端末をしまいその場からバイクに乗り去っていった。

「あれ？トモ。さっきの機械が入ってるよ。」

開けると、BOXの中身はエクセリオン専用の…新ツール『ハーテ



イアルローダー』だった。

「これは・・・さっき見た機械の中に似たようなものなかったけど・・・？」

新ツール『ハーティアルローダー』を眺めて考えるレイジ。

レイジはこれの機能を把握した。自分のサポートも出来るようつで他にも様々な機能を搭載した多機能なツールだった。

\*\*\*

ヴォルケンリッター社研究所、

「クロノ君？例のアレはどうや？」

高らかに声を上げたモニターに映る白衣の男。彼の目線の先にいる男は・・・近くにあったBOXを開けた。

「はい、新たなるセットアップシステム……『アステイオン』が完成します」

男はBOXの中身に驚いた・・・そこにはレイジの”端末”とは違うツールが入っていた。

「これはあくまで……真似た物”なんです。……今すぐに試していただきたいです。」

「いや…ちよつと待ってえな、クロノ君？」

「ええ、それは八神社長に任せます」

「では、クロノ君？」

映像が消えると後ろから一人の女性がクロノのところに現れた。しかし、平然と堂々とまるで初めから来るのを分かっていたように。

「いいの？あなた。」

「エイミイか…ああ、まだ早いつて社長が言ったからな。」

「そう、あなたも無理しないでね。」

「わかっている。後は”夏目 直貴”君の力を借りたい所だが……。」

クロノはドアを開け、空を見上げた。  
と、そこへ

「やあ。」

そう言い研究室に誰かが入ってきた。

「君は!？」 夏目 直貴”君。”

「ドクタークロノ、エイミィさん、調子はどうですか?。」

”夏目 直貴”と呼ばれた青年はそう言いながら、資料や映像記録の入ったデータパックを渡す。

「あら、ありがとう。」

「……ご苦労……それより、”彼等”が接触したそうだ。」

「ふむ、やはり”こちら側”でも「僕達は」何かと面倒事に巻き込まれるみたいだね。」

「ああ。そうだったね”君たちは”。」

クロノは紅茶を一口含むと言った。

「それにしても、海鳴市に『はぐれ眷属』ロスト・チャイルドまで出現するなんて…。  
やっぱりあの街には何かあるのかしら?。」

エイミィはそう呟いた。

時は経ち、今は夜

「……どーゆー事が説明してくれる？レイジ君」

先ほどの騒動から凡そ数時間後……レイジは自宅に帰宅して母と食事を取りながら話をしていた

「わからないよ……俺にもさっぱり。」

……当然である、門限を過ぎていたのだから……。

「そーじゃないでしょ？」

「……たは。」

そして、これが彼の長い戦いの始まりでもあったのだ

銀河の遙か彼方にある「とある惑星」。

そこにはこの星に住む優れた戦闘能力を持つ金属生命体が存在した。

その中で「コア」を持つ金属生命体は自ら戦う意思を持ち、「とある惑星」の戦争において最強兵器として君臨していた。

後の、神々の怒りと言われる大規模な地軸変動が起こり、それによってかつて栄えていた「とある惑星」の高度な文明は壊滅した。

それから数千年後。大変動を生き延びた人々は独自の文明を築いていた。

共和国と帝国の戦争、停戦後の軍団、組織、武国との戦い……。

これまでの戦いで、不屈の心で生き抜いた、一体の”獅子の金属生命体”がいた……。

その名は”アルティメットX”

”獅子の金属生命体”は今なお、石化して眠りに就いている。

不屈の心を持つ新たな主をまるで待っているかのように……。

私立聖祥大学付属高校

ホームルームも終わり、全員が帰宅や部活の準備を始めたころ…

「あゝ？ロボットだあ？」

「ヒーローつつたらやっぱロボだろ！？こつ…ガキョーン！ガキョーンって！」

ロボットの話をしてくるホクトに対し、レイジはドン引きしていた。

「俺に戦争や武力介入させる気か！？」

「おっ！珍しくノリがいいな、レイジ！」

そりゃあ、オタクにつき合わされてりゃ変な知識が身につく・・・と心の中で思うレイジだった・・・。

「なあレイジ、今日暇か？」

レイジは既に鞆を担ぎ、教室を出ようとしていた所だった。

「ああ。どうせ部活にも入ってないしな」

「よかったら、一緒に町に繰り出そうぜ」

「いいな！？そうか、！」

そんな会話をしていた時、何かの音が聞こえた。

「どうしたんだ、レイジ？」

「いや…今、妙な声が…」

「？・・・まあ、いいや。早くいこうぜ！」

そう言うと、レイジはカバンを持って一目散に教室から駆け出した。ホクトもそれを追い掛けた。

「ホクト」

「ん？ なんだ？」

「ア○メ○トには行かないからな！」

余計なものを買わせないよう、予防線を張るレイジ。その言い方にホクトが姿勢を崩した。

「おまえなあ……」

ホクトが恨みがましそうな視線でレイジを見上げる。

-----

レイジとホクトは一緒にファーストフードのハンバーガーショップで買い食いしていた。二人掛けのテーブル席で向かい合っている。その途中、

「そう言えば、土郎さん帰ってきたんだって？」

「おう」

レイジが返事をする、驚きのあまりホクトは持っていたハンバーガーを落としてしまった。

「珍しいな、確か「ギアナ高地」で修行してたとか……？」



「そうみたいだ……。」

ホクトはトレーの上のハンバーガーを拾い上げて食べる。その後は、レイジは兄の話は全くしなかった。

葵ヶ丘高校近くの公園。

「ナギちゃん、ユー子ちゃん！早くー!!」

「……。」

「も、もうダメ……」

「ハア、ハア、ハア、まって……るん。」

4人の少女が黒い影に襲われていた、もう駄目だとバテながらも、”おさげで茶髪、メガネっ娘のナギ”と”ロング黒髪。ツリ目。スタイルのいい少女ユー子”は一生懸命走って逃げていた。だが体力の限界か、二人はついに倒れてしまった。ナギはなんとか立ち上がり、ユー子を抱えようとする。しかしその時、突然”黒い影”が姿を現した。

「う、嘘……」

「ひ、ひいいいい……?!」

”黒い影”は怯える るん達にゆっくりと近づいていく。

「来ないでえッ！」

「るんちゃんに近づくな！こんのおおッ！」

トオルは近くにあったパイプ棒で近づいてくる黒い影を追い払おうとする。トオルは力任せに黒い影を殴るが、それはまったく言っていない程無意味だった。

「い、い、いやあ！イヤアアアアアアアッ！！！」

「あ、あっち行けっ！」

『キシヤアアアアアッ！！』

パイプ棒も払われ、絶体絶命に追いやられた4人。そして、黒い影に襲われ、追い詰められてしまう…だが…。

（くッ、間に合わない…！！）

迫り来る黒い影・・・ナギが諦めかけた、その時だった。

「伏せる！！！」

るんは声がした方向に振り向いた。

『えっ！？？』

何処かから轟音が迫ってきたのを感じ取り、4人は素早く伏せた。

「なッ！今度はなんや?!」

その轟音の正体は突然発生した、桜色の強烈な光だった。

「グオオオオ…!!」

「ギャウウ…!!」

「・・・何?」

啞然とする4人。

エクセリオンは黒い影に近づこうとするが、黒い影は突然物凄いスピードで逃走していった。

「お前ら、そこを動くな!」

そう叫んだ、仮面の戦士・・・エクセリオンも地面を蹴って飛び立っていった。

「おい！待てよおらあッ!!」

エクセリオンは加速し…逃げられないことを悟ったのか、ストップした黒い影はエクセリオンの方へ振り返る。

黒い影・・・魔獣は地軸を操り、ブラックホールによく似た空間を作りだす。

「だったらコイツで！」

レイフォンを操作、バイクが現れる。

「・・・行くぜ！」マシンライオット”！！」

命名ホクト。

エクセリオンはそれに乗り込み、バイクハンドルのスイッチを入れたら、バイクのボディが装甲で覆われ、変形。たちまちスピードを増す。

ライオットで空間を駆け、エクセリオンが魔獣を追い詰める。

「ホイールプロテクション！」

ウィリー走行でそのまま体当たり。

「ギエツ！？」

吹き飛ばす魔獣、それと対峙するエクセリオン。

「たあっ！！」

拳を握り締め、その魔獣を目掛け、『アクセルスマッシュ』を放つ。

「アクセルスマッシュ！！！」

魔獣はエクセリオンの何倍もの体躯の怪物になり、『アクセルスマッシュ』をふせぐと、強烈な砲弾を放つ。

「ぐあっ！」

その衝撃で吹き飛ばされ、地面にたたきつけられるエクセリオン。

中型魔獣は人型の分身を作ると、エクセリオンを囲み、一斉攻撃。彼はそれを大ジャンプで交わす。

そして強力なパンチ、キック、投げ技で次々に分身をなぎ倒してゆく。

「数で敵うとおもったか？」

分身が一掃され、エクセリオンと中型魔獣の一騎打ち。

中型魔獣の爪がエクセリオンの背中を裂く。

《Sword mode》

リンブッカー（ソードモード）が中型魔獣に炸裂。

中型魔獣がとび上方へと逃れる。

エクセリオンは大ジャンプで、たちまちそれに追いつき、パンチ、キック、投げ技の応酬。

「ジェットステップ！！！」

そしてエクセリオンの渾身のキックが、中型魔獣に炸裂。

「…………ウ…………ゴ…………オオオ…………」

リボルバースパイクを叩き込まれ、倒れた中型魔獣の体が爆砕、青い宝石が飛び散る

「…あんなモンが夜中に各地を飛び回るなんて異常だな……。」

エクセリオンはロストログアを回収し、現実世界に戻る。

変身を解く……すると先ほどの少女達に見られていた。

「あ、あんたは？」

「…翠屋のおにーさん…？」

4人は変身を解いたレイジの姿を見て驚いていた。

「おう。それより、危ないから……帰ったほうがいいぞ！」

「…………うん、みんな帰ろう。」

そう聞いた3人は帰っていくが……。

「ん？どうした？」

トオルはお辞儀をして、

「……あの、るんちゃんを、助けてくれて、ありがと……。」「  
すると、一瞬”ピンクの衣装に身を包んだツインテールの少女の面  
影”がトオルに重なった。

「あ？……ああ、解かったから行けよ。」

トオルはレイジにお礼を言った後、4人の元へと向かった。

## S t · s · 7 クロスF（ファイアー）ゲーム

イギリス某所。

『 Plasma Smasher 』

何者かが放った、18発の魔力弾は、均等に6発ずつに分かれて格目標を追尾。二人のシスターへと砲撃を放つ。その砲撃は背の低い方のシスターの前に浮かんでいた袋に命中し、中身の金貨が辺りにばらまかれた。

「ひゃあ!？」

「シスター・アズマリア、下がりなさい！」

もう一人のシスターが魔力の車輪を構えながら叫び、その直後車輪が爆発し破片が男へと襲いかかる。迫る破片に対し少女は動じず、魔力弾で受け止め、そのまま他の二人が被弾しないような方向に投げ飛ばした。

「この程度か？」

「し、シスター・ロゼット……」



「くっ……あなた、何者です!？」

「答える必要はない!」

自分目掛けて飛んできた魔力弾を前に、右足を向ける。

そして、中心に、風が急激に渦巻き始め……小さな台風のようにも見えるものになっていく。

一方その頃……

レイジがエクセリオンになって、数週間後、彼は野球場にいた……  
助っ人選手として……。

今日は私立聖祥大附属高等学校と私立洛芦らくろ和高校との試合。ホクトは三塁側の応援席にいる。

(あの野郎、後で覚えてろ……。)

他にも短ランを着てメガホンを持った生徒たちや吹奏楽部員、観戦に来た大人や子どももの姿が見える……もちろん、彼の知り合いや母……だけでなく家族も。

「しっかりね〜!」

彼らの多くは、聖祥大附属高等学校の応援に来たんだろう。ホクトもそうだが、もう一つ理由がある……。

今、座っている観客席の隣には階段があり、縦一列にチアガールが並んでいた。

着ているのは白色をベースにした服だ。

首から肩、胸の部分にかけて青いラインがあり、黄色の横文字で『SEI DAI HIGH SCHOOL』とプリントされている。

「バニングス…！？ アリシアまで!？」

持っているのは赤いポンポンで、履いているのは白色のミニスカートだ。

チアガールは綺麗な子がそろっている。その中でもアリシアはダントツで美少女だった。

ただ、顔色がものすごく悪い。今にも倒れそうな感じだ。

(…アイツ、恥ずかしいのを無理してないか?)

今日のアリシアはポニーテールに白いリボンだ。それがチアガール姿とよく合っている。

シャルルはそんな彼女のすぐ近くにある応援席に座り…彼女の顔色が優れないのを見て、心配する。

後ろのルシエが声をかけている。

「大丈夫、アリシア？　なんか顔色悪いよ」

「ううん…大丈夫、心配しないでルシエさん。（レイジ君が頑張ってるんだもの…この程度で恥ずかしくなんか、ないわ…。）」

「ホントに？ 無理しないでね。今日は暑いから熱中症も怖いし…。」

「そう言えば、本当に暑いなあ…。」

ホクトがそんな事を言うと、ティーダは水筒を取り出す。

「紅茶で良かったら飲むかい？」

『こんな暑いのに!?!?』

熱いお茶を飲まされると思う、ホクトとシャルルは…。

「もちろん、アイスティーだ。」

『頂きます。』

空は雲一つなく、日の光が直に照り付けていた。

両校の生徒たちはペットボトルに入ったスポーツドリンクを飲んだり、アイスを食べたりして暑さをしのぐ。ホクトも首にタオルを巻き、ティーダからもらったアイスティーをちよくちよく飲んでいた。

やがて試合が始まった。洛芦らくろ和高校の攻撃が終わり、聖祥大附属高等学校の番が回ってくる。

吹奏楽部が校歌を奏で始めた。

テンポが早く強弱があつて、勇壮極まりない一曲だ。兵士を戦場に駆り立てるようなイメージを受ける。

先頭に並んだトランペットが、日の光を受けて黄金に輝く。生徒たちは桜色のメガホンを構え、

「聖大！ 聖大！」

と叫び続ける。

そんな中、チアガールたちも笑みを浮かべながら踊り始めた。ポンポンを振り上げたり体を回転させたりと、華麗な踊りだ。

聖祥大附属高等学校のチアガールはミニスカートを履いている上に激しく足を上下させるが『見えそうで見えない』

ホクトは右手にメガホンを構えて大声で応援すると、レイジが振り向く…。

「……っ！」

『見られた』と思いアリシアはバランスを崩すが…。

体勢を素早く持ち直した後、再び踊り始めた。

レイジは「…すごい精神力だ。」と感心しながら…球を射つ。

でも、バニングス達と比べると明らかに動きがぎこちない。

やがて…足元に転がってきた空き缶を踏み…すっころんでしまった。

後ろのルシエがあわてて駆け寄る。

「大丈夫？…誰かしら、本当にもつ…。」

「ごめん、私は大丈夫だから…。」

アリシアはにっこり微笑んだ。ルシエは安心し、配置に戻っていく。

大丈夫なんて言ってたけど、足元はおぼつかない。

アリシアたちがポンポンを腰に当て、一斉に右足を振り上げる。

やがて洛芦らくろ和高校わこうの攻撃が終わり、レイジはアリシアのもとへ向かった。

「おい、大丈夫か？「大丈夫じゃないに決まっていますよ！…」…

！？ 母さん？「

レイジの母 なのはは、鋭い目つきで彼をにらみつけて言つと…  
彼は怯む。

「だから何が…自分で考えなさい」…っんだよ!？」

そんな会話が終わると彼らはそれぞれの場所へ戻った。試合は二回裏、聖祥大附属高等学校の攻撃だ。点数は今の所0対0。

吹奏楽部が大音量で演奏を始め、観客席の声援もヒートアップする。そんな中、レイジが最近、よく使う『フラッシュインパクト』の用量で一、二塁間を貫くヒットを放った。

応援の生徒たちは満面に笑みを浮かべ、メガホンを振りながら喜ぶ。

ホクトは素直に喜んだが、それどころじゃない者が若干一名いた。アリシアだ。

バニングスたちは跳び上がって叫んでいるのに対し、彼女は顔色が良くない。

ホクトも心配になり、横から話しかける。

「アリシア、少しは喜んだらどうだよ。レイジがヒット打ったんだぞ?」

やはり、様子がおかしい…。

バニングスも心配し、アリシアに声をかける。

「アリシア…アンタ、具合悪いなら休んでなよ。無理する事ないよ」

「う、うん。ありがとう…ちょっと抜けるね」

彼女が顔を赤らめながら階段を上がっていく。シャルルはその後を走ってついていった。

「…やっぱり、そうか。」

「…あなた、まさか…？」

シャルルはアリシアの体調不良の原因を知った。

「『この球場』に、未確認…魔獣が入って来ないように、常に結果を張ってたんだよね？…無茶するよ！」

「！？ あなた、何者な」君と同じ、魔導師だよ。「…！？」

そこへティードがやってくる。

「後はシャルル君がやるらしいから…君は戻りなさい。」

「…はい。」

アリシアは配置に戻った。

「さてと……展開ッ！」

やがて三回の表が終わり、洛芦ロクろ和高校の攻撃になった。

体調を取り戻したアリシアと安心したバニングスたちは、水が舞い

…波が踊るように応援する。

皆がはつらつとした動きを見せている中で洛芦らくろ和高校の攻撃が終わる。

試合は六回の裏、レイジ達、聖祥大附属高等学校の攻撃だ。

今の所0対0で、ノーアウト二塁三塁。バッターはレイジ。これは得点のチャンスだ！とホクト。

吹奏楽部の校歌が大音量で響き渡り、メガホンを握った生徒たちが汗を垂らしながら声援を送る。

アリシアたちの応援もいよいよ激しくなり、全員が一斉に右足を上げた。さらに、彼女たちは華麗に舞う。それにつれてミニスカートがふわっと浮き上がる。

「癒される〜」

とホクト。

聖祥大附属高等学校はこの回で二点を入れて攻撃を終えた

試合は2対1で聖祥大附属高等学校が勝ち、レイジたちは球場を後にした…、

そして……丁度同じ頃、



「…まったく、結界だなんて小賢しいわね・・・管理局の犬！」

「あっ、もう時間切れだ？…チツ、行こうよ”マーキュリー”」

何者かが様子を見ていると、背後に歪みが現れる。

「ええ…また別のゲームが待っているわ…」

そう言つと何者かは歪みと共に消えていった。

S t · s · 8 隣り合わせの死と平和

高町家。

魔獣とのストリートファイトがおわり、レイジが自室で休んでいると、急にレイフォンが鳴った。

「ん？アリシアか、どうした？」

『え、うん、その、なんだけど。ね、レイジ君、今日は、あ、空いてる？』

電話の相手はアリシア、だが・・・テンパッタしゃべり方だ。

「ああ、空いてるけど…。それがどうかしたか？」

『そ、そうなんだ！ その・・・買い物に付き合ってくれる？』

頭上にハテナマークが浮いているレイジ。

「いいけど、なんだよ・・・いきなり。」

『うっん、ありがとう。それじゃあレイジ君の家うちに行くから待って  
いてくれるっ。』

「わかった、それじゃあアリシア、待ってるよ。」

そして電話を切り、下におりた。

「あら、レイジ君。どうしたの?」

「アリシアが来るみたいだからな。」

母、なのはは優しく笑っているが……多分心の中では……。

「あらあら レイジ君やるわね、お母さんは嬉しいぞ?……う  
ふふふふ」

「茶化すなよ！」

そんなことを言っていると、玄関が開く。

「こんにちは、なのはさん。」

そういえば、アリシアの格好、制服しか見たことないな……。

そんな言葉が、頭をよぎる。だがここで口に出しても母にまた茶化される。

「どじしたの？」

「ん、いや……。」

「あひあひ」

レイジは母なのはにキッと睨む。

「時間だな…、それじゃあアリシア、行こうか？」

「うん。」

・・・アリシアは上機嫌だった。持ち続けた夢に向けて確実に近付  
きつつあるのだから。そして、今日。その自分へのご褒美として・  
。

「ふふっ、（レイジ君とデート）」

「さつきから、ニヤニヤして気持ち悪いな。どうしたんだ、アリシ  
ア？」

「・・・（レイジ君のバカ）教えてあげない。」

そう言って顔を膨らませ、機嫌を悪くしてソッポを向くアリシアは  
まるで子供である。そんな行動に、レイジは自身の頭を掻く。

こうしてデパートの中に入ったレイジ達だが、それがいけなかった。  
そう、レイジはこの時気が付くべきだったのだ。

ここは海鳴市の一角にある商店街。

今店内は大騒ぎになっていた。

「……………」

騒ぎの原因となっている少女は静かにたずんでいる。

（負の感情を持った人間はいないかな？）

黒い髪と、深い紫の瞳の…学生服のような衣装を纏って、黒い杖の様な物を持っている少女は、店内を見渡す。

「どこかに手頃な奴は……。」

とあまり感情を感じさせない声で呟いていた。

「ん？」

少女はある女子高生を見つける。

「丁度いい……」

少女は一つの……『黒い宝石状の物質』を1個取り出す。

(『イーブルナッツ』も今じゃ貴重なんだが仕方ない。早く『奴』を見つけ、倒さなければ……。)

少女の心情は内心穏やかではなかった。

「その負の感情……解放しろ……！」

その時、そんな声が聞こえた。

『負の感情』……。

女子高生の『負の感情』……それは、復讐したいという事ただ一つ。

チャリン……！

一瞬、女子高生は何か縛られるような感覚に襲われた。

女子高生の体に吸い込まれるように『イーブルナッツ』が入っていた。

「あっ……。」

『どうしたの?!』

隣の友人が何か叫んでいる。

しかし、女子高生には何も聞こえない。

彼女の体に響くのは……何かがぶつかりあう音のみ。

そして、気付いた時には……、

『ニクイ……ニクイ……ニクイ……ニクイ……!』

女子高生の『復讐』という負の感情を具現化した物体が、彼女の影から現れた。

そう……負の感情の未確認生命体「魔獣」が……。



海鳴市海岸

『…第一種警戒態勢！！第一種警戒態勢！！学園内の生徒に告ぐ！』

『…第一種警戒態勢！！St・ヒルデ魔法学院の全生徒は、防護服を着用の上、講堂に集合！！』

『繰り返す！！防護服を着用の上、講堂に集合！！』

『第一種警戒態勢を維持せよ！！』

『…もう一度繰り返す！！全生徒は、防護服を着用の上、第一種警戒態勢を維持せよ！！』

「……そんな馬鹿な、ありえん…姿を消してたった数時間で」

「“どつやら” 奴等” は、我等の創造を遥かに超える存在だったらしい……」

デパートに入ってから適当に買い物して、中を歩いていた。その時だ、急に寒気を感じた。そして突然近くのガラスが割れた。レイジは慌てて周囲を見渡す。

( ~ ~ ~ ) 着メロ

「もしもし、ティードさん？」

こんな時にレイフォンが鳴る、ティードからだ。

『レイジくん。魔獣が現れた、至急急いでくれ！』

「わかりました、と・・・その前に。」

レイジは母なのはに電話をかける。

翠屋

「　　」

キッチンで歌いながらの作業をやめ、電話に出るレイジの母。

『ごめん、今日遅くなるから。』

「あら、アリシアちゃんとのデートがそんなに楽しいのね？うふふふ。」

いつも如く自分の息子をからかう母

『だー！違ってる！とにかく、もう・・・切るな！』

プツッ

「照れなくたっていいのに・・・。」

「いや、そっじゃないだろっつ...母さん。」

レイジの兄、士朗は「この人は本当に……」とため息をついた。

「……アリシア、悪い。ここで待ってる!」

「レイジ君!？」

彼はアリシアに安全な場所で待機させると、レイジは駆け出し、

《sealing mode》

レイフォンを開き、エンターキーを押して、折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!

「セットアップ！」

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。

《set up》

レイジの体は光に包まれた。光が消え去ると、そこにいたレイジの姿は変わっていた。

”次元戦士エクセリオン”…… コンバットスーツをセットアップするタイムは、わずか0・05秒に過ぎない……

そして

以前レイジを遠くから見ていた少女が”突然、地面に空いた穴”に、濁った宝石を投げ入れた。

「行きなさい……」

ザアアアア……

「ガッ！」

地面から、様々な形の鎧を着た、無数の傀儡兵のような魔獣が現れ

る。

同時刻、デパート内

「あつ、いたいた・・・二人とも！」

「ふふつ、大好きな『お兄ちゃん』とデパートでデートできてよかったね、か・ず・は」

「なっ!?! 咲華つてば!べ、別にそんなんじゃ・・・!」

「隠さない 隠さないの」

その時、何処からか爆発音がした・・・

『!?!?』

「なんなの?」

同時刻、別の場所

「い…なんだよこれ。」

「何だ！？何が起こってるんだ！？」

「これが未確認・・・”魔獣”か！？」

「ガアッ！」

ホクトが動揺する。ティードが指を指したところには、別の様々な形をした魔獣がわんさかと現れた。

「君は…無駄話をしているうちに、来たぞ！」

「……………ディバインシューター！」

ドオン！

「くっ…こいつしづといなあー！」

「レイジか！」

「悪い、待たせた。2人は下がってくれ。」

マシンライオットでここまですっ飛んできたエクセリオン。

「レイジ君、後は頼んだよ！」

「解りました！ティーダさん、ホクト、はやくッ！」

その場にいた2人は、エクセリオンに任せて去っていった。

『グアアッ！』

「はっ！」

エクセリオンは傀儡魔獣の攻撃を回避し、蹴りを入れる。

「喰らえっ！」

そして魔獣の体を構成している宝石が飛び散る。

「はあああああ…」

エクセリオンは傀儡魔獣にアクセルスマッシュを叩き込む。



『グオオオオオオ！！！』

「キヤアッ・・・！」

「何？こいしら・・・！」

「ハアアッ！」

傀儡魔獣少年少女を襲おうとするが、その前に何者かによって吹き飛ばされる。

『ギシャアアツ?!』

『ツ?!』

魔獣にエクセリオンのジェットステップがヒットし、魔獣はバウンドしながら遠くに飛ばされていった。突然現れたエクセリオンに3人は驚き警戒心を強める。

「き、君は…高町?」

「夏目ツ!?…話は後だ。とりあえず、その子達を避難させる。俺はあの未確認…」魔獣”を片付ける」

「わかった、2人とも…こつちだ」

『うん!』

エクセリオンの言う声を聞いて智春はエクセリオンに問いかけるが、エクセリオンはそれを聞かずに2人の避難を指示、そして吹っ飛んでいった傀儡魔獣に殴りかかり、ある程度ダメージを与えた後、携帯型ツールへCVK792-Rと入力する。

「…これで!」

《Flash Move!!》

エンターを押すと同時に、リンブッカーを近接武器に変形させ、体勢を低く構ると、次の瞬間…それをフラッシュムーブで加速しながら突撃する。

「うおおおつ！紫電・一閃！！」

「グエエエエツ！！」

リンブッカーに電撃を纏わせて振り上げ、傀儡魔獣を真ん中から叩き斬った。だがこのまま突っ込んでいくのにも限界があると感じたエクセリオンは一度、傀儡魔獣から離れ再びリンブッカーを構える…

「くツ！」

電子音声が響くと今度はリンブッカーをゆっくりと胸元まで持ち上げてから左手で受けの構えを取りながら、右にくるりと回りながら傀儡魔獣の攻撃を受け止める。

「はっ！」

エクセリオンの左足が少しだけ下がり、砂煙が立つ。そのままリンブッカーをガンモードに変形、

《Short Buster!!》

“デイバインバスターのバリエーション” “ショートバスター”。最速砲撃を撃った後に再びソードモードに変え、振りかぶって傀儡魔獣に叩き込む。

リンブッカーがくる直前、魔獣は自身の武器で受け止めるが、後方へと砂煙を焚き上げながら大きく下がってしまう。

魔獣を見据えたまま、エクセリオンはリンブッカーを下段に構える。

「ハアアアアアアッ！」

『ウボアッ！』

エクセリオンはリンブッカーを上段に構える。展開した魔力刃を振り下ろし、見事に傀儡魔獣を貫く、後ろの魔獣も叫ぶ間もなく吹っ飛んでいった。

『ゴアッア！』

魔獣はよろけながらもエクセリオンに向かって遅いかかる。

《Drive Ignition!!》

レイフォンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

「こいつは御釣りだっ…火竜一閃!!」

『ウボアアアアアア！？』

リンブッカーによる斬撃と火竜一閃が炸裂し、魔獣達は纏めて爆発、濁った宝石となって散り、傀儡魔獣のいた場所には刃の痕が地面に刻まれていたのであった。

エクセリオンがラインブッカーをほいっと上に投げると同時にレイフォンから《Remote Control》の音声とともに腰に戻る。

「片付いたか……」

「……シューティング・レイ。」

「ッ!？」

エクセリオンは気配に気づく、冷たい声が周囲に響くと共に、彼のいた辺りに高速の無数の弾幕が襲い掛かった。

弾幕の豪雨を受けたその一帯が、瓦礫の山と化したのは言うまでもあるまい。

濛々と上がる砂煙の向こうから、大きい声が聞こえた。

「随分好き放題やってくれるな。それがお前の礼儀って奴か!？」

いきなりの攻撃、それも命に拘る破壊力の一撃だったのだから当然の態度だろう。

「生きていましたか、アレを受けて。やりますね、存外に」

だが、シューティング・レイを放った相手は特に取り合わず、感心したかの様な口調で答えた。

「まあな……てかお前は一体何者だ？」

煙が晴れ、姿が露になったエクセリオンが返した。あれだけの攻撃を浴びたにも拘らず体はおるかコンバットスーツにあまり傷が付いていない彼を見て、口元が僅かに動いた。

「説明する必要はありませんよ。貴方はココで死ぬのですから、」

「チツ！」

大きめの宝玉がついたフィンガーレスグローブを構え、冷酷な言葉と共にエクセリオンへと襲い掛かった。だがそこへ別の人物が現れる。眼鏡をかけた男だった

「大丈夫ですか？ 様。あの方が呼んでいます。退いて下さい」

「そうか、済まない・・・離脱する。」

「御意。」

「待てっ！」

エクセリオンが迫るが、次元転送の法陣が既に敷かれていた。

「・・・申し訳ありませんが教えるわけにはいきませんね。フフフフフフ・・・」

ミステリー星人は瞬間移動で逃げていった。

S t · s · 9 存在するはずのない謎の存在

次の日、翠屋

ティータはレイジに「話したいことがある」「といい、自宅……翠屋で話すことになった。約2名ついてくることになるが……。」

「あつ、ティータさん。」

「またせたね、じゃ中に入ろうか。」

「ごめんね、お話あるのに……。」

「いいよ、別に……。」

「ハハハ、てれっ」お前は帰れ。「おい！」

ティータが声をかける、

「……そろそろ、中に入ろうか」

レイジはドアを開けた。

「ごっごっしゃいませ〜」

中に入ると栗色の髪の毛の綺麗な女性が駆け寄ってきた。

「あら、アリシアちゃん」

「こんにちは、なのはさん」

互いに挨拶する、アリシアとなのは

「ただいま」

「うん、じゃ好きな席に座ってくれろ？」

レイジの母親がそう言い・・・レイジ達はカウンター席に座った。

ホクトは店内を見て・・・

「お前ん家、本当いい店だなあ・・・。」

モダン・・・と言っのたろつか。とても落ち着く場所である。

「トオル。ほっぺについてるよ」

「るんちゃん、このケーキ美味しいね。」



「うん、クセになっちゃうね。」

窓際に、くせ毛があり前髪をあげておでこが見える少女と手が隠れるほど大きいセーターを着た少女が美味しそうにケーキを食べている……一方、

その2人の、少女がいる席の反対側にいる4人の少女……

一人は、金髪で長身の水色のワンピースを着た少女……

もう一人は、茶色い短髪で黄色のサロペットを着た少女……

もう一人は、黒い長髪で丈の長い、緑色のワンピースを着た少女。

そして、ピンク色の後ろにリング状になった髪に、顔は少々幼く背の低い髪と、同じ色のフリルの付いた

インバネコート風のワンピースを着ている少女……が楽しそうに話しながらケーキを食べている、そして……向こう側の席……。

「このケーキ、本当美味しいわね。」

「かがみん、ダイエットしてたんじゃない？」

「……うっさい！皆まで言っつな！」

くせ毛がある背の低い少女とツインテールの少女がモメていた。

「皆本、まだかよもう待ちくたびれちまった」

「そう言うな薫、後数分でできるそうだ」

「そうやで、薫少しの辛抱や」

「薫ちゃんのそうゆうせつかちな所、私は好きだけど」

一方、別の席では軍服のような服を着た少女たちがいる辺りの席。その向こう。

「お兄ちゃん、あ〜ん」

「和葉、ここでちょっと・・・。」

「はい、トモ。あ〜ん」

「操緒まで・・・ウググ・・・！」

そう。なぜかクラスメイトからは翠屋の話がよく聞かれる。アリシアはここに来てその理由がわかった。

「・・・人気がある訳ね。」

「メニューは決まったか？良かったら、奢るよ！」

レイジが奢ると言うと、ホクトが割って入る。

「マジ？じゃあオレは・・・」

「お前じゃない!!」

「ケチ！」

レイジがホクトとモメる。

「うん。決まったよ」

アリシアが頷いたので・・・

「わかった。」

メニューをパタンと閉めるレイジ

「すみませ〜ん」

注文をするために声を出した。するとレイジの母親が来た。

「これとこれを・・・」

アリシアが注文する。

「うん、わかったわ。・・・刑事さんは？」

「肉体労働の後は甘いものに限る、ありがたく頂ます・・・ケーキセットで。」

見てるだけじゃんと心の中で突っ込むレイジ。

「レイジ君。ケーキと飲み物はいつものでいいのね？」

母、なのははレイジに問い掛ける。

「うん、頼むよ。」

「ちょっと待っててね。」

なのははそう言って厨房へ向かっていった。

「・・・ティータさん話してくれますか？」

「ああ。いずれ、君がやらなければならない・・・これからの事をね。」

ティータにレイジが以前の話の続きを聞くこととする

「これからの事？」

「そう、近い将来”この世界”で大きな異変が起きる。近いといってもすぐに起きる訳じゃないんだ。ただその大きな異変を君の力で阻止して欲しい。」

レイジはティータに質問をする。

「（シャルルもいつてたな・・・。）何が起きるのかも分からない・・・それでもですか？」

「大丈夫さ。君なら分かるよ。」不屈の心”を持つ君なら・・・」

ニコツと笑いながら、ティーダは言う。

「あの・・・もう一度、未確認の事も教えてくれませんか？」

「・・・奴等の名は”魔獣”・・・違法魔導師が”イーブルナッツ”を使って生み出したモノだ・・・種類は「使い魔型から人型、ミッド製のガジェット」に似たタイプもいる。」

しかし、レイジはまだ知らなかった・・・”異世界というキーワード”を通じて、全世界最大であり未曾有の危機と同時に何者かが動き出したという事に・・・

その後、

「ねえ、アリシアちゃんはレイジ君の事……どう思うっ？」

「はう！いや、あの……。」

自分の子供だけでは飽き足らず、ガールフレンド（？）までからかう。

「まあ、あの子は顔もそれなりにいいし料理等家事全般出来るし……男としてこれ程の物件はそうそうないでしょうね……ちょっと鈍感だけど。」

その言葉に、アリシアはピクリと反応する。

「あの、それって？」

なのははアリシアの額を優しく小突いて、

「女の子ならしっかりと自分を磨きなさい」

(ふえ……………)

レイジの母の顔はニコリとしていたが、その言葉はアリシアの心に『楔』としてしっかりと打ち込まれたのだった……。

St・s・10 束の間の休息？

放課後に魔獣を片付け、帰宅するレイジ。

「さて、帰って飯食うか…」

そう言いながら店の入り口から入ると、彼の目の前……。

「いらっしやいませ！」

「え、え？」

アリシアが黒いリボン、金色のツインテールでウエイトレス服を着ている…少し露出していて、可愛い服だ。

「お……お前、なにしてん？アリシアちゃん、今日からうちで働く事になったのよ……母さん。」

アリシアが目を輝かせて言う。

「ご注文は？」

「えーと……じゃあケーキセット。」

「かしこまりましたー！」

暫くすると…アリシアがお皿に乗ったショートケーキとティーカップに入った紅茶を持ってきた。



「お待たせしました。」

「…いつから翠屋はメイド喫茶になった？」「ウエイトレスよ。」「つて…あれ、ウエイトレス服の域を越えてるだろ？あの服！」

レイジはフォークでケーキを刺し、切り分けて食べる。

シエフ並みとはいかないが…生クリームにトッピングは彩り、味は濃厚な上に甘さひかえめで、なかなかおいしい。

「これ、誰が作った？」

「それはね…私が教えて、アリシアちゃんが作ったのよ…美味しいでしょ？」

「その…どう？」

「ああ、お前料理得意だもんな。ケーキも作れるとは知らなかった。…うん、んまい！」

「ちょっと、レイジ君！」

母が怒るが、無視し…紅茶を啜ると、あることに気付く。

「…これは？」

「…うん、ティータさんに。」

「やっぱりな……。」

レイジは紅茶を再び口に含み、飲み干した。

「……ご馳走様でしたと。」

時計を見ると、もうじき、8時を廻る。

「お疲れ様でした。」

「うん、お疲れ様。レイジ君、家に送ってあげなさい。」

レイジは立ち上がり。

「……わかったよ。」

「あら、素直ね。どういう風の吹き回しかな？」

「まあな、母さんに似てお節介だからさ……俺。」

実際は魔獣が出現する危険を考えたからである。

次の日、

「はぁ……疲れた……」

魔獣退治を終えたレイジは、溜息混じりに呟きながら帰路についていた。

今日は特に忙しい一日だった。洛芦和高校までいたり、桜才学園まではしつたり……。他にも色々あった気がするが、考えるだけで

も疲労感がどつと来そうなのでやめておく。

「帰ったらそのまま寝るか…」

お風呂は明日起きてからでもいいだろうと考えつつ、自室の前に到着する。そして、扉を開けて中に入ると、寝室へと向かい、レイフォンを机の上に置いてそのまま倒れこむようにベッドの上に身体を投げ出す。

「寝よう…」

目を閉じると、程なくしてレイジは眠りへと落ちていった。

翌日、

「……ん？」

目を覚まし、ベッドから起き上がると・・・未だに覚醒しきれてない意識の中、ゆっくりと頭を動かしてあたりを見渡した。窓から差し込んでくる朝日が部屋の中を照らし、鳥の鳴き声が聞こえてくる。

「朝…か」

もそもそと緩慢な動きでベッドから起き上がり、風呂場へと向か

い、風呂場に着くと服を脱いで洗濯機の中に放り込み、中に入つてザバツと入つて、すぐに出る。

身体に感じた汗による不快感も解消され、寝ぼけていた意識も覚醒していく。その後、身体を拭いて服を着替えた。

「そつえば…」

そんな中、何やら良い匂いがただよってくると、同時に台所の辺りから香ばしい香りがかすかに匂つてきた。

「……………」

台所の方へと向かうと、そこにいたのはアリシアだった。ただ、鼻歌を交えて嬉しそうに朝食の準備を進める彼女の服装は”普通の私服にエプロン”だった。

「……………」

目の前の状況に思考が追いつかないレイジ。何故彼女が自分の家に来て朝食を作っているのか…。

そんな事を考えつつも、まじまじとアリシアの格好を見やる。彼女が着ている私服は、スカートが短めだが・・・飾りもないので落ち着いた印象が強い。

「あら〜・・・どうしたの？」

後ろから、女性に声をかけられる。

「!?!? り、凜さん!?!?」

後ろにいたのは、レイジの”義姉・凜”だった。

「やっほ あの子、彼女?」

声に気づいたアリシアも、そちらに振り向くと柔らかな笑みを浮かべながら言葉を返し、レイジも答える。

「…違う(います)。」

「ふん…ま、いいわ。私仕事行くね!」

そう言うと、ニコツとしながら凜は出かけていった。

レイジはアリシアに聞きたい事があったのだが…とりあえず、ソファに座ってレイフォンを操作する。少しして視線を少しだけ動かしてみると、テーブルの上に並べられていた。

「口に合うといいけど…」

レイフォンをセーブモードにすると、ソファから立ち上がり、そこからへと向かう。そこにはホットサンドイッチとスクランブルエッグが並べられている。

「じゃあ…」

早速食べてみる。

「……」

余計なことを言わずに黙々と食べる。

「ど、どうかな……」

「うん、美味いんだけど……。」

食事を取りながら、彼はこの状況で、

「?????」

「……母さん達の姿がみE」レイジ君が起きる前に旅行に行っちゃったみたいなの。「って!?!まじかよ!!」

ようやく疑問に思っていた事を口に出したレイジだが……それを聞いて、返ってきた言葉は……。

「……店番、お願いって……。」

「バツカヤロ……!」

書置きを見ながら悪態をつくレイジを見て、アリシアは心配そうな顔をしていた

S t · s · i 1 フルスロットル・エース

乱雑に人形が積まれた空間が広がる不気味な世界。

『コノ空間ノ中デハ我々ノ能力ハ3倍ニ増幅スル・・・キハハハハハ！』

玩具のようなものもあり、まるで小さな少女の夢を具現化したような世界だ。

しかし…

「知るか！今すぐ、片付けてやる！！！」

《A c c e l F i n 》

彼が、構えをとると、両手両足にフィンが発生する。

その視線の先には足の長いダイニングテーブルと椅子が置かれている。

「油断すんな、レイジ！！！」

物陰に隠れていたホクトが虚空に指を刺しエクセリオンに叫ぶ。

そして、その椅子に徐々に光の粒子が集まり一つの形を形成していく。

そこに現れたのは、まるで不気味な人形のような生き物（？）だっ

た。

ホラー映画などに出てきても不自然ではないとても不気味な姿をしている。

しかし、その時先ほどのホクトの隠れていた物陰の隣に少女がいた。

「レイジ君……。」

そして、エクセリオンは”不気味な人形”形の魔獣を椅子から落とした！

「せっかくの所悪いが、一気に決める！」

そう言うと不気味な人形をリンブッカーで思いっきり殴り、はるか数十メートルは先にある壁に叩きつけた！

しかし、それだけで終わるわけではない。

『無駄無駄ア！！』

エクセリオンが魔獣目掛けて突進し、その体が宙に舞う。

「ジェットステップ！！」

空中へ飛び上がって強烈な飛び蹴りを放つと”魔獣”の体が吹き飛ばぶ、



・・・だがその瞬間、彼に一瞬の隙が生まれた。

「コイツツ!?!」

魔獣の口から巨大な蛇のような『恵方巻き』が現れ、エクセリオンに近づいていく。

『ギハアツ!?!』

大きな口を開け、今にも彼に喰らいつこうとしている。

「レイジツ!?!」

「イヤアアツ!?!」

永遠にも感じられる一瞬が続く。

その『恵方巻き』が彼を襲おうとしたその瞬間…

《Fake Silhouette》

直後に電子音が鳴り響く。

『恵方巻き』が向いている方向とは逆側に回り込んでいた。

「いったい何が起こったんだ…？」

エクセリオンに再び『恵方巻き』が襲い掛かる。

だが彼はその攻撃を交わし、『恵方巻き』と戦いを繰り広げる。

《Acceler Smash》

『恵方巻き』の攻撃はエクセリオンに全く通用しない。

「はあっ！！」

それどころか、彼の繰り出すパンチやキックが、圧倒的な攻撃力で次々に『恵方巻き』に炸裂する。

エクセリオンの攻撃が次第に『恵方巻き』を追い詰めてゆく。

さらにエクセリオンはリインブッカーをガンモードに切り替え、『恵方巻き』目掛けて乱射すると直撃、

「……全開で叩く！」

レイフォンをハートリアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition!!》

仕上げと言わんばかりに、エクセリオンは持っていたリインブツカ  
ーにエネルギーをチャージ！最後の特技を『恵方巻き』に炸裂！

「ストライク・スターズ！」

その一撃はまるで超一流のスナイバーのごとく正確に、『恵方巻き』  
を打ち抜いた。

『うばぁぁぁあッ！！！』

地面に倒れ伏したまましぶとくもがくが、爆発し跡形もなくなつて  
しまう。

エクセリオン達が現実世界に戻る。

「おっと、”素手”だと、あぶないな・・・」

戦いが終わり、レイフォンへと手をかけるが地面に落ちているロス  
トロギアを見て、その手を止める。

S t · s · 1 2 昨日よりステップアップ！

…ここは別の場所……

(このよにすくいなんてない…)

暗くもなく、明るくもない部屋で、少年は悟る。

悟ってしまった。

(せいぎのみかたなんていない…)

少年の後ろに長い純白の髪、燃えるように鮮やかな赤い髪先、透き通るような翡翠色の瞳の少女がいた。

「…誰？」

「面白い、貴方のその負の感情…貰い受けます。」

突然、少年の体に『イーブルナッツ』を投入した……。

チャリン……！

彼の影が大きく膨らんだ瞬間、

現れたのは巨大な炎の塊…しかし、それは、ただの炎の塊ではなかった。

オオオオオオオオオオオオツ！！

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが存在し、炎の巨人が現れる。

「ひいいい！？」

驚く少年。少女は巨人に指示をする、

「お行きなさい」

「アリスア、遅いなあ。今日はコーヒー豆の仕入れに行くって言うだけだ。」

ホクトはアリシアの帰りが遅いのを心配していた。

「よし、例の魔獣の事もあるし迎えに行くか。」

そういつて、レイジは玄関から外に出てバイクで仕入れに行った店にまで向かった。

「  
」

アリシアは仕入れてきたコーヒー豆の入った袋を抱えてニコニコ歩いていた。

「良い豆が手に入った、これでレイジ君においしいコーヒーを入れてあげよう」と

「ん？ 足音・・・？ 野良犬かな・・・？」

動物の足音のような音をきき、アリシアは振り向いた。しかし、そ

ここには何もいなかった。

「早めに帰った方が良いわね。」

アリシアは少し足を早めた。

「!?!」

・・・何かの気配を感じ振り向く。

「シャアアアアアアアアアアア」

「きゃアアアアアアアアアアッ!!」

アリシアの目の前にあの未確認生命体・・・”魔獣”が空から現れた。

「!?!? あ…:あああああッ!!!!!!!!」

アリシアは抱えていたコーヒー豆を地面に落としへたり込んでしまった。

「ハアアアアアアアアアアア」

襲い掛かる・・・そして、魔獣はその爪をアリシアに向けた。

「シヤアアアアアアアアアア」

「うっ……!!」

魔獣は飛び掛かり、彼女に爪を振り下ろそうとした。その時だった。

「!？」

機械的な音が聞こえる・・・。

「!？」

バイクのエンジン音がこちらに向かってきた。そして魔獣に向かって突進した。

「!」

「おらあっ!」

魔獣はバイクをギリギリで交わした。運転していた人物はヘルメットを脱いだ。

「れ、レイジ君!？」



「アリシア、大丈夫か!？」

レイジはバイクから下り、アリシアに寄り添った。

「う、うん。私は大丈夫。」

アリシアは腰が抜けただけで目立った怪我はしていなかった。

「良かった。アリシア、ここは俺に任せて早く逃げろ！」

「……わかったわ。」

レイジに言われ、アリシアは豆の袋を抱え「翠屋」へ向かって走り出した。

ガアアアアアアアアツ!!

魔獣はレイジに襲い掛かった。

「問答無用って訳か!!！」

レイジがレイフォンのエンターキーを押すと光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫んだ!!





闘いを影から見ていた男は驚きを隠せないでいた。

「見せてもらったぞ。キサマの力を……………」。

男がジープに乗り込み、エンジンを始動させた。

この男が、この先の闘いを更に険しいものにしていくとは、誰も予想してはいなかった……………。

海鳴市に存在する『ヴォルケンリッター社』。

ネットワーク世界を監視する事も出来る彼らは未確認生命体”魔獣”の存在をいち早く察知することができる。

今、その施設内ではかつてないほどの巨大な力の接近を確認していた。

「八神社長！海鳴市のウオーターワールド近くでとてつもない力の未確認生命体”が”こちら側”に来ようとしています！」

オペレーターの方が叫ぶ。

モニターに表示されている”未確認生命体”の姿からはとてつもないエネルギーを感じる。

それは、レイジ達がこのあいだまで戦っていた物とは比べ物にならないほど巨大なものだった。

「なんやて！？どうにかできないんか！？」

八神一郎が叫ぶも、この強大な力を持つ”未確認生命体”の前に彼らはなす術もなかった。

やがてその”未確認生命体”世界の狭間を抜ける。しかし…

「なんやてッ…！どう言う事や？」

”未確認生命体”の反応がぱったりと消えてしまった。通常なら、若干の反応は残るはず。そのためこのようにまったくの反応がなくなるというのは理解できない現象だ。それはまるで何かに隠されているように反応が消えてしまった…

一方その頃、街外れの風力発電所で、とある異常事態が起きていた。

発電した電気や溜めてある電気が次々と消滅するという怪事件だ。

さらに、セキリユティシステムまで何者かに乗っ取られている。しかも、この風力発電所は無人の施設のためこのことが誰にも気づかれていない。

一体この事件を起こしているのは誰なのか…

同じころ頃、海鳴市に、爆発音が、大地を揺らすような足音が、風力発電所の機能が完全に停止し街への送電が止まる。海鳴市一帯は停電へと追い込まれてしまった。

が、その直後、ビルのガラスが砕け、中から何かが飛び出してきた。

「ダイバイイイイン…バスタアアア！」

飛び出してきたのは、自身の正面に水色のスフィアを形成したエ

クセリオンだった。

・・・その後、目の前に男が現れる。

互いに向かい合い、鋭い眼光でこれから闘う相手を睨み付けていた。

「今現在で69億人、しかも、4秒に10人づつ増え続けている君たちが、どうして単一個体の生き死ににそこまで大騒ぎするんだい？」

つめたい瞳がこちらを射竦める。笑み小悪魔の様な感覚を与えた。

「何が言いたい・・・？」

エクセリオンは目の前の、人の皮を被った異形に警戒したまま問い返した。

「勘違いしないで欲しいんだが・・・簡単な話だ。僕らは何も、君達人類に対して悪意を持っている訳じゃない・・・全ては、全世界の寿命を伸ばすためなんだ・・・。」

「・・・で？」

「僕らの邪魔をしないでくれる？」

エクセリオンと悠然と構える男の間に沈黙が流れた。音無きその空間が暫く保たれた後、均衡を破る答えが放たれた。

「悪いけど・・・それはパス」

力強く返された答えに、男がふうんと漏らした。

(面白い奴……。)

「『お前ら』の様なヤツらは危険すぎる！ ほっとくと罪のない人が死んでいくからな」

自分の様なごく普通の高校生に夢を託してくれた親友や、仲間を守るために。

「来いよ！」

決意と共に、エクセリオンは眼前の相手ヘリインブツカーを構えた。そんな彼を見て、男がポツリと呟いた。

「ふん、噛み殺してあげるよ！」

その瞬間、男の姿が『消え』、いきなり目の前に現れた。そして真っ直ぐにその腕をエクセリオンの胸へと突き出して来た。

「ヤアアアッ！」

「! ?クッ！」

「フォトンランサー！」

一つの塊にして撃ち出した波動弾がエクセリオンに叩き込まれる

! ! ! !



「ぐあああああつ!?!」

命中した瞬間、凄まじい攻撃により、エクセリオンは砲弾の如く吹っ飛ばされて数十メートル先の壁に叩き付けられた。

(何だ・・・今は・・・!?)

「ああああああつ!?!」

気合とともにエクセリオンへ袈裟斬りの斬撃を男は放つが、エクセリオンはそれを後ろへ体を動かして紙一重の間合いで躲し、半歩前に出て、横薙ぎに払い、カウンターの一撃のような斬撃を放つ。

「チツ!」

しかし、男はエクセリオンの斬撃を自分がやられたのと同じようにわずかに顔を後ろへ動かして攻撃を避けると、そのままの勢いを持って切り上げの斬撃を放った。

自分の剣を躲しながらの一撃だったため、エクセリオンは一瞬焦ってしまった。

(守ったら負ける……その取り回しの良さを活かした連続した斬撃と刺突……しかも、どちらか一方が攻めに向かう時も、もう一方は護りの体勢を崩さない……なるほど、確かにこれは理想的な戦い方の一つではあるよな……)

だが、それでも紙一重で斬り上がって来る斬撃を後方へ跳んで躲し、二人は再び間合いをとった。

と、次の瞬間。脇構えの体勢から振り払われた剣から発生したのは雷の刃。

「へ〜・・・随分と面白エ技を持つてるんだね」

「チツ、なめんなっ！」

だが、いつまでも膠着状態という訳にも行かず、今度は男が自分の間合いへ入った瞬間、エクセリオンを攻め立てる。

「何・・・!？」

バランスを崩しながらも剣を構え、強い闘志を秘めた瞳でこちらを見据えるエクセリオン。

「分かった・・・お前の動き、攻略法をな」

「あはは？」

男は眉を顰めながら、淡々と喋るエクセリオンを見た。

そして、エクセリオンはレイフォンを取り出し、ボタンを押す、

《Sacred Mode》

音声を発したあと、何者かは何かのツールを構える。

「セットアップ!!」

2つのツールを接続。

《Sacred・set up!》

エクセリオンの叫び、レイフォンの音声と共に、金色のフィンに包まれ、光を発する。

「!?!」

エクセリオンがセイクリッドモードに強化変身。

「良いね・・・キミ」

その表情を狂笑に歪め、本当に嬉しそうに呟いた。

「つぶしてあげるよ・・・!」

「やってみるよ!」

すぐさま防御体勢を整えたエクセリオンに、男は満足そうな笑みを浮かべると、地面を蹴って一気に間合いを詰める・・・が。

「・・・フラッシュムーブ!」

「ぐう・・・っ!!!」

「!」あ・・・ッ!?(何故・・・!?僕の・・・それにヤツが繰り出したのは剣を振っただけの唯の斬撃だぞ!?何でダメージを受けるの!?!?)「

「おわりか？」

エクセリオンの言葉にキれる男。

「なめるなっ!!」

『Flier Fin』

斬りかかるが、それをエクセリオンが息をもつかせぬ速さでかわす。

「くっ!?!」

脚部のレガース部分の装甲が変化、光の羽根（Fin）を伸ばし、フライアーフィンで宙に舞う。

「させないッ!!」

男も負けまいと、魔弾を放つ。

「抜剣・星煌刃!」

エクセリオンは急降下しつつ脚部にエネルギーを集束した渾身力を込めた強烈な蹴り技を放つ、

「うおおおお　　っっ!!」

膨大なエネルギーが漏れ、そして・・・

「グアあああッ!」

2人の術技が激突。エクセリオンの蹴り技が男の魔弾をかき消し・  
・男に炸裂、吹き飛ばす。

真後ろに現れたオーロラを見て、起き上がった男は忌々しそうに呟いた。

「クツ、忌々しいが認めてあげるよ……。まったく、忌々しい、人間とは悪魔の種族だよ……。おいで、イノケンティウス!!」

男が宝石を投げると、巨大な生命体が現れる。

「あはは。じゃあね！」

オーロラに呑み込まれながらそう告げると、男はその場から姿を消した。

「な、…コイツツ!?!」

エクセリオンの前には巨大な姿があった。血で塗られたような真っ赤な巨体の未確認生命体。  
直後、巨体が動き、急加速して右脚で踏み込むと同時に右腕で一気にストレートを叩き込んだ。

「うわああああっ!?!」

強靭な腕による鉄拳をまともに受けたエクセリオンは宙に浮きあ

がり、十数メートル後方の地面に叩き付けられると、強化変身が解ける。

「う…ぐッ…！」

「レイジ君！…相手は普通じゃない。他の攻撃パターンも考えたほうがいい…。同じパターンだけではいずれ対策をとられるぞ！」

「そこで、ババーンってやれよ！」

「…コホン、それもどうかと…」

ティータ、ホクト、シャルルがゴチャゴチャうるさいと、エクセリオンは、

「だあああ！ごちゃごちゃうっさい！外野！！！」

《Barrel Shot》

『グオオオオンッ！』

エクセリオンがラインブッカーで放つ複合高速砲撃魔法を未確認はかるうじて避けるが、その反動で近くにあった柱が木っ端微塵に碎かれ、破片が視界を奪い…。

《Divine Buster》

「デイベインバスター！」

光弾は未確認の胸部装甲の全く同じ箇所全弾命中し、装甲に僅かに亀裂が入った。

「やったか?!」

「みんな、退がれ！」

「ああ！」

エクセリオンに言われ後ろに下がる2人

《Acceler Fin》

彼が、構えをとると、両手両足にフィンを展開、蹴り上げてビルに向かって高々と跳躍する。

「拙い、レイジ!!」

「くッ!!」

未確認の銃口から勢い良く数十発の弾丸がエクセリオンに向けて放たれた。不意打ちだったため、回避行動が取れない。

「ぐあっ!!」

数十発の弾丸を受け、エクセリオンは十数メートル離れたビル  
の壁に激突。壁にヒビが入った。

「レイジ君ッ！」

近くで見ていたシャルルが声を上げた瞬間、巨大未確認がすぐ  
後ろに迫っていた。

回避も防御も間に合わない。まさに万事休すだ。

(くっ…ヤツバ…!?)

その時だった。直後、上空から巨大な何かが飛び出してきた。

『グオオオオオン!』

「あ、あれは…!?!」

飛び出してきたのは、通常よりもやや大柄なライオンだった。ラ  
イオンは目の前の巨大未確認の頭部に喰らい付き、投げ飛ばす。

『グオオオオオン!』

「セイオウ？」

ライオンが吼えると同時に、突然…複眼が発光し、聖王のゆりか  
ごと書かれた絵に上書きされるように巨人の情報が投影される。





St・s・14 獅子アイボウ

突如現れた、謎の”巨大獅子形”未確認。

ライオンは巨大未確認に体当たりした後、エクセリオンの方に振り向く。

「こ…コイツは一体…!？」

まともな装甲を纏っていない上に体がボロボロだが、それでも堂々とした姿にエクセリオンは目を奪われていた。

「もしかして、一緒に戦ってくれるのか!？」

『ゴオオオオオ!…!』

エクセリオンのその言葉に答えるかの様にライオンは吼える。

「よし!…!」

エクセリオンはライオンのコクピットらしき場所に到着した。ゆったりと、リクライニングなコックピットになっている座席に座り、操縦桿を握る。エクセリオンはその瞬間に、この機体の溢れる力を感じ取った。

「コイツは…いけるぞ!」

エクセリオンは機体を起動させ、中央の画面に『星桜』の文字が

浮かび上がる。

「セイオウ星桜：か！頼むぜ！」

スラスターを噴かせ、驚異的な瞬発力で巨大未確認に迫る。そのまま巨大未確認の腹に、思いつきり頭突きを食らわせた。

突然の攻撃に、一瞬ふらつく巨大未確認。すぐに体勢を立て直す  
と、『星桜』の方を向く。

「これ以上は、やらせない！」

『星桜』の体が輝き始め、鬣は金、前半身は白、後半身はダークブルーに、瞳の色が左右で異なる虹彩異色（右目が緑、左目が赤）  
に変わる。

『ゴオオオオオオ！！！』

上空に飛び上がり巨大未確認に体当たりする『星桜』。すさまじい戦いが始まった・・・『星桜』が一方的に巨大未確認を攻撃。さらに後ろ足で2ど蹴りを食らわせる。

「らあッ！！」

『星桜』は巨大未確認に向けて突進し、飛び掛る。巨大未確認は微動だにせず、『星桜』の首に自分の大蛇のような尻尾を巻きつけて苦しめ、地面に叩きつける

『ゴオオオオオオ！！！』

さらに左腕の爪で攻撃。これかわし、逆に巨大未確認を叩き伏せるが、相手は起き上がり……『星桜』を引き付けている。

『星桜』の画面には『トランスフォーム』の文字が浮かびあがり、何かの接続部分が現れる。

「『トランスフォーム』!!……お前、単体で変形できるのか!? これは接続部……こいつを使うのか?!」

エクセリオンが接続部分にハーティアルローダーを接続、すると縦席がパイロットの思考をダイレクトに機体に伝え、搭乗者の動きがトレースされるシステムに組み換わり、メカライオンの姿から、人型の形態へと変わる。

「『セイオウグレート』! 全力全開!」

『セイオウグレート』が前進すると、巨大未確認もそれに対抗すべく前進し、『セイオウグレート』が突き出した両手と掴み合いになり、双方の力が拮抗して動きが止まるが……『セイオウグレート』は巨大未確認を突き飛ばし、ラッシュをかける。

『セイオウグレート』の Powerful な攻撃が、巨大未確認に次々に炸裂。

巨大未確認が反撃にかかるが、『セイオウグレート』はことごとくかわす。

しかし、巨大未確認が口から吐いた火炎が『セイオウグレート』を直撃。

姿勢を崩した『セイオウグレート』に、巨大未確認が攻撃を浴びせる。

「くっ…おおおッ！調子に乗るなよ！」

渾身の力で、自分を踏みつけようとする巨大未確認を跳ね飛ばす。

『セイオウグレート』が反撃を開始し、巨大未確認を投げ飛ばす。

「デカけりゃいって問題じゃないッ！！」

『セイオウグレート』は巨大未確認に突っ込み、怯んだ所で距離を縮める。

『セイオウグレート』は巨大未確認を放り投げ湖へ沈ませる。

「！！！」

赤い玉となって逃げ出そうとする巨大未確認。

『チェーンバインド！！』

すかさず「チェーンバインド」で赤い玉を拘束する『セイオウグレート』。

「フラッシュインパクト！！」

赤い玉から巨大未確認に戻り、胸部にセイオウグレートの拳が直撃した。

『グギャアアアア!!?』

巨大未確認の装甲が、まるで紙で出来ていたかのように、易々と砕け散った。

「…………この力は一体？感触…………まだ残ってる……」

巨大未確認のあちこちから爆発が起こる。その後、巨大未確認が爆発を起こして散っていった

S t ・ s ・ 1 5 とべ！ セイオウ

海鳴市、すでに辺りは夕日で赤く染まっていた。

先ほどの魔獣は、周りの物を食い散らかし、一回り大きくなっていった。

「グ…グガアアアア！！！！」

巨大な叫び声が辺りにこだまする。

それにより、近くの駐車場の周囲にある建物のガラスがすべて吹き飛ぶ。

すでにほとんどの逃げられる人々はティードとフェルトたちによって別の場所へと避難していたが、その被害は尋常ではない。

「グガアア！！」

ティード達の存在に気づき、魔獣が襲いかかる。腕を振り下ろそうとしたその時だった。

「紫電しでんいつせん一閃ツ！！」

何かが魔獣に着弾した。

「な、何だ…？」

ティータの前に立つのはエクセリオンに変身したレイジだった。

「……全開で叩く！」

エクセリオンは、刀身が鞭状になったリインブッカーを元に戻し、構える。

「いくぜ！ガンモードッ！！」

レイフォンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition》

すると、銃口が光を放ち「矢」が生成され……同時に足元に焰が奔る。

「ハイペリオンスマッシュャーッ！！」

声を同時に銃口に集まる光。光が銃口を包む。光の矢が放たれた。

魔獣は障壁を張るが……そのまま貫通して、爆炎が包み込む。

『ウボアアアアッ！！』

光の矢が炸裂し、魔獣は割れたガラスのように碎け散った。



あたりの爆炎が晴れたとき、魔獣達の姿は完全に消え、濁った宝石がのこっていた。

「倒した…のか？」

「う、うん…あれ、おわったのか？」

気絶していたホクトが目覚めた。

「平和な奴だな…。」

頭を押え、まだ本調子ではないようだ…とそれを見て呆れるエクスレオンの姿があった。

「いや、まだまだ！」

ティータは気づく、

『!?!?』

全員が振り返ると…それは、爆散した魔獣の破片は消えており、

代わりに……、

『……コワスゾオあああああ!!!!』

体長40メートル近くまで巨大化した……魔獣が。

突然の出来事に、ティードとホクトはただ呆然とするだけ。

しかし、エクセリオンは違う。

「……行くぜ……セイオウ！」

『ゴオオオオン!!』

どこからともなく、やって来るライオンロボ『星桜』に乗り込む。

「うおおおおッ！」

セイオウは魔獣目掛けて飛びかかり、クローで右腕の肘から下を擦れ違いざまに切り裂く。

「ナメルナ！」

だが、こちらも横腹に、魔獣の腹部から放たれる魔弾を浴びせられる。

「くっッ！」

セイオウは魔獣の方向に顔を向けて睨み付ける。そして体ごと向くと

『ゴオオオオオオオ！！』

大地が抉<sup>えぐ</sup>られる程に力強く脚を踏みしめ、大音量の咆哮が放たれた。その叫び声の振動で木々は揺れ、アスファルトが僅かに跳ね、相手の魔獣は怯む。

「っッ！」

「な、なんて威圧感なんだ…！」

怯むホクトとティード。

勢い良く大地を蹴って一直線に走り出す・・・そして。

エクセリオンがセイオウの速度を上げ魔獣へと突進する。

「ストレイトバスター、シュート！」

セイオウはすれ違い様に、腹部の3連ショックキャノンを撃ちまくる！  
バランスを失い、建物に衝突しそうになる魔獣だが、何とか体制を取り戻した。

『ゴオオオン！』

「もう終わりか？」と言っているように聞こえた。

『ググ…』

確かに、セイオウを攻撃する際に大量のエネルギーを使い、今の戦いでダメージを喰らった魔獣にもう勝機はない。

だが、攻撃をする気配の無いセイオウに、魔獣は逆転を賭け必殺技を放つ。

体を帯電させ、すべてを破壊する雷を発生させる攻撃を…

『クソオ！！ツブレロツ！！』

稲妻がセイオウに襲いかかる！

しかし…

「ライトニングプロテクション、展開！！」

セイオウのバリアを纏ったの突進！攻防いつたいの技だ。それが相手の攻撃を押し戻した。

『ナンダト…』

「いくぜっ！プロテクションスマッシュ！！」

完全に意表を突かれた魔獣はシールドアタックごと自分の雷をまともに喰らった！

『ダハアアアアア！』

大きな爆発と共に粉々になる魔獣。

「やったか！・・・とにかく、また頼むぞセイオウ！」

『グオオオオン！』

おう！と言わんばかりに、セイオウは雄叫びを上げる。

『???? ???? ??::??』

海鳴市の住宅街・商店街から離れた場所にある廃墟…

ここは古い建物や誰もいなくなった家がいくつかあり、人気はない。

だが…

人ではない。もっと別のモノなら……

デスクリスタルの1人…マルスは一軒の廃屋の中に入っていく。

二階建ての古い木の洋館で、二階部分へと続く階段からテラスまでは吹き抜け構造になっている…

しかし埃まみれで、建物自体の老朽化もかなり進んでいる。この中に入ろうと思う人間は、恐らく誰もいないだろう。

そんな中…コンクリートの壁に寄りかかりながら訊ねる異形がいた。

「マルス、何かあったのか？」

「フン、ジュピターか…」

「奴らの様子を見に行くならともかく、お前が出歩くのはどうも不自然だな」

「どつしたの？」

マルスが膝をつく、古くなった階段がギイギイ音を上げる音が聞こえる。

「……ウラノス。」

二回に当たる場所から顔を見せたのは歴戦の勇士に恥じぬ実力がうかがえた存在。

「なら……奴らの1人でも、片づけてみる。」

マルスはふん、とそっぽを向きながら悪態をつく。

「もしかして、臆したのかい？」

「……そうじゃない。見たこともない、変な……奴はイレギュラーだ」

「へえ……それは興味あるね。」

「……どうでもいい……。」

ジュピターの向こう側にいる笑い面のような奇怪な笑みをした男は立ち上がり……

「まあ、いい……始めるぞ！」





S t · s · 1 5 とべ！ セイオウ（後書き）

エクセリオンゼミナール 01 エクセリオン

コンバットスーツ

基本カラーは白で、複眼の色は桜色。高町レイジがレイフォンを使用し、スーツ装着コード《set up》を発することによって、レイフォン内に圧縮収納され、微粒子状に分解された桜色、黒、金色の”フィン形特殊軽合金”が体に吹き付けられるようにスーツを構成していき、セットアップが完了する。この一連のプロセスは0.03秒間で完了する。金色のメタルと青いシールドコーティングで構成されている。セットアップが完了すると全身の力がパワーアップする。異次元や宇宙空間でも活動可能。

ツール

レイフォン

携帯電話型トランスジェネレーター。レイジをエクセリオンへと変身させるほか、通常の携帯電話のようにも使用できる。形は折り畳み型。閉じた状態は音叉状を模ったデザインになっており、開いて「CVK792-」+エンターの順にキーを押すと、《~~~~》mode》の音声が発声されて待機音が鳴る。本体を閉じ、赤い部分に手をかざすと音声を発し、レイフォンに埋め込まれた「トリックスター」と呼ばれる秘石のエネルギーを動力源として、同時に紋章が投影されて効果を発揮する。

リンブッカー

左腰に携行されるI PAD型の専用ツール。内部はクラインの壺へと通じており、ここにロストロギアを無尽蔵に貯蓄できる。様々なエネルギーを封じ込め、このリインブッカーに収納され、レイフオンにパスワードを入力することで封じられたエネルギーを解放し、各々の効果を発揮することができ、魔導師の記憶「魔導端末に記録された術技」の呼び出しができる。

リインブッカーから発動する際、稀に「魔法のステッキ」（満点大笑）のような効果音が鳴る。I PAD型の魔導書モード、ソードモード、ガンモード（これは、螺旋状に回転させた貫通力の高い魔弾を発射する）の3形態をとる。

## ドライブイグニッション

エクセリオンの攻撃S+の術技を放つときの電子音声。

## ハーティアルローダー

携帯電話型トランスジェネレーター”レイフォン”の機能を拡張する為の携帯電話の充電器型アドバンスツール。

陵桜学園

「いやぁ・・・終わった終わったぁ」

学校の校門から一人の生徒が居た  
青い髪にてつぺんにちよんと抜き出た「アホ毛」が目立つ背の小さい少女である

彼女は泉 こなた

此処陵桜学園に通う17歳の少女で現在高校2年生である

「にしても、今回の補習はきつかったな」

何故二人が此処に居るかと言うと実は言うと二人共補習を受けていたのだ

因みに今は午後5時位である

「こなちゃん」

「あ、つかさだ!」

ふと校舎側から声が聞こえたので二人は振り返った  
そこには3人の少女が歩いてきていた。

紫の短髪に黄色いリボンをつけたおっとりした少女

同じく紫色の長髪を両端に束ねたツインテールのキツイ目つきの少女。

桜色の長髪にスタイルの良い美少女。

こなたの友人である柊　つかさ、柊　かがみ、高良　みゆきの3人である。

「何で？こんな時間まで居たの？」

「つかさが補習を受けてたから待ってただけよ」

そう言っただかがみは親指で妹つかさを指差した  
それにつかさは頬を赤らめながら頭を掻く。

「ですが、予想以上に苦戦していらしくて・・・こんな時間まで掛かってしまいました」

相当待っていたのだろうみゆきも多少やつれた顔をしていた。

「全く、そんなんじゃないよあんた達この後のテスト大丈夫なの？」

「あつあつ・・・」

かがみに痛い所を付かれたのかこなたは声を挙げる。

「その様子ですと・・・駄目そうですね」

みゆきが気の毒そうに言う。

視線の先にはこなたとつかさが真っ青な顔をしていた。

をれを見てかがみが溜息を吐く。

「普段から勉強してないからそうなるのよ」

「私は今やつてるネトゲがはまっちゃってさあ」

「教科書って見てると何だか眠くなっちゃつよねえ」

2人はそれぞれ言い訳とも思える発言をする。

「・・・あんたらは駄目だろそれは」

『はづううう』

こなた達がそう言う具合に会話をしていたその時・・・

突如轟音が響き渡った

「何!？」

そして振動が4人に襲い掛かる

「な、何!？」

「ちょ、ちよっと!何よ今の爆発は?」

「この爆発・・・かなり近いですよ」

「ああ、皆あれ見て！」

つかさは空を指差した

皆もつかさの指差した方を見る

「な、何なのあれ・・・」

現れたのは巨大な炎の塊…しかし、それは、ただの炎の塊ではなかった。

「ええええええつ！？」

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが存在し、炎の巨人形巨大未確認が上空から降りてきた巨大未確認は大地を蹴り、自慢の炎を浴びせんとする・・・が。

「え？」

真横から飛んできた桜色の砲撃が、巨大未確認を撃ち抜いた。

「大丈夫か！」

「だれ?!」

そこにいたのは、巨大なライオンロボだった。

陵桜学園から少し離れた場所…。そんな所に独りの少女が立っていた。

「…それでは参りましょうか。」

そう言ったあと少女はその場から消えた。

巨大未確認はセイオウの方を向き、新たな獲物として定めた。

「奴さん、やる気マンマンって感じだよ…。」

「何言ってるのよ！あのサイズじゃあ規格外すぎるわよ？」

あーだこーだ言うこなたとかがみ

そう、セイオウよりも大型の巨大未確認相手に戦えるとは言えないのだ。

「ちよつとぐらいデカくたって、どーにでもなる。つー訳で頼んだぜ相棒！」

『グオオオオオン!』

次の瞬間、巨大未確認は額から紫色の火炎砲を放った・・・が、それらがセイオウの身体に命中する直前に、その強靱な筋肉で大地を蹴り、宙に舞った。その高さは助走無しでは有り得ない高度まで到達した。

「な、何エエエ!?!」

「なんて跳躍力なの!?!」

かがみとこなたが驚きの声を上げ、放物線の頂点に到達したセイオウが落下を始める。

「デイバイイイン…バスターアアア!」

セイオウは前半身胸部付近にある三連砲でデイバインバスターを放つ。

デイバインバスターを食らい巨大未確認はそのままバランスを崩し大地に倒れたが・・・その直後、体勢を立て直し、セイオウ目掛けて真つ向から突進を始めた。

「くっ、プロテクション!」

エクセリオンはとっさにセイオウの鬣のシールドを展開して、巨大未確認の突進を防ごうとする。



『ゴオオオオオ!!』

セイオウのシールドに衝突する巨大未確認。プロテクションが巨大未確認を押し退けようと斥力を働かせるが、巨大未確認は断固として抵抗を続けながらプロテクションを破ろうと炎のかぎ爪を立て、プロテクションに食い込んでセイオウが押され始めた。

「しゃんなあろおおお!!」

だがエクセリオンの気合いも虚しくプロテクションは砕かれ、セイオウ目掛けて強烈なタツクルが極まった。

「グアッ!」

セイオウは吹き飛ばされ、二回、三回と大地を跳ねて横転した。

『ゴオオオオオ!!』

「・・・なんてな、ドライブ・イン!!」

エクセリオンは操縦桿から手を離し、ハーティアルローダーを接続、地面に叩きつけられる瞬間に”セイオウグレート”に変形する。

「デイバインバスター・エクステンション!」

セイオウは腰のライフルで合計千発を超えるデイバインバスター・エクステンションが巨大未確認に向けて連続で放たれるが、それを最小限の動作でかわし続ける。

「ちいっ!?このッ!」

セイオウが右脚を振り上げた瞬間、

「ぐおツ!? この距離でかよ!?!」

距離を取った巨大未確認は炎の腕を飛ばし、セイオウを捕縛する。

「なっ!?!」

セイオウを捕まえたまま、巨大未確認は回転を始めると、ジャイアントスイングの如くセイオウを振り回して投げ飛ばした。

「ぐあああッ!?!」

更に畳み掛ける様に、紫色の火炎砲の大雨が降り注ぐ。セイオウは満足な回避運動も取れず、殆どの光線がが直撃してその場に倒れ込んだ。

「ちッ、どうすれば!?!?・・・ん?」

そんな時、回線が開く。

『レイジくん、レリッククロイドをつかうんや!?!』

V社社長、八神一郎だ。

「八神さん!?!レリッククロイド・・・これか?」

『キユクルー』

以前、彼の家に紛れ込んだ機械、フリードリッククロイドを取り出すと、足場のコンソールにセットする。

「フリードリヒリッククロイド！セット！！」

『キユクルー』

「ユニゾン・イン！！」

すると、セイオウグレートボディカラーが白銀に変わり・・・右手にバイザー形バスタークロー、左手にヒートロッドが装備された。

「完成！セイオウフリード！」

白銀の装甲を纏うセイオウと巨大未確認は、決着を着けるべく、真っ向からぶつかり合う。

『オオオオオオ！！！！』

巨大未確認は拳を振るうがあまりダメージは受けない、バスタークローの鋭い一撃は巨大未確認の肩をえぐり、装甲を砕いた。

「いくぜ！」

セイオウはヒートロッドの鞭状化した刀身をしならせ、巨大未確認の脚を絡めとる。巨大未確認はヒートロッドの軌道に一瞬戸惑い、

ほんの少しだけ反応が鈍くなった。

『オオオオオオ！！』

「ぶった斬れ！飛竜・一閃！！」

エクセリオンの叫びと共にセイオウの前に九色の光が発生しバスタークローを構えながら突っ込み、そして巨大未確認を横に一刀両断していった。

『又グオオオオオオーツ！！』

飛竜一閃を受けた巨大未確認は断末魔をあげながら碎け散っていった。

「お前って、凄いだな？　これからも頼むぜ！」

『ゴオオオオオオン！！』

レイジの言葉に任せろ、と言わんばかりに咆哮したセイオウだった。



……ヴォルケンリッター社

ここはヴォルケンリッター社の社長室。

「社長。お客様が参りました」

八神一郎の使いつぱしりの尾形は八神一郎に報告する。

「そうか…準備はできているね」

「はい」

八神一郎の元へとある者達がやってきた。

「やあ、一郎さん。」

「久しぶりやな！」

「失礼します」

と、ティータ

「待ってたで！」

「・・・貴方は八神一郎さん!!」

「覚えててくれたか？」

そんな会話をしていると、

「・・・そりゃあ、白衣、メガネの変人さんだもんな。」

「・・・」ハナ”君、出てきて説明してくれへんか?!”

八神一郎は怒りながら言う。

「…流石、前から普通じゃないと思ってたわ。」

ティードはソファーにすわり、隣に立って考え込んでいる”ハナ”  
と呼ばれた人物に問いかける。

「折角だから、君たちの事を話したらどうかかな？」

「ええ、長くなるけどいいわね？」

魔女界。こことは別の次元にあり、女王と12人の元老によって統治されている異世界。女王は世襲制ではなく、前任者の指名または選挙によって決まるらしい。およそ1000年前までは地球と交流があったが現在は途絶えている。

「…ああ、知っている。」

「そうでしょうね。私が知っている限りでは、貴方と・・・あの、シャルルって少年は”次空管理局”がある”ミッドチルダ”出身だものね。」

「...その通りだ。」

ハナが問いかけると、ティータは少し苛立たしげに呟くように答える。

「・・・そういや、人の名前を名乗ってるんやな？ハナやったか？」

「...ある”人間の少女”が”私の身内”に付けた名前を名乗っているだけよ。」

「ある人間？」

ティータが聞くとハナが答える

「”ドレミ・ハルカゼ”・・・とか言ったわね。」

「・・・？」

「あら？こんな時間。御免なさい、私は抜けるわ。」

そう言ってハナは、社長室から出て行った。



レイジはいつもどおり机に突っ伏すと、完全に呆けてしまっていた。そんな彼の所にホクトが寄って来る。

「よっ！」

「レイジ君どうかしたのかい？」

もう一人レイジに声をかけたのはクラスメイトであり、もう一人の友人……………

「よう！シャルル。」

中性的な顔立ちの金髪メガネ少年。シャルル・スクライアだ

「朝から考え事か？珍しいな……………今日は雨でも降るんじゃないか？」

「お前が考え事をする方が珍しいと思うが……………それより、ホクト。パラレルワールドって知ってるか？」

「……………知ってるけど、それがどうしたんだ？」

以前、ティードから聞いた話を2人に説明する。

『世界征服を企む悪の秘密結社？』

大きい痛みや悲しみを残していった史上最悪の連中。

世界征服を企む悪の秘密結社は強力な機械生命体、ガジェット、魔道生命体、怪人を作り出し、各世界に送り込み、世界が壊滅寸前だった……。

しかし、”英雄達”がそんな絶望的な状況を打破し、全宇宙の支配をたくらむ奴等は滅ぼされた。

だが、消え際に奴等が言った言葉。

『我々は人々の悪しき心と欲望の中に住む。それ故、皆が恐怖を抱く限り何度でも蘇える』

それはつまり、条件さえそろえば連中は復活する。

「……って話をさ。」

「……英雄”とか悪の秘密結社”ってのは分かりやすいけど、ブっ飛んでるなあ……」

「ああ、俺も最初聞いたときにハチャメチャだって、思ったよ……」

「……八八八。」

「あんだ達、朝から何をやってんのよ？」

彼らの前にやってきた、わがままで直情的なツンデレそうな少女は

……

「ロツテ、おはよう」

「ん？お前か、おはよう」

「おはよう、3バカトリオ。」

彼らのクラスメイトの一人で、アリシアの親友「アスタロツテ・バニングス」だ  
ぱつと見る……じっくり見ても○学生のような体型で、人形のように愛らしい可愛らしさがある

「ちょっと、あんた達。さっきから、あたしの事チビチビ言ってる？」

『言っていない！』

そんななか、ロツテが……あれ？そういえば……とぼやく。

「ロツテ、どうしたの？」

「うん、昨日職員室に見覚えのない生徒がいてね……」

「へえ〜……どんなやつだ？」

「えつと見た感じ……あなた達と違って賢そうな子だったわよ」

「……おい、詳しい話を聞かせろ」

レイジはいやな予感を察知した

「どうしたの？」

ホクトもどうした？と聞く。

「……悪い、なんか嫌な感じしてな」

「……………それよりも女子の話しだ」

「あれ？どうして君が知らないの？」

「たしかに、お前が情報を知らないなんて変だな」

と、ニコソで。

「おはよう、レイジ君」

次に声を掛けたのは、クラスの中では女神ともいえる存在のアリシア・テストアロッサ

「おう、おはよう」

「遅かったわね、どうしたのアリシア？」

「ちょっと、職員室でようがあって。」

「そうなの？もうすぐ、最初の授業が始まるわよ」

「え？もうか？」

時間を確認したら、もう始まる時間である……少し待つと……大人なのだが、とてもそうは見えないロリ体型の担任の虹原いんく先生がやってくる。

「あれ、確かストラトス先生戻ってきたハズじゃ」……とホクトが言うと、

「ストラトス先生が別のクラスの担当になったため、私が代わりに担当することになりました」

『『』』うおおおおおおおー………』………』………』………』

「騒がしいわよ、ヤロウどもー!!」

とロツテは叫ぶ。

「皆さん、お静かに。今日は、転校生を紹介します」

転校生？とレイジは首をかしげる。

「巻機山さくらん、入ってください」

そついつて入ってきたのは噂通り女の子だった。

「（ガラガラ……）おはようございます」

「自己紹介を頼みます」

「はい、巻機山花まきはたやまはなです。よろしくおねがいします」

『『』』うおおおおおおおーーーーー！……ッ……！……！』』

「静まりなさい！ヤロウ共！風穴開けるわよ！……！」

やかましい男子達に吼えるロツテ。

「やれやれ……疲れるな、このクラス。」

私立聖祥大学付属高校 生徒会室

「……暇ね。」

生徒会室でアリシアは呟いた。

暇なのは毎度のことだが、それにもまして、窓からうつらかな太陽が差し込んでくるのと気持ちのいい風のせい、いつもより眠気を抑えるのに必死だった。

「シャキッとしなさいよ、アリシア。仮にもアンタは生徒会長なんだから」

いつもよりかなりダレていたので、アスタロツテ・バニングスは思わず咎めていた。

「わかってるわロツテ、でもこう暖かいと眠くなっちゃうのよ」

アリシアはそう言って背伸びをした。

今日の生徒会室の日直は彼女たち2人。他の役員たちはどうせ非番なのをいいことに全員でどこかに出かけたりしているらしい。

たまには春の日差しに当たるのも悪くないかな、とロツテは思った。

「まあいいわね……」

独り言を言っつて、ロツテはまた、読んでいた文庫本に目を落とす。

「…それよりアリシア」

「ん？」

「あんたいつも、レイジと話してるときやたら恥ずかしがってたよね〜（笑）ひょっとして…惚れてる？」

「ななななな！何言ってるのロツテ！そんなにや関係じゃにやくてですにえ！？」

アリサは顔を赤らめながら必死でロツテの言うことを否定するアリシア。

「ちょっとからかっただけよ。ほら、思いっきりてんぱってるよ？」

「もー…ロツテってば…！」

「物好きね…アンタ、あの”不良”のどこに…って、なにあれ！？」

「れ、レイジ君!？」

ロツテが指を指した方向を見ると、レイジがハナと話していた。

「お前、”普通”じゃないな？」

「なんのこと?」

レイジの持っているレイフォンが彼女の”何か”に反応している。

「…ふふ、やっぱり劣化くっても『高町なのは』の息子ね。」

「あ?今なんて?」

レイジは自分の母の名前が出て驚いた。

「…話を戻すわね…ん?」

『…は…れて…』

……え?なんだこの声?と思い、後ろを向くレイジ。



『……レイ……か……れてッ!』

まがまがしいオーラを出しながら、やって来るアリシアだった。

「レイジ君から離れてッ!……!」

鋭い形相で睨みつけ、こちらにやってくるアリシア。

「もう一度言っわ!レイジ君から離れてッ!……!」

だがハナは動じず、アリシアに皮肉る。

「あら、もしかして妬いてるのあなた?」

「な……!?!?!」

何故かお互いバチバチと火花を散らす2人。

「……」

「……」

「一つ聞く。ハナ……お前、なんで母さんの事を?」

この状況でハナに質問するレイジ。

「・・・私が言っているのは”別次元”にいるもう一人の『高町なのは』。管理局の”エースオブエース”の事よ。」

「何言ってるんだよ、なのはさんはどう見ても”一般人”それも主婦だぞ?!」

『……………』

レイジ達は黙り込む・・・

「ふん、まあいいわ。これから話してあげる。私とあなたが戦うべき相手……………」

刹那、二人の会話を遮るように爆発音が響き渡った。

(爆発?それも数ヶ所で、ほぼ同時にだと?)

「あら、もうここを嗅ぎ付けたみたいね……………」

突然の爆発にレイジは腰掛けている廊下の手すりから立ち上がり、ハナは何が起きたのかを直ぐに悟る。

「・・・残念だけど、お話できるのはここまでのようね」

「・・・ああ?それは、どーいうことだ。」

首をかしげるレイジ

「どうやら、私たちにとっての“敵”がいらっしゃったみたい」

「俺たちの・・・敵・・・」

「まあ、気にしないで。近い将来”全世界”で大きな異変が起きるの・・・近いといってもすぐに起きる訳じゃないのよ。」

アリシアはハナを睨みつける。

(この子は…！？)

「“真実”を知りたければ”偵都 ヨコハマ”へ来なさい、そこであなたが“戦う意味”を見出だすといいわ。」

そしてハナは、真剣な表情でレイジを見据える。

「待て！まだ、お前には聞きたいことが！」

「・・・さて、私は先にいつてくるわね。」

突如、空間が歪み、ハナはそう言い残し、その歪みの中に姿を消した。

「……………つく！一体、何がどうなっている！-」

その時だった。

『!?!』

再びの爆発音と共に建物全体が揺れ、天井から砂埃が落ちてくる。

「どっした?」

ホクトが呆けているレイジに聞くと、彼は我に返り……。

「……みんな、ここにいろ!俺、ちよっとなってくる!」

そついうと彼は急いで外に出る。

「まてよ!」

「ええツ?!ちょ、ちよつとレイジ!?!」

レイジは不吉な予感を感じ、慌ててその場を飛び出して行き、みんなが呼び止めるが、構わず走り、外へと向かって行った。

彼は携帯電話型ツールのエンターキーを押す……すると携帯が急に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!!

「セットアップ!」

《set up》

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。光が消え去ると、そこにいた彼はエクセリオンに姿は変る。

「さあ、纏めてかたづけやる!」

魔獣たちの攻撃により荒れ狂ってしまった外。その激しさは増す一方で、辺りも地面が剥き出しの状態になってしまっていた。動きにくい地形なのにも係わらずエクセリオンは魔獣たちの攻撃を避けながら、距離を取る。

《Barrel Shot!!》

「バレルショット!」

エクセリオンは光弾を作り上げると、アクロバットしながら魔獣の

大群に向けて放つ。

『グアアアアアアアアアア!!??』

「ハアアツ！」

倒し損ねた魔獣が襲い掛かるが・・・エクセリオンはカウンターで殴りつけ、怯んだ所に蹴りをたたきこみ、魔獣からは濁った宝石がばらまかれる……

「ギイイイ！」

空中に浮いている魔獣が地面へと落ちてくる。

「悪いけど・・・片付けさせてもらっぜ。」

エクセリオンはリンブッカーを魔道書モードブッカーに変形させ、魔獣に向ける。

《Straight Buster!!》

「はああああ... たああっ!」

助走をつけて上空に跳び上がり・・・爆撃が発され、さらに別方向にいる魔獣にも放たれた。

《Divine Shooter Full Power!》

「・・・霧がねえ！デイベインシューター！！」

リインブッカーをガンモードにし、エネルギーを収束させ・・・光弾を放つ。

【ゲアアアアアアアアアアアアアアアアッ！？】

リインブッカーから光りの衝撃波が矢の如く放たれ、魔獣達へと叩き込まれる。魔獣達は声にならないような断末魔をあげながら吹き飛ばされ、土煙が出る。

土煙が無くなった後には濁った宝石となっていた。

「ちっ……まあ良いか……とりあえず、ヨコハマだな。」

エクセリオンはレイジに戻り、その場を去った。

l i t o b e c o n t i n u e d



偵都ヨコハマ

様々な美術品が各地に展示された日本の大都市。  
まさに美術品に囲まれたこの街は、邪な欲望を抱いた悪しき心の持ち主達の格好の街である。

「あなたが盗んだ宝石を返してください！！」

ピンクの髪の少女：「ミルクイホームズのリーダー的存在 シャーロック・シェリンフォードがそう叫ぶと濃い紫色の髪で、身長は高い方。ファーの着いた灰色のコートとズボンを着て、右手には形状のメカニカルな杖を撞いている青年が答える。」

「あのねえ、これは”宝石”なんて安いものじゃないんだ。元々、僕たちの世界にある”ロストロギア”なんだよ？」

「ろすと？なにそれ？」

茶髪の少女 譲崎ネロは質問する。

「答える必要はないよ。」

紫色の髪の青年は地面に宝石を放り込むと。徐々に光の粒子が集まり一つの形を形成していく。

そこに現れたのは、まるでトカゲのような生き物(?)だった。

「……………!?!」

その奇妙な怪物を見て、金髪の少女：コーデリア・グラウカと隣にいた黒髪の少女 エルキュール・バートンはそれぞれ驚きの表情を浮かべ……。

「ひ…なにあれ!なんのトイズ?」

そして次の瞬間、トカゲの右腕が鞭のように伸び彼女達に襲ってきた。

「キヤアアアアアアア!」

無意味と判つてても、身を庇うように伏せるミルクィホームズの少女たち。

万事休す…と誰もが感じたその時だった。

《Divine Buster》

謎の音声とともに放たれたエネルギーによって奇妙な怪物はぐらつき、バランスを崩す。

「大丈夫か?」

「!?! 新しい怪盗? 助けてやっというて怪盗はないだろ?」……  
「すみません。」

「何?この人…?」

突如現れた、謎の仮面戦士は彼女たちの無事を確認すると、未確認の前に立つ。

「君い・・・随分無茶苦茶な事してくれるじゃないか？」

青年は謎の仮面戦士を睨む。

「無茶苦茶はどっちだよ・・・少し、O H A N A S Iしようか？」

「!?!」

そんな時、2人の元に突然無数の氷弾が降り注ぎ、二人はそれを間一髪で避ける、突然の出来事に謎の仮面戦士は驚き、氷弾が降ってきた方向を見上げると、其処には青年がこちらを見下しており、そしてそのまま此方へと向かって来るのであった。

「危ないだろ!?!」

「ッ!?!誰だッ!?!」

「ごめんごめん、」

謎の仮面戦士は警戒心を露にしつつ、不審な人物に問うた。青年は

それを気にも留めずに答えた。

「だれだ・・・だって？ハハ、名乗る必要はないよ！」

まるでタメ口を聞く様な、そんな軽い口調だった。にも拘らず、青年の全身から闇と言つ姿で噴き出している様な錯覚すら感じさせた。

その頃…ホームズ探偵学園

「アンリエットさん…これは…？」

学園をまとめる生徒達のトップ。生徒会長アンリエットに青年が見せられた映像…それは最近、海鳴市周辺に現れる魔獣だった。

「ご覧の通り、偵都ヨコハマにも、未確認が出現しています…」

「アンリエットさん、あなたはなぜ僕にこれを？」

「小林さん、あなた達も未確認と戦ってほしいのです」

「え…、僕達が…ですか？」

「ええ。以前ミルキイホームズと共にこれまで何度も、怪盗を倒しヨコハマを救った小林さんなら、今回の未確認と戦えると思います」

「それは、もちろん彼女たちも一緒のことですよね？」

「はい。ミルキイホームズにも未確認と戦ってもらいます。もしかしたらトイズが”アレ”に通用するかもしれません」

「……………」

「…………ちっ、なんて奴等だ」

「…ふん、その程度だったみたいだね？」

謎の仮面戦士が戦っている中、ミルキイホームズ達は瓦礫の陰に隠れていた。

「どつする…？アイツら中々強いよ…」

「ねえみんな、あの”仮面怪盗”さんを助けてあげよう…！」

このシャロの言葉を聞いてネロは。

「待つて！なんで助けなきゃいけないの？！」

「その、私達も助けてもらったから。」

「…しょうがない、やろう！」

コクンと頷いたシャロ達は立ち上がって2手に別れ、形状がメカニカルな杖を撞いている青年達の前に姿を現し、もう一方は忍び足で後ろへ回り込んだ。

「なんだお前ら、まだいたのか」

メカニカルな杖を撞いている青年の一人が鼻で笑う。謎の仮面戦士は叫ぶ。

「来るな！危ないだろ！？」

「わざわざやられに来たのか？まあ別に構わん。俺は戦えればそれでいい」

もう一人の青年が静かにそう言う。



「…フフフ！」

だが青年は静かに笑っていた。

謎の仮面戦士の後ろでは、杖を構えるもう一人の青年の姿があった。

「ルフトメツサー…」

「えいつ！」

だがシャロは相手を拘束すれば隙ができると考えている。

「…！しまっ…」

一瞬の隙をつき、彼女が近くにあったワイヤーの束に念を送ると、ワイヤーが自我を持つように独り手に地面を張り進み、青年の身体を締め付け、瓦礫に身体を打ちつけた。

「うっ…くそっ…邪魔しやがって！」

青年はワイヤーを解き、自分の邪魔をしたミルクィホームズ達に対し、刃を抜こうとするが、三人目の青年が彼の肩に手を置いた。

「な、なんだよ！？」「その位にしておけ。お前の”それ”はここで使うと危険だ！…俺達も巻き添えをくう。」「くっ…」

「…その通りだ！」



3人はそう言い、その場から飛び去ろうとする。

「チツ、命拾いしたな…！」

青年は納得していないようだが、ほかの2人と同様に去っていった。

「ふー、大丈夫か・・・お前ら？」

謎の仮面戦士が振り返り、呆然とした様子でミルキイホームズが彼の姿を眺めている。

「「「「「.....」」」」」

「あつと...この姿じゃ、わからないか？」

気まずい空気を何とかするために、謎の仮面戦士は変身を解く。

「「「「「あつ!? 翠屋のお兄さん!!!?」」」」」

「.....おじ。」

謎の仮面戦士の正体は彼女達がよく食事をしにいく翠屋の息子「高町レイジ」だった。

金髪の綺麗な女性とメイド服の女性が話している。

「起きましたか。どうですか？」

「はい、陛下…殿下は問題ありません。」

金髪の綺麗な女性がゆりかごを覗き込んでいた。

「ふふ、おとなしい子なのね、」

「あの方も喜びましょう。警護の方はどうなっていますか？」

「3名が部屋の外に、屋敷ないに6名、私を含めて総勢10名です。連中にもばれてないと思われませす。」

この赤子は敵対国の国王同士の子供だが、派閥の中には友好を結ぶ気もない連中が多い。だから、密かに匿われて育てられていた。

「陛下、お時間です。」

「分かりました。では、元気でシャルティエ……………」

額に口づけし、金髪の綺麗な女性は寂しそうな表情で去って行った。

この女性は現在、他国との戦争を起こさないように行動している。

それから、更に二年

成長した赤子・・・シャルティエは護衛から魔法、魔法制御、防衛、射撃、肉体強化、斬撃、高速移動、幻術などの使い方を教わった。護衛の人達からも、学問を教え込まれた。殿下とか関係無く・・・厳しく英才教育を施されている。

稽古の帰りし際に銀髪の男性が優しげな眼差しでこちらを見つめてくる。

「父様、いらしていたのですか。」

シャルティエを抱き上げた。

「・・・大きくなったな・・・シャル。」

片手で軽く頭をなでられ、こんな感じに両親は結構来てくれるし、ちゃんと会話してくれる。

それから、一年後。

紛争や内戦が始まっていた。

戦争の激化…それにより、どうしようもなく…少年、シャルティエを逃がすことになった。

「いいですね、私達の教えたことをわすれないで…なにがあっても生き延びて、あなたが目覚めた世界が平和なことを祈っています。」

特殊な呪を掛けられ、ワールドスリープの装置にいれられた。そしてそのまま、他世界へのワープさせられる。

「待つて、……母様まつて、……かあさま!？」

転移によって生じた次元嵐に巻きこまれた

シャルティエ・エ・ゼーゲブレヒトは 時間と空間の歪みを通り抜けいつの間にか”スクライア”に辿り着いていたのだ

「んああ…、はッ!?!……夢か…?」

目を覚ましてベッドから起き上がる。身体は汗びっしょりだった。

「!?!? ……そうか、思い出した。 ……僕は?!」

目を覚ますと…シャルル・スクライアは全てを思い出す…彼は顔に

手を当て…。

## 海鳴市警察署

休憩室でシャルルはティーダと話をしていた。

「シャルル君・・・君の話は本当か？」

「はい。僕は、聖王オリヴィエと霸王インクヴァルトの一人息子。敵対国の国王同士の子供だったんです。」

ティーダは先ほどから、ボールペンをカチカチやっている。

「もしそれが、本当なら・・・。」

「ええ、生きてませんよね・・・僕の家族は・・・いや、父様は生きています。母様も生きています。僕の胸の中で・・・。」

ティーダは静かにうなづく

「それに、今はスクライアの皆・・・レイジ君達・・・もちろん、ティーダさんも僕の家族ですから。」

「そうか・・・。」

シャルルの言葉にニコッと笑う・・・そんな時だった。

此处、海鳴市警察署で警報が喧しく鳴り響く。

「何事だ！」

「け、警部！大変です・・・突然、未確認が現れたんです」

女性の言葉にティータは眉を顰める

「何？気づかなかったのか？」

「それが・・・突然現れたんです！まるでいきなり現れたかの様に」

「何だと・・・はっ、まさか・・・」

「はい、魔獣じゃないんです！まったく別の。」

ティータは青ざめてモニターを見た・・・

揺らぐ陽炎の向こう：紅蓮の照り返しを身に受ける、大柄の女性の姿が8つ：タイトなボディースーツに身を包み、大きなバイザーで顔を完全に隠したその姿は、彼がミッドにいたとき何度も映像で見た。

「間違いない・・・あれは指定犯罪者『マリアージュ』だ！」

「：僕が、行きます！！！」

シャルルは元々持っていた簡易デバイスを持ち、

「待ちなさい！シャルル君！」

シャルルは海鳴市警察署を出て、市街地に向かう。

爆音が響き、窓ガラスや壁が吹き飛ばす……。

しばらくたち爆煙が消えたその場には悲鳴を上げながら人々が逃げる。

「!?!」

シャルルはその人々が逃げてきた方を向くと、8体のマリアージュ・  
・その後ろからも複数の動体反応がある

「ソニックシューター、シュート！」

シャルルが魔法を放った。だが、マリアージュは攻撃を避けようとせず、右拳を固め、魔法を弾く。

「く……ッ」

バイザー越しに見える、無表情な瞳が彼の姿を捉え、相手の腕が形を崩した

肘から先が変形し、次の瞬間には両腕は細身の刃へと変わっている

だが、シャルルは怯まず、一番手近なマリアージュに接近した

カウンター気味に突き出されてきた右腕の刃を身を捻って避け、

「ッ!? だったら! アクセルスマツシュ!」

ガキンツと音が鳴った、そして、左腕の刃は杖型デバイスの一撃で叩き折る

碎け飛んでくる刃を距離を取って避ける。

( 囲まれたらシュートだけじゃ捌ききれない、フィールドを再調整してくる時間なんて無い・・・くっ!! )

マリアージュはシャルルのデバイスを左手で掴み、彼ごと瓦礫の方へ投げ飛ばした。

( しまった! ? )

同時刻、

その頃、ヴォルケンリッター社では・・・最新機器を紛失したと大騒ぎになっていた。

「 V・S<sup>ヴィース</sup>セルラー ” を無くしたやて! ? 」

「 はい。 すいません! 」

ヴォルケンリッター社、社長八神一郎は ” V・Sセルラー ” なる機



器の入っていたトランクを調べる。

(いや違うな、適応者が現れたんや。)

海鳴市、市街地。

マリアージュは瓦礫にシャルルを投げると同時、右腕を漆黒の槍に変化させ、

(・・・やられる!?)

・・・が突然現れた光が、突き込まれてきた槍の一撃を阻止させると、

(なんだ…………?)

彼を離れた場所に転移させ、その光は彼の手に収まる

「これは、レイフォン?・・・いや違う、よく見るとターン式だ。」  
シャルルの手にあるのは、ヴォルケンリッター社で紛失したはずの、最新機器だった。

♪♪…

「やっぱり、君が適応者か…シャルル君。」

「八神さん!？」

シャルルはマリアージュの攻撃をプロテクションで防ぎながら、八神一郎の話を聞く。

「その“V・Sセラー”に古代ベルカ文字を入力して、セットアップするんや!」

「ちよつと!まつt…《ツーツー…》切れた?」

途中で通信が切れてしまう。

「使っしかないのかな…?」

彼は携帯電話型トランスジェネレーター『V・Sセラー』をターンさせ、コードを入力する。

「武装形態!」

《Get Set》

光が満ち、シャルルが右が紫と左が青色の複眼、翠色のスーツと銀色の装甲に包まれた戦士”アステイオン”へと変身を遂げる。

「変わった!？」

”次元戦士アステイオン”…… 1ミリ秒で、武装形態を完了  
……では、武装形態プロセスをもう1度見てみよう……”

「武装形態！」

《Get Set》

”V・sセルラー”の増幅システムにスパーク。増幅された粒子エネルギーが……ソーラーメタルに変換され、シャルルが武装形態。“次元戦士アステイオン”に変わる……

マリアージュがアステイオン目掛けて襲いかかってくる。

「やるしかない！たああっ！」

戸惑いながらもアステイオンが反射的に拳を繰り出す。

拳を受けたマリアージュがひるむ。

変身したこの姿での攻撃はマリアージュに通用する　そう直感したか、アステイオンが無我夢中でマリアージュに攻撃を加える。

拳前面をプロテクションで覆い、反撃の拳打を顔面に叩き込む

「プロテクションスマッシュ！」

美しい能面の様な顔を隠すバイザーを叩き割り、炸裂した一撃でマリアージユは吹き飛び、爆発する。

『Protection』

攻撃を防壁で防ぎながら、アステイオンは素早く距離を取る。2体潰したが、後続が合流してきたらしい。相対するは12体のマリアージユ

恐らくはまだ増えるであろう敵手の姿を睨みながら、アステイオンは身構え、考える

こいつらは、決して強敵ではない。

だが、自分はこの状況を打破することができるのだろうか？

「・・・弱気になんて、なつてられない！行くよ！」

背中を守る逃げる人の為、そんな言葉で己を鼓舞し、アステイオンは躍り掛かってきたマリアージユを迎え撃つ

絶対に負けない                    そんな強い決意を、漲らせて反撃に転じたアステイオンの、常人を遥かに超えた攻撃が、次第にマリアージユを追い詰めてゆく。

アステイオンのキックでマリアージユとの間合いが開く。

彼は構える。地球の格闘技でもミッド、ベルカのアーツでも無い  
…まったく異なる型。

相手目掛けてアステイオンが突進。

(…父様、力を貸して！)

「…カイザーアーツ、霸王…断空拳！！！！」

『霸王断空拳』…力を込めた必殺の一撃が、炸裂。

吹っ飛ばされ、マリアージュの動きが止まり崩れ落ちると同時、爆発する。

「これが…アステイオン…！？」

複眼に投影された文字を見て、荒れた町の中の鏡に佇む自分を呆然と見つめ、呟く。

七森中学校に通う中学生の少女たち。

「さあ、諸君！行こう！！」

「結衣ちゃんいきなり言われても」

しばらく行くと一件の喫茶店があった。

落ち着いた雰囲気その店。

「みんなー、ここにしようぜ！」

きっとその喫茶店のどこか不思議な雰囲気に惹かれたのだろう。

「賛成です・・・いきましよう、結衣先輩。」

店に入ることに少しも抵抗がなかった。

「入るよー」

ゆっくりと扉を開けば、カランカランと心地よい音でドアベルが鳴る。

店の中はござっぱりとした雰囲気に包まれていた。

少女達は一歩足を進めると・・・

「いらっしゃい」

「いらっしゃいませ」

とカウンターから声がかかる。

「ご注文は何になさいますか？」

少女はカウンター席に座りながら店員に言った。

「・・・じゃあラムレーズンたくさん食いたい！！」

「私はアイスクリーム」

店員は少し苦笑して・・・。

「わかりました。では少々おまちください。」

注文が終わると、少女達が

「そつえば、また都内で、人が襲われたんでしょ？多いね、最近。」

「コワイ。」

女の子たちの話の中に…一人の少女が口を出した。

「でも、『仮面の戦士』がやっつけたみたいだよ。」

店員の食器を洗う手が止まる。

「なにそれ？『魔女っ子みらくるん』とか、『星屑ういつちメルル』みたいななの？」

店員がこける。

「違っつて有名だよ！ちまたをにぎわしている正義の味方！実は、次元の彼方からやってきたってウワサが…」

「ふう〜ん、そんなのが現れたの　もう、世紀末ね。」

「そうよ、この所、変な事件が続出してるもんね。」

「ご馳走様でしたー」

カランカラン・・・。

「だってよ、レイジ。」

「五月蠅い。」

レイジはからかってくるホクトに言い、食器を洗い終わると、腰



掛ける。

「確か、さっきの子達は七森中学校の「娯楽部」の子達よね？」

「そういえば、最近いろんな部活動があるよね？」「けいおん部」「とか、「黒科学部」・・・とか。」

アリシアとシャルルが部活動の話に切り替えると、

「！ そうだ。俺たちも作ろうぜ！」「正義の味方部」ってのを・・・」

『却下！』

「なんだよ、皆して！」

と一斉に却下される。

未確認が出現しております。こちらでは先ほど牙や爪のある未確認が駆け巡り、ビルの窓を破る被害が出ております

”謎の移動要塞”が建物を次々と破壊していく。

『進め！破壊しろ！木一本残すな！！人間一人生かすな！！』

そこで謎の爆発が起き、民間人は逃げる。

さらに今度は地鳴りが響き、壁が破られ、謎の武器がビルを破壊する。

今まさに人々の目の前に未確認・・・魔獣が迫るとき

だがそこへ何かの気配を感じ、魔獣が振り向く。

一方、とある街中。

彼方からゆっくりと歩いてくる異形の人影。

その姿は、白い肢体。胸部の所に金属パーツが装飾。腰には本の形をしたツール。発光する複眼、青いレッグには赤いライン。

謎の戦士に魔獣が襲い掛かる。

だがその戦士はその攻撃を交わし、自分も右に左と拳を放つが魔獣は受け止め、互いに取っ組み合う。

戦士は左腕で防ぎ、魔獣のから空きの身体に右足蹴りを放つが、両手で受け止め、バックステップで衝撃を殺す。

飛び蹴りを叩き込む、戦士の繰り出すパンチやキックが、圧倒的な

攻撃力で次々に魔獣に炸裂する。

呆然とその戦いぶりを見つめる人々。

「下がってる！」

魔獣の回し蹴りを避けた戦士はそのまま拳のラッシュを放つ。

『ムッ！？』

互いに止まることなく一気に距離を詰めていく。

仮面戦士はストレートや蹴りを怪人に放つ。

（バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける！）

《Sword mode》

「・・・紫電一閃！！」

強烈な一刀が怪人に炸裂。

『ぐおオオオオオオーッ！！』

怪人は苦痛の断末魔をあげながら碎け散っていった。

## 大爆発

怪人を見事撃破した戦士の姿を呆然と見つめる人々。

未知の敵をたった1人で葬ったその勇姿は、まさにあの”エクセリオン”である。

翠屋

着信音に気づいたレイジはレイフォンを取り出し、

「アリシアか……。」

ソファに座って操作するとアリシアにかける。

『レイジ君?』

「もしもし、どうした?」

電話でテンパってることにレイジはつつこまず……

『う、うん……、あのね、レイジ君。明日って暇かな?』

「ああ、空いてるよ。それがどうかしたか?」

『そ、そのね、福引きでウォーターワールド……プール施設のペアチケットが当たって、良かったら一緒に行かない?』

・・・

「マジか？俺10回中、9回引いて…全部ポケットティッシュだったぞ？…一枚食事券。」

……

……

……

数時間前、アリシアは商店街で買い物を終えて歩いていた。そこに声が聞こえる。

「ざんねーん、ハズレです。はい、残念賞のティッシュだ。」

福引きをやっていた。そこで、アリシアは思い出し、ポケットに手を入れる。

「えっと、確かここに…、あった！」

彼女はポケットから福引き券をだした。そして、賞品を見る。一等は10万円分の商品券、二等は5万円分の商品券、三等はウォーターワールド…プール施設のペアチケット、四等はお食事券、五等は図書券2枚、あとは残念賞のティッシュである。

「すみません、やります!」

「お、可愛い子ちゃんだね!んじゃ福引き券は2枚だから、2回回してくれ。」

そう言われ、アリシアはおみくじを回す…すると、

プール・ゲート前

ウォーターワールドに着いたレイジは……ホクト達とゲート前で会う。

・・・

「とーちゃーく!あっ! レイジ君。シャワーはちゃんと浴びな

いとダメだよ」

「なんで、お前らがいるんだ？ホクトにシャルル。」

2人はヘラヘラしながら……

「細かいなあレイジは…早く入るうぜ？」

「じゃあ着替えたら看板の前に集合だね。」

「仕切るな……って…もういねえ……」

レイジはため息をつき……

「まあ…行けば判るってことか……」

レイジ達は着替えるときに気付いた、ロッカールームは かなり広いのに殆ど鍵がかかっていなかった。それに、着替えているとブルーの方から“キャーキャー”と黄色い声が聞こえ、此処のブルーは他に比べて静かなもの。

「これは確かに穴場だな」

……

……



……

「遅いわよ！高町。」

更衣を済ませたレイジ達は看板を探していたら看板より先にアリシアを見つけた・・・彼女だけでなく、クラスメイトのアスタロツテ・バニングスと巻機<sup>まきはたやまはな</sup>山花までいた。

「…なんで君たちまで？」

「おお、お前ら結構スタイル良いな！」

アリシアは黒。ハナは薄い緑でパレオを巻き、ロツテは薄いピンク色の水着。

「バニングスは除いて…あべしっ！」

ホクトの顔面にロツテの蹴りがグレート激烈アタック！

「アンタねえ・・・風穴開けるわよ」

ロツテは顔は素敵笑顔なのだが、拳を硬く握り、プルプルと震わせている。

「しめんなさい」

怖い…危険を感じたら直ぐに鎮火。

「……なあ、レイジ。我らが聖祥大高のぴちぴちマーメイド達をみてどう思うっ？」

「俺に質問するな。」

彼がどっかの赤い戦士みたいなセリフを言うとシャルルは……。

「照れてるんだよ、彼は……睨まないでよ。」

レイジに睨まれ怯む。

「つつ……俺は泳いでくる。」

アリシアの水着姿を長時間見ていられなり、レイジはすぐ近くのプールに飛び込んで逃げる体勢に入ろうとするが、

「待って……」

と言いながら、彼はしっかりと腕に思いっきり抱き着かれてしまった。レイジをアリシアが引っ張っていく。

(……／／／)

一方、ホクト&シャルルは

「シャルル・・・腹へったな？」

「そつだね・・・何か食べに行こうか？」

「おう！」

「やっぱりこのラムレーズンは見た目から素敵だ〜」

以前、翠屋に来ていた少女”京子”が盛られたラムレーズンのアイス（驚異の五個、コーンもデカい）を見て感激していた。

同じ娯楽部のあかりも呆れ半分で自分のアイス（二段。”京子”以外のアイスは普通だが”京子”のは重ねていない、盛られている）を買い、近くのベンチに腰かけてアイスで乾杯

他の娯楽部の子供達が普通に食べるのに対して、”京子”は一口で一個ずつ食べる。もちろんお決まりの『キーン』に見舞われる。

「海鳴市のウォーターワールド付近で、魔獣が巨大な蜘蛛の巣を張っております！」

駆けつけた警官たちが見上げる中、建物と建物の上に巨大な蜘蛛の巣が張られている。

突如、巣から舞い降りた蜘蛛状の魔獣たちが警官たちを襲い始める。

『ザザザア！』

警官たちが発砲するが、銃弾は魔獣の体に軽くめり込んだだけで、コロコロと転がり落ちる。

魔獣の吐いた糸が、パトカーの窓ガラスを突き破り、車内の警官に絡みつく。

【海鳴市 ウォーターワールド内】

突然、ゲートを突き破って飛び込んでくるパトカー。

事切れている車内の警官を尻目に、車内から魔獣が現れ、ウォーターワールド内にいる人達を襲い始める。

「きゃあッ！」

悲鳴を上げるアリシア。蜘蛛状の魔獣が糸を変形させた槍で突き刺すように飛び出す

レイジは無防備なアリシアを抱え左へ飛び、回避する

「ギギギィ！」

警官たちが魔獣に挑むが、到底通用せず、次々に警官が襲われていく。

「アリシア、隠れてろ！」

「レイジ君!？」

レイジは手に召還された、レイフォンのエンターキーをおす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫んだ!!

「セットアップ！」

《set up》

そう言った時、魔獣が襲い掛かる。

「ちっ！」

隣の流れるプールへ吹っ飛ぶレイジ。なおも追って来る魔獣。

「やああ　　っっ!!！」

襲い掛かろうとする魔獣目掛け、レイジが拳を突き出す。

パンチが魔獣に命中する瞬間　その腕が光輝く、フィンが彼の周りを踊り、瞬時に白い甲冑に包まれる。

「!?!? 高町? なによあれ!?!?」

逃げていたロツテは息を切らしつつ、彼の肉体の変貌に目を見張る。無我夢中でレイジが、魔獣目掛けてパンチやキックを繰り返す。体が光を発し、そして目を開けられないほどの輝きを発生し…腕同様に、脚、胴、そして頭と、全身が次々に甲冑に覆われる。

「あれが、彼の力よ。」

ハナは答える。レイジが変身を遂げたその姿こそ、戦士“エクセリオン”である。

魔獣が襲い掛かる。エクセリオンが槍を軽やかな動きで回避し、リインブッカーで魔獣に切りつけ、建物の壁に叩きつける。

「きしやああ!」

全く応えていない様子の魔獣、口から吐いた糸でエクセリオンを絡め、壁面へ叩きつける。

カン、カン、カン と、とっさにエクセリオンがウォータースライダーの壁面を昇り、屋上へと辿り着く。

一飛びで屋上に飛び乗った魔獣が、尚もエクセリオンと戦う。

「わわッ!?!?」

魔獣の爪がエクセリオンに迫り、その腕がエクセリオンを屋上から落とす前に、放りだされそうになる。

そして滑り出した。曲がる・・・落ちる・・・

突然出現した段差によって飛び出しながら落下するその時、

「デイバインシューター・・・。」

その言葉と共に、少女の周りに32個のシューターが展開され、その内の半数を魔獣に向けて放ち、はるか数十メートルは先にある壁に叩きつけた！

「ハナ、お前あぶねえだろツ?!」

ハナが魔法を放つが、魔獣には効果は今一つのようにだ。

魔獣が獲物をハナに変えたか、彼女目掛けて魔獣の爪が迫る。

「危ないッ!」心配には及ばないわ!」あ?」

彼女はもう一度展開したシューター群の半数を放ち、残った半数を4等分にそれぞれを1つに集め・・・

「ブレイクシュート・・・。」

4条の閃光を魔獣に放つ。

「グエエ!」

「ディバインバスターのバリエーションよ・・・私では威力はこの程度。今のをやってみなさい、エクセリオン！」

どうやら、ハナはこの術技の手本を見せたつもりらしい。

「簡単に言ってくれるな・・・」

エクセリオンはリインブッカーをガンモードに切り替え、

「・・・全開！」

レイフオンをハータリアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition!!》

仕上げと言わんばかりに、エクセリオンはリインブッカーの先端にプログラムを組み込んだ何かを込めた力を収束させて・・・

「名付けて、エクセリオンバスター!!」

魔獣に向け放つ…当然、そんな物耐えられるはずも無い。  
あえなく魔獣は砕け散り、濁った宝石を落とす。



「……ふう。」

ロストロギアを回収し、変身を解除するとアリシアが此方にやってくる。

「大丈夫か？怪我とか……」レイジ君、帰ったら魔法教えてあげる！「なんだよ、いきなり!？」

「……やれやれ。」

どうやら、先ほどの様子を見ていたらしい。

「ローローじっじしてる場合じゃないわね。」

「原因は君でしょ、ハナさん？」

??????      ??      ???????

奴等が、動き出す前に……

そう、奴等が……

どこかの空間で何者かが言い、その場から消える。

エクセリオンの戦いを茂みで見っていた青年に近づいて来た仮面の男

「主がお呼びだ。付いてこい」

仮面の男は青年の手前で止まり、

「……………」

「私に話す時はしっかりと敬意を持って、いいな？」

仮面の男の言葉に奥歯を噛み締めた

「……………はい」

彼は仮面の男の返事を聞いてから歩き、その後を付いていった。

数日後

午後、翠屋。

カラン、カランとドアベルの音、

ホクトとシャルル、アリシアとロッテが翠屋を訪れ、レイジが四人を迎えた。

「あ、みんなきたか！」

4人は広い机のほうに座った。

「アリシア、このあいだ。ありがとな！」

「うん。」

レイジはある程度の術技を彼女に教えてもらった。

話していると、旅行から帰って来たレイジの母「なのは」が茶化してくる。

「…んふふ、何があったのかな？」

「…母さんには関係ないだろ…。」

ホクトが余計なことを言う前に彼が制する。

「っだよ、隠すことないだろ？」

そんなやり取りをしていると、ロツテは・・・

「ところで、アンタの「あれ」一体何なの？」

「……ここで聞かない約束だろ？」

「じゅん。」

レイジは翠屋のエプロンを着て皿洗いをしながら、彼女を少し睨む。

「ところでみんな、今日は食べていくのか？」

レイジは水の入ったコップをみんなの前に置いた

「当たり前だろ。」

4人は窓側に置いてあったメニュー表を真剣な面持ちで見ている

「そういえばレイジ。お前に言いたいことがあるんだが」

「何だ？ホクト」

「やっぱり、ヒーローだったら”必殺バズーカ”だよな？」

「ッ……」

ホクトの質問に3人は口をコップに付けたまま固まってしまった。

「アンタ、オタ過ぎよ……それ。」

「何だよ。いいだろ？」

レイジが皿洗いを終わると、ティーダがやってきた。

「大変だ、レイジ君！」

4人が振り向くと、息切れしていることに気づく。

「落ち着いてください。はい、水。」

「すまない……ングング……っは、未確認だ。」

水を受け取り、飲み干すと答える。

「!?!? っていうか、電話で言えばいいのに……それが通信が繋がらなくてね」? それで。」

「相手は『雷獣型』の魔獣だね。車も動けなくなって……」

『え…?』

ティードに言われて彼らがテレビを見る。その内容は…

『ザザ…海鳴市の山頂から雷雨が発生し、ザザ…現在もそれが広がっています。ザザ…これは天候とかではなく、ザザ…先程この山頂を調査する為に登った警察隊も連絡は途絶えてしまい、ザザ…中の様子も気になりますザザ……』

「ほらね……」

ホクトが画面をよく見て仰天する。

画面に映ったのは。

「おお!? 本当だ…レイジ、シャルル!」

「うっん、あれは僕がやるよ。」

シャルルの言葉にホクトは、

「おいおい、なにエ」レイジ君はここに残らないと「!? っそうか。」

シャルルはそう答えると、海鳴市の山頂へと向かって行った。

『雷獣型』の魔獣が海鳴市の山頂で暴れ回る。

逃げ惑う警察隊。

『この世を究極の闇が覆い尽くす!…ん?』

雷獣が違和感を感じ、その方向を見ると、既に“V・Sセルラー”を構えながら歩み寄ってくるシャルルがいた。

『…お前は何者だ?』

「…知らないよ」

『どうやらお互い、この世界にはいてはならない存在らしいな』

彼の脳裏に、父クラウドの言葉が蘇る。

人はどうしようもなく無能だ、お互いが争いながら永遠に生きてゆく。これ即ち人の宿命なのだ。悪が滅べば善も滅び、善が残れば悪もまた残る。全ては虚しい戦いなのだ

「そうだね……すべては繰り返される……自分の平知を守るために、人は永久に戦い続けるんだ……」

父の言葉を噛み締めるシャルル。

シャルルは黙って雷獣の言葉を聞きながら携帯電話型トランスジェネレーター『V・Sセルラー』をターンさせ、コードを入力する。

「武装形態！」

《Get Set》

光が満ち、シャルルが右が紫と左が青色の複眼、翠色のスーツと銀色の装甲に包まれた戦士”アステイオン”へと変身を遂げる。

「さあ、いくよ！」

アステイオンはそう言つと雷獣に向かって走りだし一発、また一発と雷獣を殴っていき追い詰めていった。

「フツ！ハツ！セヤツ！」

ヒーローとは思えぬ、殴る、蹴り飛ばした拳句、踏みこんではっけい。

『ウグオツ？！お、おのれえ！』

雷撃を放つ雷獣・・・だが、アステイオンは両手の拳を解いて、開手の状態で翡翠色の魔法陣を展開させる。

「甘い！」

雷獣は右腕をアステイオンに突き出す。電気を帯びた鋭い爪が生えている

アステイオンは瞬時に防御するが突き出された電気を帯びた爪に切り裂かれ、後方へと吹き飛ばされた。



「このっ!!」

アステイオンは飛び出し雷獣に近づくと

「絶招炎雷炮!!」

強靱な足での蹴り、絶招炎雷炮を繰り出す。それは軽々と避けられ、後ろに回り込み

「……………クツ！」

アステイオンは必要最低限のステップを踏み、雷獣の攻撃を捌いていくがなかなか攻撃に振り込めない。

その上足の動きは妙に大袈裟だ。

『やるではないか……』

電気を帯びた足を当てようとするが受け止め、軽やかなステップでその拳から逃れる

「黙ってよ。面倒だからこれでさっさと終わらせてあげるよ。」

思い切り大地を蹴り、甲冑の力で強化された脚力が凄まじいスピードを生み出す。

先程の戦法の比ではない速さで突っ込み、拳を……突き出

「・・・甘いよ。」

せなかつた。

「フン、正面から来たら簡単に防げん・・・」「これでいいんだ！」「何！？」

…対するアステイオンは、一撃を綺麗にガードした雷獣に怖気付くことなく、ガードされた状態から、拳を滑らせることで硬直から抜け出し、雷獣の頭上を宙返りして背後に回った。

その動きを目で追っているがかなりの速度だ。アステイオンは雷獣の背後に着地し、右手を軸にするために地面に付き、間髪入れずに足払いを掛ける。

『ぬるいわ！』

が、それを読んでおり、アステイオンを視界に入れるように体をターンさせつつ、足払いを躲す。

『生半可な攻撃は通用しない。それと先ほどの衝撃は伝わったが、傷までは付けられなかったな・・・終わりにしよう。』

「クッ」

そう呟いた雷獣は突如消える。

「！？」

アステイオンが驚愕すると、

「……………がはっ！」

雷獣は目に見えない速さで突進、アステイオンは吹き飛ばされてしまっ。

アステイオンはぶつかりかける岩場を蹴り方向転換。

雷獣は逃さず、高く飛び上がって、両手を握り、容赦なく胴に拳を叩き込む。

「うあっ！」

拳の威力が相当に強く、アステイオンは岩に叩きつけられる。

『貴様あ……………くたばれ!!』

電気を帯びた鋭い爪で、アステイオンに切りかかる。

「ツのっ！」

アステイオンは爪をかわし、その爪を叩き落とし……………そして、

「振動拳 ……!!」

『グ、グオオオオオオ……………ッ!!』

振動拳が炸裂。すると、雷獣の身体に亀裂が入ってきて、ところどころが崩れ始めてきた。



## St・s・22 霸王だアッ！（後書き）

エクセリオンゼミナール 02 アステイオン

ハイテククリスタルスーツ

八神一郎、Dr. クロノを中心としたヴォルケンリッター社が、エクセリオン、未確認生命体（魔獣や戦闘機人）の戦闘データ、エクセリオンの回収したロストログアをベースに開発した生体強化スーツシステム、全身のベースは碧であり、眼の色はオッドアイ。V、Sセルラー内に圧縮収納されている、クリンメタルを超微粒子に分解、電送する。電送されたクリンメタルは約10マイクロ秒の速さで瞬時的に身体に「武装形態」し、特殊戦闘強化服・ハイテククリスタルスーツを形成し、アステイオンに「武装形態」する。汎用性を重視した設計思想、ツールによる変身システムのため誰でも変身可能という差異があったが、シャルル・スクライア用に改良される。

<sup>ワイズ</sup>  
V、Sセルラー

ターン式携帯電話型のトランスジェネレーター。目に見えない敵をサーチしたりできる他、カメラやGPSといった携帯電話の機能も備わっており、古代ベルカ文字を入力することで、電子音が発声されて待機音が鳴り始め、エンターを押すことにより、パワーを伝達された後、紋章の投影図が投射されて効果を発揮する。また、ミッドチルダのデバイスのパーツで強化されている。

セイバレット

アステイオンが使用する悪魔退治用「福音弾」<sup>ゴスペル</sup> 発射拳銃型の武器。

ガンモードとロッドモードの2形態に変形し、拳銃型としては珍しく光線を帯びた実弾を発射する。シューティングアーツの使用でさらに威力が高まり、またロッドモードでは敵を叩き付ける武器として使える。

#### ホーリーネスト

左腰部に装着された、ロストロギアの力を封印、収納するためのiPhone型ケース。

海鳴市内の廃工場付近

廃工場付近の空き地にて、エクセリオンが魔獣と対峙していた。グレムリン型の魔獣。そこそこ強い魔獣だ。

「なんだ？コイツキモいな……」

ホクトがそう呟いた時、グレムリン型の魔獣が攻撃を放った。

「ケ〜！ ケツケツケツケ〜！」

「おわっ、危ねえ！」

グレムリンの攻撃は地面に直撃して辺りに砂が飛び散り、煙幕の役割を果たした。

「クソッ！ さっきの奴の攻撃は“これ”が狙いだっただのか？！」

なんと砂煙の中をくぐり抜け、背を向けているエクセリオンを襲う。

「…………マズい、衝撃弾かッ！」

その瞬間を待っていたかのようにグレムリンは大量の白い球体を飛ばす。慌てて、動きを止めるが既に時遅し。無数の衝撃弾が彼を襲う。

「ぐっ。」

「ケキヤケキヤケキヤ……」

最初の衝撃弾がエクセリオンの正面で爆発する……更に次の白い弾。再び爆発。息をつく暇もなく次の衝撃弾がやって来る。

「レイジッ!!」

すぐさま彼に駆け寄ろうとするが……ティータはそれを制する。

「待ちなさい。」

やがて砂煙がはれ、攻撃態勢に入ったエクセリオンの姿が確認できた。

「ケケケケツ……クアッ!」

拳を握り締め、グレムリンはエクセリオンに殴りかかった。

だが……

『オプティックハイド』

突如流れる電子音声。それが流れた瞬間に、エクセリオンの姿は消える。

「バルカンレイド!!」



リンブツカーの銃口をグレムリンに向け、力を込める。

「ギャあああああああ！」

グレムリンは反応が遅れ・・・直撃。

「あまり面倒な事はしたくないんでな。さっさと終わらせる！」

『ッ!?!』

「煌竜！」

エクセリオンはリンブツカーをソードモードにしてグレムリンに横一闪の斬撃を放った。突然の攻撃にグレムリンは防御出来ず、ただ黙って斬撃を受けていった。

『グ…キヤア…ッ!?!?!』

グレムリンは断末魔の悲鳴をあげながらガラスのように砕けていった。

『見つけたよ。この世界のイレギュラー!』

その光景を影で見ていた少年が近づいてくる。

「未確認生命体……？じゃ、ないな。」

『姿形は、まあ借り物さ。僕が誰かは、すぐにわかる。』

エクセリオンも影で見えていた青年に気づき、リンブッカーをブックモードに戻して腰に収める。

「君のデータと力を手に入れて、僕は飛ぶ……この身のうちに、”僕らの主”を再び蘇らせ、決して砕けぬ、真の王となるためにねッ！」

「お前……」

その時、空中に黒い空間が現れ、魔物が召喚される。飛び出して来たのは巨大な怪鳥。奇声を発しながら空中を飛び回る。２メートル近くもある巨大な翼。獲物を狙う鋭い目。口からチラつかせる牙。

「キャパパパ！」

『僕の名は ……さあ、我が剣の前に君は死ね！！』

青年は名乗ったが、怪鳥の奇声のせいでうまく聞き取れなかった。

「来い！」

魔獣はグルグル空中を旋回していたかと思うと突然、高度を下げ、エクセリオンの真正面から突っ込んで来る。見えるのは黄色く不気

味な歯と赤い舌。魔獣は口を開け、突っ込んできていた。

エクセリオンは即座にバックステップで間合いをあける。振り向きながら銃を構え、横に飛ぶ。

「ストレイトバスター！」

これで攻撃は回避……出来なかった。魔獣の翼は2メートルもある。その翼と正面衝突し、その衝撃でエクセリオンは吹っ飛ばされる。

「ゲツ！！」

吹っ飛ばされた体は地面に落ち、背中を強打する。翼に当たった胸と床に強打した背中が痛む。

一方、魔獣は空中に舞い上がり再び旋回していた。が、

「……まだまだ、シューティングシルエット！」

エクセリオンは三人に増えそれぞれ魔獣を翻弄しながら近づき攻撃をしていく。

それがさらに分かれて四人、それまた分かれて八人になった。

『ハアッ！』

そのまま八人がかりで撃つわ蹴るわ、ヒーローとは思えない闘い方

をする。

「エグッ!？」

さらに追い討ちをかけるように、

「紫電一閃!！」

魔獣を斬り付けた。

「ぎゃああああ!！」

魔獣はたまらず爆発した。

「さ、まだやるか?」…今日は此処までか…? ちよっ、まてよ  
「!」

青年がそう言うと、辺りの景色が歪み彼は歪みと共に消えてしまった。エクセリオンも変身をとぎ、疲れて座り込む。

「なんだっ たんだあいつ…?」

「そうだな、訳がわからないぜ。」

こうして、謎の敵との戦い挑むレイジ達であった…。

月日は一ヶ月以上経って二学期も、もうすぐ終わる。

あの後も、色んな魔獣と戦った。

魔獣との戦闘から数時間後、手掛かりを探す為に街中を回って一時間経ち、レイジは川原で一休みをしていた。

「はああ…なんだか全然手掛かりが見つからないな？」

レイジは文句を言いながらコイントスをする。そして手掛かりも見つからないまま、彼が諦めて帰ろうとした。その時…

「お前がエクセリオンか？」

「!?!」

突然、聞こえてきた声にレイジは驚き辺りを見回す。すると、彼の目の前に綺麗な青色の髪に、エメラルドの瞳をした青年がいた。服装は黒一色で右腕部分の布が無く、腕にはアクセサリだろうか…白銀のブレスレットを身に付け、脚に着けた重厚な青色の脚甲を装着している。

「俺の名前はクーロ。クーロ・フツケバイン。お前の力、見せてもらうぜ!」

その言葉にレイジは僅かに眉を動かし、男を睨みつけると、彼は手に召喚した武器でレイジに襲いかかる。

(速いな!近接戦闘のステップインだ。)

クーロと名乗る青年の攻撃をかわしたレイジは、レイフォンを構え・

「セットアップ!」

《set up》

そう言った時、光輝く、フィンが彼の周りを踊り、体が光を発し、エクセリオンにセットアップする…

「お前、何者だ!」?

「へえ……。」

エクセリオンの言葉に青年はニヤリと笑う。彼の手には携帯電話と銃器が合体した形状をしている長大な銃剣が握られている。

「なあ、俺と戦<sup>ヤ</sup>らないか?自分で言うのもなんだが、俺は魔獣よりもいい相手になると思うぜ!」

青年は鼻で笑いながら言う……彼は銃剣を天に向け静かに言った。

「システムゼロ……ブレード・オン。」

『エクリップスコントロール、正常範囲』

その言葉と共に引き金を引いた瞬間、銃剣から全身に向けて六角形の黒い粒子が結合し合い、鎧となって構築されていく。

「こいつ!？」

直後に現れたのは『騎士』のような金属質な装甲に身を纏った姿である。緑の複眼が黒色の闇の中に映える。

「デイベインシューター!」

エクセリオンはシューターを打ち込む。しかし効果がない。

「効かない!？」

『騎士』はエクセリオンに向けて、エネルギー弾を放った。エクセリオンは咄嗟にそれを避け、『騎士』に近づき斬りつけるが、『騎士』はそれを避け、エクセリオンに銃剣を向け、互いに武器を向けた。

「ストレイトバスター!」

『ハッ、それならこいつで蜂の巣だ。フレシエット・シエル!』

2人はほぼ同時にエネルギー弾を放った。あたりが煙に包まれしばらくしてから煙は晴れると『騎士』はほぼ無傷。逆に相手の攻撃を受けてしまった。

エクセリオンはリンブッカーで『騎士』に斬りかかった。だが、『騎士』はそれを小指一本で受け止めた。

「なっ！」

エクセリオンはいったん離れ、体制を立て直す。

「いくつか聞きたいことがある。海鳴市に”未確認”を送り込んだのはお前か？」

「聞こえねえな。」

エクセリオンは『騎士』に質問を投げつけると『騎士』はエネルギー弾を放った。エクセリオンがいた場所は煙に包まれるが……

「質問は一回だけだ!!」

エクセリオンはリンブッカーを逆手に持ち『騎士』を視界に捉えたまま、向かっていった。

「聞きてえか？この速度について来れたらなあ！」

『騎士』の銃剣から放たれた魔弾は、止まっているが如く遅くな



る。その空間の中を、エクセリオンは疾走した。

地面を蹴りつけてエクセリオンは真正面に浮かぶ『騎士』の放った魔弾をリインブッカーの刃で切り裂き、弾く。

全ての弾丸を叩き落とし『騎士』の首筋へと、エクセリオンはリインブッカーの刃を滑り込ませた。

「確かに。思ったよりつよかったな」

その声にエクセリオンは足を止めた。瞬間、後頭部に冷たい鉄の感触を覚えた。見ずとも分かる。それは銃剣だった。

エクセリオンは僅かに首を動かして、武器を突きつけている影を視界に捉えた。

そこには先ほど攻撃したはずの『騎士』が立っていた。

「あばよ！」

魔弾を撃つ、だが・・・

「何っ！？（こいつ、この距離で！？）」

「終わりじゃないんだろ？来いよ！」

素早くかわす。

「へっ！コイツー！！」

『騎士』は凶刃を向け、エクセリオンはその凶刃と自身の武器でつば競り合う。

S t · s · 2 5 四次元の REVOLUTION

翼状の意匠が体の各所に配されている凱装。片翼の模様。左腕と両足を機械的な装甲が被い、鎖帷子くまじりかたひざのように鱗状になっている……。相手から発せられるモノは異常だ。

『Flash Move』

高速移動でまずは姿をくらます。

「ふん、やっぱり速いんだな」

黒騎士は周りを見渡し始めたが、エクセリオンの姿は見当たらない。

「!?!」

そして次の瞬間、

「もらった!!」

真後ろに現れたエクセリオンがリンブッカーで切りかかった。

それでも身動き一つとらない黒騎士に、刃が届く……。と思いきや。

【受諾 ( Rog )】

(くっ……)

何もないはずの空間からパラパラといくつかの本のページが飛び出し、出現。刃は直前で止められた。

「ん？これか？これは最高で約100億ものページを散布できる。しかも攻防兼用。

連ねれば刃にもなるし、集約すれば盾にもなる。まさに攻防一体の武器なわけだが」

「……だから、なんだ？」

「デバインド      ゼロ……」

突如、エクセリオンに向かって放たれた巨大エネルギー砲撃。

「こっちも本気だ!!」

エクセリオンはリインブッカーをガンモードに切り替え、レイフォンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition! Excellence Bus  
ter!!》

仕上げと言わんばかりに、エクセリオンは持っていたリインブッカーにエネルギーをチャージ!

「エクセリオン・バスター！」

「ハア・・・なんか拍子抜けだなあ。」

黒騎士があからさまなため息をついた。

「な・・・バカな!？」

だが、エクセリオン・バスターは、呆気なく本のページに防がれ、

「ぐあああああああッ!!!!!!!!!」

攻撃を食らったエクセリオンが吹き飛び、地面に叩きつけられ、変身も解けてしまった。

レイジは立ち上がろうとするが、ヨロヨロとしている。

「この程度か？」

「まだ・・・まだだ!!」

与えられたダメージは多すぎる筈だが・・・彼は立ち上がった。

「あばよ!!」

一撃でダウンしなかったことに感心しつつ、黒騎士は攻撃する術を奪われたレイジに止めを刺すためにゆっくりと歩き出した。

「フォトンスマッシュャー!!」

その瞬間、銃弾が飛んでくる、

「・・・邪魔する気か？」

突然の『オッドアイの戦士』の登場によって

「彼を傷つけるなら・・・僕は君を止めるよ。」

「・・・シャルル!!」

\*

その頃、レイジのクラスの担任「虹原いんく」先生が、翠屋を訪問していた。

「あの、先生……うちの子、レイジ君が何か……？」

「いえ、あの子はいいい子ですよ。……ただ、」

レイジの母なのはは、「……ただ？」といんく先生に問う。

「成績も決して悪くないのに……何故、もう少し頑張れば高みに行けるのに……と思ってるんです。」

「……。」

そこへ、ホクトが、

「違いますよ、先生。アイツはいつも、高みを目指してるんですよ。」

「

『！』』

「……おっと、こつしちゃうられない！勘定置いてきますね！」  
そう言っつて彼は翠屋を後にした、

「待ってるよ、レイジ！」

彼は手に”おもちゃの光線銃”を持っていた。これは幼少時、レイジがホクトの家に忘れていった物だ。

一方……。

「ハアアア！！！」

アステイオンが黒騎士に殴りかかるが彼もアステイオンに殴りかかって互いのパンチがぶつかり合う。

互いに吹き飛ばされたが、体制を立て直すと、黒騎士に今度は蹴りかかった。

しかし、相手は避け、殴り飛ばそうとすると黒騎士は攻撃を防ぐ。

右手に握られている銃剣を左手に持ち替えて、右手を拳から開手へと変更していた。



中腰となつて、足を踏ん張つて右腕を一直線にアステイオンの腹部へと狙いをつけて、突っ張りを放つ。

「グッ!？」

呻き声を上げながら、後方へと吹っ飛ばされる。

ズザアアアという砂地を鳴らしている。

「お前も大したことないな！」

「レイジーーーーー!!」

そこへ、ホクトが現れる。

「ホクト!? 駄目だ! 来るな！」

ホクトはレイジに向かって、”おもちやの光線銃”を投げる。

「コイツを受け取れ！」

その”おもちやの光線銃”を受け取る。

「これは・・・はっ!？」

やっば、ヒーローって言ったら必殺バズーカだろ？

「・・・そうか・・・ホクト、ありがとな!!」

「フン、そんな玩具で俺とやるうってか？」

レイジはレイフォンにハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

「おもちゃ”じゃない・・・。”親友からの贈り物”だ!」

《Blaster Mode!》

音声を発したあと、レイフォンを構える。

「セットアップ!!」

《Blaster・set-up》

レイジがエクセリオンにセットアップすると同時にコンバットスーツの形状が代った・・・そして、

『!?!?』

リインブッカーが”おもちゃの光線銃”を粒子化させ、吸い込むと同時にヘッドが音叉状のエネルギー砲に変化する。

「『エクス・レイ・ブラスター』第2ラウンドだ・・・全開でいくぞ!」

「へっ、そうこなくっちゃなあ!!」

エクセリオンは再び、黒騎士とぶつかり合う。

St・s・26 約束された勝利の法鏡

黒騎士の目の前で、エクセリオンのコンバットスーツの形状が変わり、ブラスタースターモードに強化変身。  
驚愕しつつもエクセリオンの挑む黒騎士。

「ふっ……どうやら……思った通り……だったようだ……」

少しダルそうな感じで、

「……。」

エクセリオンの勘が確かなら、超えるべき敵は只者ではない。最悪、返り討ちにあってもおかしくはない……ここで逃げていたのでは、いつまで経っても『兄や父』には届かない。自分は『乗り越えねばならない』。

「分の悪い賭けだ!!」

パワーアップしたエクセリオンの痛烈なパンチが炸裂。強烈なエクセリオンと黒騎士の攻撃の応酬が始まる。

「やるな……。体重移動と遠心力を掛け合わせた一撃か……？」

「そりゃ……、あんがとな！」

ぶつかりあったとは思えないほど、重厚な拳戟音が響き渡り黒騎士の武器が宙を漂った。後ろへ大きく振りかぶっていた銃剣を弧を描くようにして振り落とした。

「ジェットスマツシャー！」

エクセリオンの放った強烈な砲撃を咄嗟に防いだ黒騎士だったが、その衝撃は一撃で腕を痺れさせ、握力の大半を奪い去った。

「何っ！？」

痺れる腕に顔を顰めながらも黒騎士はどういった技なのか冷静に判断していた。

「ハッ！」

攻撃を避けた、エクセリオンは少なからず動揺するが、すぐさまエクスレイ・ブラスターの引き金を引き、追撃を加える。

「戦える！ この、『ブラスターモード』なら……勝てるかもしれないっ！」

それが功を奏したのか、男の刃を見失わずに、すぐさま振り下ろされる一瞬、片方の手で武器を捌く……

『GIGA DRIVE!』

エクセリオンがエクスレイ・ブラスターにハーティアルローダーを装填、黒騎士も手に特殊な刃がついた銃剣を構え、銃から巨大な魔砲を放つ

「セイクリッドクラスター！」

「デイバイド・ゼロ！」

黒騎士の放つ銃剣から伸びる巨大な光の魔弾があたりを砕く。エクセリオンのエクスレイ・ブラスターが、デイバイド・ゼロを防ぐと同時に彼の周りの何百枚のページが破壊されてゆく。

「何・・・？貴様・・・何を・・・したッ・・・！？」

「俺はお前を止めなくちゃならない。まずはお前のそれをバラバラに切り離させてもらう！」

黒騎士はページと光を掻き消され、困惑する。彼の耳に、エクセリオンの声が響く。

「くそ……厄介な奴になっちまった！」

大きな轟音が轟いたあと煙が舞う・

「当たった？」

「たぶん・・・」

ホクトと変身を解いたシャルルは顔を合わせて確認しあう。

「やっぱり・・・」

「あつぶねえ・・・危つくやられるところだった・・・」

煙が収まると黒騎士がいた。

「……あれを受けて掠り傷!？」

「……マジかよ!」

次の瞬間黒騎士がいなくなる。

「レイジ!うしろ!」

シャルルが叫んだ。エクセリオンは背後にいる黒騎士の銃剣による攻撃をかわし、

「レイジ君!」

距離をとって体勢を立て直すと、黒騎士は、すでに砲撃準備をし、放とうとしている。

エクセリオンがレイフォンを手にすると、エクスレイ・ブラスターのハーティアルローダーをコネクトした部分に接続。

『G I G A D R I V E !』

「……まさか!」

シャルルはこれからエクセリオンが放とうとしている術技を知っている。

「あんなのを撃つ気っ!？」

『Starlight』

砲撃魔法最強の威力であり今まで貫けなかったものはないモノ。  
・だが、彼は教えた記憶がない。

「ブレイカー！」

エクスレイ・ブラスターの砲身から桜色の強力な砲撃が放たれる



エクスレイ・ブラスターの砲身から桜色の強力な砲撃が放たれる

「ブレイカー！」

砲撃魔法最強の威力であり今まで負けなかったものはないモノ・・・  
だが、シャルルは教えた記憶がない。

エクセリオンのスターライトブレイカーが一閃。

「何っ！？（ば、馬鹿な。奴の魔法がどんなものだろうとリアクト  
状態の俺に……ダメージを……）」

全てのページが灰と化して崩れ落ち、デイバイド・ゼロをも掻き消  
す。

「チッ！」

放たれる先には無防備になった黒騎士がいた

大きな爆炎と煙があたりに舞う

この時、誰もがあの一撃で黒騎士を倒せたと思ったのだが……

「へっ……やるな、お前……」

身体中から煙を上げ、かなりボロボロになりながらも彼は執念深く立ち上がってきた。

「あんの野郎、何処までしつこい野郎なんだ！」

立ち上がって来る黒騎士を見て、エクセリオンが再び戦闘体勢に入る。

まだ先程のダメージがある筈だが、黒騎士は歩く度に殺気や気迫が徐々に増していくみたいだ……。

その事は、黒騎士と戦っているエクセリオンが一番感じていた。

「……こつちもおめえも、もう限界か……しょうがない、今回は帰るとしようか」

黒騎士は魔方阵の中に入っていき消えていく……こうして、黒騎士との戦いが終わりを告げた。

## 海鳴市警察署

壁に設置してあるモニターに世界地図が表示され、幾つかの光の点が明滅している。

「彼は異次元から来た”ゼロドライバー”だ。名はクーロ・フツケ  
バイン。俺は彼の目的も何もわかっていない。」

と、ティータは説明する。

「異次元から来たって………エクセリオンがここにいること自体凄  
いの、あんなに強そうなお奴がいるなんて………」

ホクトは弱気になりながら言っていた。そんな中、ふっとシャルル  
がレイジがいないことに気がついた。

(レイジ君。どこに行ったんだろう?)

「もうすぐ日が暮れるというのに…あの子…本当にどこに行ったの  
かしら?」

なのはが窓から差し込む夕日を見ながら心配そうに呟く。  
その隣ではレイジの兄、士朗が「仕方ないな」と横にいる母、なの  
はと妻、凜にアイサインを送る。

「・・・心当たりがある、行ってくるよ。」

どこか。

奥の方につつすら影が現れる。

「!?!」

そして奥から現れたのは…

「やっぱりここにいたか」

「あ…兄貴!?!」

兄、士朗であった。

士朗は小さくため息を吐きながら話を切り出す。

「……………まあ……………話は聞いたぞ。警部さんから」

「えっ?」

「だいぶ参っているみたいだな…」強い奴”と喧嘩したとか…  
?」

「…うん、俺の負けだよ。”アイツ”は手加減してた。」

するとレイジは今までため込んでいた思いを言い放つ。

「父さんと兄貴以外なら勝てる」と油断してたつてのもあるしね。」

そう言つてレイジは小さくため息を吐く。すると、兄、士朗は彼の背中を軽く叩く。

「わっ!」

「・・・たたくしょうがないな、ほらよ!」

そう言つて拳を突き合わせ、拳と拳をぶつけあわせる二人。

「帰るぞ、飯だ!」

「あ、ああ。」

兄と話している間に、レイジは辺りを見渡す。夜空はどこまでも不思議な色。普通の黒く遠い色、風も居心地よく、何より静かだと思えてしまった。

私立桜が丘高校近く、

「なー！ゆーいー！今日遊ぼうぜー！」

「あ、うん！んじゃ後でね」

オレンジ色に染まるコンクリートの上を、ギターを背中に乗せた少女・・・唯が歩いている。

「そついえば唯、今日居眠りしてたろ！？」

隣のオデコの広い少女が言う、

「そついうりっちゃんだって、3時間目の現国の時に寝言いいながら寝てたよー、思わず『なあに』って言い返しちゃって、先生に怒られちゃったんだよね。」

他愛もない話を続ける…そんな彼女達に、近づく影があった。

ガチャッ

「え？」

するとそこには異形のモノが立っており、紫色のプロテクトスーツ

のようなものを纏っていた。

少女、唯はその気配を察知し、振り返った。

「唯危ない!!」

「え、え…?」

異形のモノは地面を蹴って唯へと向かっていく。彼女も恐怖のせい  
で目を閉じ背けてしまい絶体絶命のピンチだった。だが、その時……

A c c e l   S h o o t e r !

『グアツ?!』

「なっ…?!」

「……え?」

突如一つの塊が見えない速さで超低空飛行をし、異形のモノにヒ  
ット……だが、異形のモノに全く通用しない。

塊が飛んできた位置からやってきた青年・・・シャルルが彼女達に  
駆け寄り、

「だ、大丈夫ですか・・・って、あれ？君たちはホクト君がいつて  
た、桜が丘高校の・・・？」

「・・・え、えと・・・誰？」

少女が聞くと、シャルルは・・・

「・・・説明は後。今は”アレ”をなんとかしないとね、レイジ君  
頼むよ！」

「ああ！」

後から駆けつけた青年・・・レイジは異形のモノが怯んでいる隙に  
レイフォンを構え・・・。

「セットアップ！」

《set up》

光輝く、フィンが彼の周りを踊り、体が光を発し、エクセリオン  
にセットアップする...



「才前ラ、何者ダ!？」

「”私立聖祥大学付属高校”……”正義の味方部”だ!」

異形のモノはエクセリオンを見ると、不気味に笑い……。

「ククク…ナルホド……貴様が主達ノ邪魔ヲシテイルトイウ……  
丁度イイ此処デ消エテモラオウカ?」

「ちッ……」

『…シヤアアッ!』

異形のモノは容赦なく鋭い爪を向け襲い掛かっていくが、

S a c r e d   C l u s t e r !

「グハアッ!」

拳を使って発射する魔弾にいきなり吹っ飛ばされていき、突然の出来事に何があつたのか分からない二人の少女は啞然としていた。

「……やっぱ、ベルカ式もこういう時便利だな。クセがあるのが難点だが……」

「コシヤクナツ！」

異形のモノも魔弾を撃ち、エクセリオンを狙う。

「へっ！当たるかよ！」

エクセリオンは軽やかな身のこなしで避ける。

「レイジ君！ブラスターは駄目だよ？この子達も巻き添えになっちゃうから！」

「わかってる。こいつで行く！」

《Aggressor Mode!》

エンターを押すと、コンバットスーツのカラーリングがネイビーブルーとブラックにかわる・・・そして、左腰に携行される”リインブッカー”を取り出しソードモードに切り替える。

「ハテロオツ！」

異形のモノがエクセリオンに向かって走り、遅いかかる。エクセリオンはそれを避けるとすかさず異形のモノに攻撃を仕掛ける。異形のモノはその攻撃を受け流すもすぐにまたエクセリオンの攻撃が飛んでくる。異形のモノはエクセリオンの攻撃を受け流したり避けたりしていき、いったん後ろに下がった。

……ガチャンッ

「なぜ、あいつ等を狙う？」

「主ノ命ダ！」

エクセリオンは構えを解くとリンブッカーの持ち方を変え、独自の構えを取る。

「（構エヲ変エタ……。隙ガ見エナイ。ナンテヤツダ。）」

異形のモノが先手を取ってきた。しかしエクセリオンは異形のモノの攻撃を受け流したり避けたりしながら反撃していく。

「クロスファイアシュート！」

リンブッカーをガンモードに切り替えると引き金を引き、異形

のモノを狙撃する。

「ぐッ…！」

それは異形のモノに命中し、腕の武器を破壊する。

「フンッ！」

…イイイイイン！！と、異形のモノがアイビームで空を大きく  
風ぐが、エクセリオンは咄嗟に横に飛び退き、ビームはすれすれに  
はずれ、彼も負けじと砲撃する。

『Flier Finn』

脚部のレガース部分の装甲が変化、光が脚へと走る、脚は光の羽根  
(Finn)を伸ばし、地面を思いつきり蹴って異形のモノにジャン  
プした。

今度は腕に力をこめ、腕に光が走った。

「フラッシュ・インパクト！」

容赦なく鉄拳を放ち、異形のモノへと炸裂、体は完膚なきまでに粉  
々に砕け散った。

「片付いたね。」

「おう、ロギアも回収した。」

二人が話終わると、ギターを背中に乗せた少女が座り込む。

「うっ、お腹すいちゃったよ。」

「唯、お前なあ……こんな状況でお腹すいたって……。」

変身を解いたレイジは溜息をつき、

「じゃあ、ウチ来るか？」

『へっ。』

翠屋

『人の世に邪悪を成す闇の住人ども、ゆるさんかいね！』

店に配置している、大型テレビには一昔前のＴＶドラマが放送していた。

約一時間後、

カランカランとドアベルが鳴り、レイジの母、なのはの視線は自然と扉の方へと向かう。

開かれたその扉の向こうには、レイジとシャルル、救助（？）した二人の少女がいた。

「ただいま・・・」

彼はカウンターに向かって声をかける。

また新しい女の子を連れ込んでなどと、なのはが考え、少々驚いた表情をみせた。

「言っとくけど、客だからな。」

「あっ！お客様だったの？」

何の事かわからず。きよとんとする二人の少女。

そして彼は母、なのはに向き直った。

「じゃ俺、着替えてくるな。」

そう言ってレイジは店の奥へと入っていった。

「ご注文は？」

母、なのは笑みを浮かべ二人の少女に聞く。

「いただきまーす」

時計の針が先程より90度ほど傾いた頃 二人の少女はなのはお手製のスイーツを食す、女の子にしておくにはもったいない食べつぷり。

「バケツプリン、おいし〜い！なのはさん天才!！」

そう言うてにっこりと最上級のいい笑顔で。

「あゝあ、遷達も呼べばよかったな。」

「ねえ、君達確か・・・放課後ティータイムの・・・。」

シャルルは二人の少女にいろいろ質問する。

ホクトはシャルルから、放課後ティータイムの子たちがいると聞いて・・・翠屋に向かって走り、急いで中に入った。

カランカラン・・・とドアベルの音、

「いらっしやい……」

「レイジ！放課後ティータイムの子が来てるって本当か？」

「……ああ、向こうの席の「コーヒー頼むわ」っておい！」

注文すると、一目散に彼女たちの下に向かう・・・あきれながらレイジはテレビをつけた。すると、テレビ番組内では中華街のビルが倒壊、そんな映像が番組出演者達の後ろで起きていた。テレビのスタッフも気付いたようでアナウンサーが「こっちこっち！！」とカメラを誘導している。

「ビルが・・・倒壊している!？」

「いったい何が・・・ん？」

レイジとシャルルは驚く・・・その時、レイフォンが鳴った。何事かと思いレイジは慌てて電話に出た。



「はい、もしもし・・・」

『レイジ君!』

かけてきたのはティータのようだ。

「ティータさん、どうしたんですか？」

『今ヨコハマの中華街に来ている・・・未確認の襲撃でビルが倒壊しているんだ・・・』

「なんだって!? 今、中華街にいるんですか!？」

あまりのことにレイジは驚き、その声にびっくりしたティータは電話の向こうで彼等に指示をする。

『・・・レイジ君、シャルル君を連れてヨコハマの中華街に来てくれ!』

「分かりました、僕も今から向かいますからあまり動かないで下さい!」

シャルルが一度代わり、返事をする

『分かった、君達も・・・うわぁッ!!!!!!.....』

ツーツー・・・

「ティーダさん!? ティーダさん!!!!?? くそ!!!」

突如ティーダの声が遮断、残ったのは機械音だけだった。

「急がないと!!!」

レイジは勢いよくドアを開けると中華街へと向かった。シャルルも彼についてゆく・・・

・・・

中華街

・・・

「ここか・・・」

急いで中華街にレイジは一番にティーダを探し始めた。すると・・・

「翠屋のお兄さん?!」

「・・・お前、確かシャーロック・・・だったか？」

「はい！お久しぶりです。」

過去のロストログア事件で会った少女シャーロック・・・通称「シヤロ」だ・・・

「なあ、シャーロック。ここらで、紳士っぽい刑事さん見なかったか？」

「？ いいえ、見ませんでしたけど・・・」

「そうか・・・はあ、どこいったんだろ・・・」

レイジは頭を搔く。

「・・・ごめんなさい、お役に立てなくて。」

「いいんだよ、無事な奴がいるならそれで。しかし・・・これは凄いいことに・・・」

テレビで見たとつり、中華街のビルが倒壊していた・・・さっきよりも酷い・・・。

「はい、さっきからあちこちで爆発があつて、それで・・・」

「これも未確認の仕業かもしれないな・・・とりあえず君の仲間と合流しよう。案内頼めるかい・・・えと、シャーロックちゃん？」

「はい、ごつちです」

こうしてレイジ達はシャロについていき、彼女の仲間達の元へと向かった。

――

八王子ビル

「ヒドイ・・・」

「完全に倒壊してるわね・・・」

シャルルの言うとおり完全に倒壊しておりどんなビルだったかすら分からない。

「シャーロックー!!」

突然背後から声がかかり、2人とシャロが振り返るとそこには仲間の3人が立っていた。  
彼女達の隣には男が立っている。

「せんせ〜い！それに皆さん…」

「よかった、しんぱ・・・」

レイジ達が彼女達と話そうとすると、レイジはその気配を察知し、振り返った。

「…ッ！」

「アオー、アオー」という鳴き声が聞こえた。動物の様でもあるし、人間の様でもある。

隣を立っていたシャルルが顔を上げた。

「シャルル、あれは……」

「気をつけて、何をしてくるか解からないよ。」

そう言いながら周囲を見回した途端、頭上から次々と矢が降ってきた。

「うおわっ！」

あわてて見上げると、倒壊している建物にいくつかの人影のようなモノがあった。緑色の肌にたくましい体をしている。強靭な剛腕、そして尾を揺らす脚部…。

グオオオオオオオオオ！

「レイジ君。応戦だ！」

「わかった、いくぞ！」

レイジはレイフォンのエンターキーを押し、

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざす

続いて、シャルルも『V・Sセルラー』をターンさせ、コードを入力する。

「セットアップ！」

「武装形態！」

《set up》

《Get Set》

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。光が消え去ると、そこにいた彼はエクセリオンに姿は変わる。

隣のシャルルは体に光が満ち、右が紫・・・左が青色の複眼、翠色のスーツと銀色の装甲に包まれた戦士”アステイオン”へと変身を遂げる。

「!?!」

「そういえば、小林は見るの初めてだったな？」

レイジ達に変身した直後、近くにいたローラー型の警護ロボットが応戦を始めた。しかし、敵は瓦礫を盾にしており攻撃が当たらない。

「当たらない!?!」

効果的な反撃ができないうちに、ローラー型の警護ロボットが異形の攻撃に当たって倒されていく。

「くそつ、分が悪いよ!」

「無理だ。ネロ、彼等に任せよう。」

シャロ達の上司、小林オペラは彼女達を連れ、その場から離れる。

「これで!」

アステイオンは腰にあるセイバレットを構える。

「ソニックシューター!シュート!...!」

アステイオンの放った魔弾が頭上に向かって空気を切り裂いて飛んだ。魔弾が五つ降り注ぐ直後に悲鳴が響き渡る。

「ギャアアアッ！」

アステイオンは次々とアクセルシューターを放ち、魔獣に命中させた。彼らはたまりかねたらしく、瓦礫から瓦礫へと跳び移って逃げていく。

「さてっと…こうしちゃいられないな！」

エクセリオンはソードモードのリンブッカーを持ち直し…、

「いくぞ、シャルル！」

「うん…」

とりあえず撃退に成功、彼等は奥へと走っていった。

\*



「……うっ、うっ……」

その頃、奥の建物付近では、地面に倒れていたティードがなんとか起き上がっていた。

が……廃ビルの壁に寄り掛かり、その場に座り込む。その動きを見る限り、これ以上無駄に動けないだろう。

「く……ハア……！」

だが、そんな彼の元に一つの影が。

「愚かな」

マントの様な物に身を包み片手に布で巻かれた巨大な棒状の物を持った男。

「お前は確か……あの、魔獣を指揮していた戦闘機人か……？」

男……戦闘機人は早足で森を進み、ティードに突進する。彼も構えるが……

「遅い……」

攻撃を軽く避ける戦闘機人。

しかし、それもティータの計算の内。

相手は人間ではなく『戦闘機人』だ。

へたなことは出来ない。

銃型の簡易デバイスを持っていた手とは反対の手で放ったバインドで戦闘機人を捕らえ、吹き飛ばした！

瓦礫に叩きつけられる戦闘機人。

普通の人間なら気絶する程度の衝撃が、その体に走る。

だが、『戦闘機人』である相手には効かなかった。

ヒョイツと立ち上がってくる。

「…お前達の目的はなんだ？」

「これから死ぬ貴様に、説明する必要はない！」

そう言うのと戦闘機人は、半ば廃墟と化したビルを上に向かって飛び移り始めた。

複数のビルの側壁を蹴り、ビルの上へと昇っていく。

まるで、アスレチックでもしているかのごとく。

ティードもそれを追掛ける。

廃墟として残ったビルの中で、一番高いビルにまで登ってくると、二人は再び、その屋上で対峙しあう。

「厄介な相手だ……。」

相手は目を吊り上げながら殺気を噴き出しており、戦う気満々だ。

戦闘機人相手に手も足も出ない。このまま戦いを続ければ、ティ  
ーダがやられる可能性もある。

『・・・砲撃のチャージ確認・・・物理破壊型・・・推定Sランク・・・』

「IS・ヘヴィバレル、発動」

戦闘機人の構えていた大砲から巨大な砲撃が発射された。

「くッ！」

その時、ティーダが目を見開いて疾走した。直後に碧い閃光が走  
り、発射された砲撃は直撃され・・・

そして爆発・・・。

煙に包まれティーダの安否は確認できない。

彼がプロテクションをかけていたとはいえあの直撃をまともに受け  
てしまったのなら。

しかし、煙が晴れてくるとそこには彼・・・ティーダは無事だった。

砲撃からティーダを守った戦士がいたのだ。

「すみません。・・・少し、てこずって・・・遅くなりました」

腕の翠色のフィンを輝かせたアステイオンが戦闘機人の砲撃から間一髪ティードを守ったのだ。

「…いや、助かったよ。レイジ君は？」

「紫電…一閃！」

戦闘機人に狙いを定め、剣を握りしめてフラッシュムーブで近づくとエクセリオン…。

「何ッ…くッ!？」

一度目の斬撃で戦闘機人の武器を破壊、次の斬撃を戦闘機人は取り出した左右二本の蛮刀で防ぎ、反撃する。

「チッ！」

その動きは目で追うのが難しいほど速い。

戦闘機人は目を見開いて跳躍し、右の刀でエクセリオンを袈裟がけに斬り裂こうとするが…防ぐ。

左の刀を一閃させるが、プロテクションで防ぐ。

「防いでいるだけでは俺には勝てん…んなの…解ってただよ!」何ッ!？」

無防備になった、戦闘機人の背後にアステイオンが構えていた……。

「霸王断空拳！」

「！？ しまった！？ ウオオオオ、オオオオオツ！」

すさまじい拳撃が戦闘機人に炸裂。戦闘機人ははるか数メートル先の瓦礫に吹き飛ばされる。

「舐めるなツ！」

戦闘機人は体制を整えると、アステイオンに襲いかかる。彼は辛くもこの一撃をかわした。

だが…戦闘機人の攻撃は止まらない。跳躍してからの斬り下ろし、首筋を狙った一閃、鉄拳に足払い、顔面を狙った連続の突きが続く。

333

(さっきより、速い！？)

見た目はスーツを着た男だが、殺人的な剣技を奮う時点でエクセリオンとアステイオンは普通ではないと…判断する。

戦闘機人の顔に笑みが浮かんだかと思うと、取り出した無数の濁った宝石を地面にばらまく。閃光と共に異形のモノが現れる。

「コイツツ！？」

未確認が襲いかかるが…エクセリオンは斬り裂いた。糸の切れた操

り人形よろしく崩れ落ちていく…が、数が多くて霧がない。

そこへアステイオン達の援護攻撃。

「レイジ君…ここは僕達に任せて。」

「たった今、俺の部下が加勢に来た。戦闘機人は頼む！」

「わかった……来い！」

「何のつもりだ?!」

他の皆が集まってきたのを確認すると。エクセリオンは戦闘機人を挑発。

すると、戦闘機人が疾走し、すさまじい速さでエクセリオンを容赦なく逆袈裟の斬撃を放つ。直後に金属音が響き渡り、その蛮刀が空中に放り出される。

「ならばッ！」

「ストライクアーツなら…俺も出来る。」

戦闘機人が素手に切り替えると…エクセリオンもリンブッカーを腰に戻して構える。

「キエロ！」

「ッ!!!」

未確認はアステイオンに殴り掛かった。

ガシィ!!!

「!?!」

「君がね!!!」

ドガァ!!!

その瞬間、相手に一瞬の隙が生まれた。アステイオンは未確認の拳を受け止め、素早く振りほどくと右足で蹴りを叩き込んだ。

「グフアァ!!!」

直後に攻撃を受けた未確認が宝石に戻る。

黒科学部、トイズ使いの援護攻撃により、未確認の数が減る。



未確認らは激昂し、三体まとめて襲いかかってきた。アステイオンはフットワークで敵の攻撃をかわしながら後退していく。

三人の後ろから、ゆっくりと中型の未確認が歩いてきた。狙いはトイズ使いの様だ。

「きゃああっ！」

相手は体がかがめたかと思うと、いきなりミルキイホームズ達の横を駆け抜けた。同時に鉄の爪の一撃を放っている。

「プロテクション！」

しかし、それは彼女達に届く事はなかった。アステイオンが割り込み、プロテクションバーストで弾いたので。

「さっすが！頼りになるー！」

「ありがとうございます。」

「気を抜かないで！次が来るよ！」

戻って…エクセリオンと戦闘機人が戦闘を開始した。戦闘機人は攻撃をしたが、全て交わされていた。

「ふん、」

すると、アステイオンの声が頭の中に響いた。

『レイジ君、後ろ!』

どうやら、相手もフェイクシルエットを使えるらしい。

「ありがとう……よッ!」

「何ッ!?!」

エクセリオンは後ろを向かず、分身を倒す。

「つて…気付いていたけどな!」

エクセリオンは攻撃を防ぎ、フラッシュインパクトで攻撃。

「ちいッ!?!」

エクセリオンの拳をまともに受け、戦闘機人は後ろに吹き飛ばされた。

エクセリオンは一度距離をとり、じりじりと間合いを詰めていく。戦闘機人は表情を殺している……何を考えているのか、さっぱりわからない為、行動が読みづらい。

突然、攻撃を受け…戦闘機人は後ろに吹き飛ばされた。戦闘体制を立て直す。

(来るかッ?!)

エクセリオンは突進し、戦闘機人の顔面を目がけて右手を一閃させた。相手はスウエーバックでこれをおかわす。

(速いなんて物じゃない。一瞬でも気を抜けば……。)

戦闘機人が笑みを浮かべたのを見て、エクセリオンは仮面の下で鋭い目付きをしている。それはそうだろう…これだけの猛攻にさらされながら笑ってられる相手は普通じゃない。

(チッ!)

戦闘機人は身を翻し、体を折り曲げて胴を狙ってくる。エクセリオンは素早く後退してかわす。直後に、踏み込んで連撃を放つ。

「ジェットステップ」

それを受け止め、同時にジェットステップを腹に叩き込んだ。

「がはッ!」

相手は顔をしかめ、後ずさった。

「やったか!?!」

エクセリオンは勝利を確信した。

「ここまでか……。」

「待てえっ！」

しかし、戦闘機人は後ずさりながらも、その跳躍力を生かしてこの場から離脱した。

「クツ、逃がしたか！！」

「なんて奴だ。あれを喰らってもまだ生きてるなんて、戦闘機人が……。」

エクセリオンは変身をとぎ、レイジに戻った。

エクセリオンゼミナール 03 エクセリオンその2

### スーパーセットアップ

エクセリオンには、戦況に合わせてコンバットスーツの性能を変化させるスーパーセットアップという常識を覆すシステムを搭載している。スーパーセットアップは装着者の意思にリンクして超変身を行うことで多様な戦場に対応する、「進化」するシステムである。これによって、機動性を重視したアグレッサー、格闘能力をさらに向上させたセイクリッド等、自在に姿を変える。スーパーセットアップ自体は瞬時に行われ、かつ連続してスーパーセットアップすることも可能。しかし、体力の消耗が激しく、しばらくすると元へ戻ってしまう。

### アグレッサーモード

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。

エクセリオンの高速戦闘形態。カラーリングはネイビーブルーとブラック。エクセリオンがスーパーセットアップした姿の中で機動性と運動性能S+を誇り、最高速度420km/hを叩き出し、高度跳躍を連続して行うことができる。しかし、高速性能に追求する過程で、攻撃力の面では他の形態に比べると芳しくない。

### セイクリッドモード

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。

機動力特化のアレグレッツサーモードに比べてす速さは劣るが、攻防を兼ね備えた圧倒的な戦闘力を発揮する。コンバットスーツ自体のパワーと装甲強度に加え、AMFやゼロエフェクトをも弾き、ディバイド・ゼロの直撃にも耐える「聖王の鎧」を装備。パワーもエクスリオン3形態中最高である。これにより高い瞬発性能、突進力を確保しているが、高速戦闘には対応していない方。

#### ブラスタ

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。管理局から無断で持ち出した航空魔導師用の総合支援ユニット「砲戦用の大型粒子砲」「中距離戦用プラズマ砲」「近接近用実体剣」を内蔵した「フォートレス」と「ストライクカノン」の戦闘データを組み合わせることで完成した「エクスレイバスター」を装備した形態。

#### エクスレイバスター

ヘッドが音叉状型のエネルギー砲。使用時にはリインブッカーを用いて召喚する。レバーを引くことでブームが多少伸び、光の羽根を広げる。「ギガイグニッション」の電子音声と共に収束し、桜色のエネルギー弾を放つ「スターライトブレイカー」が必殺技。

#### エクシード

エクセリオンのスーパーセットアップした姿のうち一つ。

全てに特化した形態で、超近距離格闘戦、最高速度も向上している。スーツの噴射口から噴出した粒子と虹色のフィンによって飛翔し、

時速560km/hと言う圧倒的な機動力と速度による、”ACS  
ドライバー”が必殺技。

「翠屋」でのアルバイトに慣れたアリシアは今日も張りきっている。

「お待たせしました、『翠屋特製バケツプリン』です。」

レイジと知り合った人物達にもこの店は親しまれるようになり、

「わあ〜！見て、あずにゃん。バケツプリンだよ〜！」

「先輩、食べられますか？」

商売繁盛。今日も仕事に励んでいた。

「そういえば知ってるか、レイジ!？」

「何がだ、今忙しいんだよ!？」

「そう言うなよ。」

それは平穩の筈だった

特に理由もなく、只の暇つぶしの筈だった

「おい、いいから。これ見てみるよ。」



「なんだよ？……これは…コスプレ…いや、違う！」

レイジは皿洗いを終え、ホクトは端末機を操作し、暇潰しで見つけたネットのとあるサイトに興味を惹かれているのを観る……。

「これは確か…お前のハマってる深夜放送のアニメか？」

理由はそこにはまるで…。

「魔法しよU…いてツ」人が沢山いる場所でいうな！「悪い…。」

本当に見ていた様にティードから聞いた”ミッドチルダの過去”と似た様な事件を始めとした数々の物語があった。

「魔導師…。」

違う点があるとすれば……

「そついえばこれ…この人、なのはさんに似てないか？」

ディスプレイに映っているのは、白い服にジャケット、前が開いたスカートを着ていて手には先端が金色で赤い宝石がついた杖のような物をもっている女性だ。

「所詮は他人の空みたいなもんだろ？大体、このキャラ・・・若いし・・・。」

「レ〜イ〜ジ〜くん？少し、O H A N A S I Iしようか？」

殺気を感じたレイジは咄嗟に、

「結構です…母上様。」

と、彼女から遠く離れた。

一方、窓際。同じく、常連である黒科学部御一行に話を聞いていた。

「最近、市街地で殺人鬼が出るんだって。被害者達はまるで獣に襲われたらしくて悲惨な状態だったらしいよ。」

「きゃあ！怖い、お兄ちゃん。」

「ちよつと、和葉!？」

兄妹のやりとりに溜め息を吐きつつシャルルは…

「獣…まさか、未確認？」

「解らない……直兄に聞いてみるかな？」

近くで聞いていたレイジは、その一連の事件の背後に以前、対峙した『連中』の影を感じていた。

そのころ、別次元…ミッドチルダでは…そこは荒れ果てた大地、濁った空、そして瘴気、黒い霧が世界に充満していた…。

何かの力で空へと飛び立った少女は今まで戦った事の無い、亜種の未確認に苦戦を強いられていた。

「くっ、あの未確認なんなんですか?!今まで戦ったモノとは全然違う戦い方をしてきますわ!」

「…それにあの見た目、なんか凶悪そうで嫌ですー!」

「深緑の模様が入った未確認か、昨日報告にあつた“黒い鳥模様”が入った未確認には似てるが、攻撃方法や形が随分違うな…。」

「当たらなければ大丈夫なんだが、今回はかなり、分が悪いです」  
今少女が戦っている未確認は、従来の異世界の生物に似てはいるものの、先端と思われる部分には内側に曲がった角が二つついており、攻撃も本来の異世界の生物の術技に加え、近づこうとするなら黄色い雷が未確認から発せられ近づき難いのだ。  
所謂じり貧である。

「少尉、まだ弱点は見えないんですか?!」

「少佐! 右です、右!」

少女の後ろから狙撃するタイミングを計っていた少佐が、誰よりもいち早く少尉が展開しているプロテクションの死角から、黄色い雷と同時に向かっていく魔弾を察したが少し遅かった。(まずい、このままでは少佐が!)

少佐の前に現れたのは、甲虫の姿をした化け物だった。その眼は白く、口には牙を持ち、手と爪には鋭い刺を持っていた。

「がアアアアアアアアア」

甲虫は少佐にその手を上げ、一気に振り下ろした。

「ぎシャアアアア」

声に気づいた少佐が右に目をやる。だが、プロテクションの展開も救助も間に合わない。

少尉の声に気づいた者達は、誰もが無理だとあきらめた。

「少佐ー！！」

そう叫んだ少尉の横を黒い何かがすり抜けた

黒い何かと甲虫はが空中でぶつかりあった。

そう錯覚する程それは早く空を駆けた。

二つの何かは再び混じりあう。

大きな爆発がした。

そして、黒い何かは魔弾を放つ、

「……………！」

魔弾は未確認へと、狙い通りに当たり

「……………ハアアアアアアアア」

神速の一撃が、異形の甲虫の身体をかすり、傷をつけ、二つ目でヒビを入れ、三つ目で完全に破壊した。

「…消える！」

甲虫型の未確認はバラバラに砕け散り、周りにはキラキラと輝く寶石の欠片だけが残った。

そんな所に独りの紳士が立っていた。

紳士の容姿は肩まで伸びた黒髪に整った顔立ち、瞳の色は金。そして最大の特徴は両の目がオツドアイ。

「……、生体反応はあるか？」

『解かったよ、……。正面5キロ先に大型の生体反応がある、僕たちでかたづけよう！』

「ああ。」

St・s・32 騒がしいヤツラ

海鳴市 翠屋

アリシアの小さい頃からの親友「アスタロツテ・バニングス」愛称ロツテ。彼女は何やら、不機嫌な様子…。

「肉、」

「え？」

「肉」…その言葉から始まる。

「アンタの事言ってるのよ！何そのスタイル？中 生から馬鹿みたいに育って!？」

「いや…お前が小s…「風穴開けられたい？」「すみません…。」

ホクトはロツテの「風穴開ける」の一言で黙る。

「アンタみたいな“下品な乳牛”…肉で十分よ、肉で…!」

「ちよっ…お前、言い過ぎ」止める「…レイジ…。」

ホクトが反論する…が、レイジが制すると…ハナが聞く。

「どうしてかしら…?一番頭にくるのは…貴方じゃなくて?」

「…まあな、でもあいつら「俺とホクト」みたいなモン…だから、

ああいうのはいつもの事じゃないか？」

ホクトが「なるほど」「と言って、席に座ると…ロツテがこっちに来て口を開く。

「高町。ちょっと聞くけど、あの子の何処が好きなの…まさか、m  
「それは違うぞバニングス。」「…へ？」

「こいつはアリシアが好きだから…アリシアの全部が好きになったんだよ……な、レイジ？」

ホクトがレイジにそう聞くと…そっぽ向いて舌打ちする。

「…お前ら、会計済ませて…とつとと帰れ。」

(ヤバい、逆鱗に触れたか?)

カラン、カラン … とドアベルの音、

「知ってるか？シャルル。レイジ…小さい頃、なのはさんの事…  
…”ママ”って、呼んでたんだぜ！」

「ええええ！？」

「ちょっと…？高町って、マザコンだったの？」

ホクトがそう言うのとロツテ達は驚く。



「今の彼からして、信じられないわね……。」

（……そういえば、アイツ。”僕”って言わなくなったな……  
何時から”俺”って言うようになったっけ？）

ホクト達が会計を済ませて……外を出ると、レイジはエプロンを外して、腰掛ける。

「……たく、騒がしい奴等だ。」

「ふふふ……お疲れ様。」

デジタル時計は19時を回っていた……。

「ねえ……レイジ君。さっきホクト君が言った事……」

「……送ってくよ。」

（……たく、素直じゃないんだから……）

レイジの様子を見て、クスクス笑う……母、なのはだった……。

S t · s · 3 3 それは大いなる危機

海鳴市桜台。

時間にして午前六時三十五分。空は太陽が顔を出そうとしている頃。天候は晴れであり、太陽の暖かさが肌に伝わりやすい時間帯である…

『空港で大規模な火災発生!!!』

レイジ達は空港へ走っていくと、それらが視界に飛び込んできた。

それは、まるで地獄絵図。

「!?!」

キィッ!と急ブレーキ。

突然の爆発に驚き、レイジがバイクを止めると、目の前に顔には菱形のマスクを被っており、全身黒タイツで面や体は白、赤、青などの色が基調の集団に遭遇したのだ。

「クククク！」

もう一つ、一番目につくのはその連中の顔から湯気が噴き出て白く包まれている。

「!?!」

レイジは目の前に立ちはだかっている未確認、魔獣達に対して、アクセルを全開にして直ぐさま、走り出した。

「らあああああっ！」

バイクが宙を舞い、魔獣達の頭上を飛び越え、払い抜けた。

「よし、上手くいった。」

その時、魔獣の一体は、目を見開いた。直後に口から大量の炎が噴き出した。

「フッ!！」

レイジはそれを見切って、最小限の動きで跳び下がって避けた。

魔獣達は驚愕していた。人間だと、侮っていたからである。その予測を180°覆された今、彼等はただ追いかけるしかなかったのだ。

魔獣達の攻撃をかわしたレイジは、レイフォンを構え……。

「セットアップ!」

《set up》

……レイジがレイフォンにミッドベル力混合式文字を入力して……  
・そう言った時、光輝く、フィンが彼の周りを踊り、体が光に包ま

れて、エクセリオンにセットアップするのさ!!

「・・・ホクト君。遊びじゃないんだよ!?!」

「いや、ワリイ。ナレーションしてみたかったんだ!」

勝手にナレーションをしていたホクトはシャルルに注意される。

「無駄ダ! 今度ヤラレルノハお前タチダ!!」

「それはどうかな!?!」

魔獣が、火炎をまとった曲刀を一閃させた。体勢を極限まで下げてそれをかわし、

「ふんっ!」

「デイベインシューター!」

デイベインシューターを喰らい転倒し、爆発した。

エクセリオンの思惑通り、両隣に魔獣達が挟み込んできた。

「らああっ!」

エクセリオンの蹴りを喰らった戦闘員は同じ様に爆発した。

「ガアアッ！」

魔獣たちは余程驚いたらしく、一斉に襲い掛かってきた。

「ハアッ！！」

体勢を下げたまま高速で移動し、踏み出すと同時に魔獣はエクセリオンの攻撃を喰らい、一体は数メートル先の壁に激突し、

よろめいた相手の体を、踵落として地面へとたたき付ける攻撃。

「グゲエッ！」

敵がのけ反った所で、その胸板を目掛けて拳を放つ。

「グアアアッ！」

エクセリオンの足払いを相手がジャンプしてかわした場合も、低い体勢からリンブツカーで撃つ、彼の速度からいって、かわされる事はない、

「さあ、後はお前だけだ！」

「があ、ああああああああああっ！」

絶叫が響き渡り、魔獣はヤケクソ気味に突っ込んできた。

「これで……………終わりだあ!!」

「ぐうアアッ!」

「フウ、これで全員か。」

エクセリオンは突っ込んできた魔獣に対して、回し蹴りを喰らわせた。そして、魔獣達は全滅した。

何かの気配を感じた、レイジはすぐに足を止めた。

「誰だ!？」

魔獣達を倒したのも束の間、突然聞こえた拍手にエクセリオンは警戒心を強めた。

「前より強くなったじゃん、今日は退散と行きますか」

男が濁った宝石を地面に投げ込むと・・・そこから青い身体の巨大な怪物が出現した。

「あばよっ!!」

それだけ言つと男は退散した。

巨大魔獣はエクセリオンに今にも襲い掛かる勢い・・・彼はセイオウを呼ぶ。



S t · s · 3 4 大地 駆ける 超人

（空港）

セイオウグレートは空間に乗り込む。

すると内部が揺れ、セイオウグレートがバランスを崩して、落ちる。

巨大魔獣は、この空間では、4倍のパワーを持つことができるのだ……

巨大魔獣の猛攻に苦戦するセイオウ。

『クロスファイアシュート！』

セイオウグレートの右腕から、高出力の弾丸が数発、発射される。巨大魔獣は後退してかわし、炎をまとった剣を突き出してくる。

『なるっ！』

こちらは避けるのに必死だ。

セイオウグレートは大きく踏み込み、足を薙ぎ払った。相手は横に跳んでかわし、

『くっ！』

直後に渾身の力で斬りつけた。

手強い。横薙ぎの一撃を放った。

大量の炎をまとっていて、かわしたが…セイオウグレートが反撃に  
転じられないでいる。

相手は巨大な曲刀を振りかぶって斬り下ろす。二発、右足首と右  
腕上腕部に食らってしまった。

『うわっ！』

連続した鋭利な逆袈裟、攻撃に魔獣がセイオウグレートを斬りつけ  
るが、幸い、腕と脚はまだ壊れていない。

巨大魔獣のすさまじい突きが、頭部の横を通りすぎた。

身を翻して攻撃をかわし、斬りつけた。

『11のッ！』

間髪入れずに胸部を薙ぎ払い、頭部目がけて降り下ろし、腹部を狙  
って突きを放つ。

当たるところか、かすりもしない。どれも綺麗にかわされている。  
相手は人の形をしている心を持たないただの人形なのだが、

『くっ！』

セイオウグレートがなんとか後退して避けた所に、頭上から斬撃  
が降ってくる。



セイオウグレートは確実に炎弾が当たっていた。発射スピードが普通ではない…。だが、そこに隙ができる。

「うおおおおっ！」

セイオウグレートは跳躍すると同時に後退してぎりぎりかわした。

巨大魔獣は、セイオウの動きをしっかりと見定めている。これでは、魔弾を放とうが突きを放とうがさばかれてしまうだろう。

『だったらッ！』

セイオウグレートは構えつつ、じりじりと間合いを詰めた。

巨大魔獣も左右の手で曲刀を握りしめながらにらみつけてくる。先に動いたのは巨大魔獣だった。

『キシヤアッ！』

袈裟がけの斬撃に逆袈裟の斬撃、左右の手に握る燃え盛る曲刀による薙ぎ払いが続く…すさまじいスピードだ。

セイオウグレートはそれをかわした直後、左の拳を突き出した。

『ホイールプロテクション！』

その衝撃で、巨大魔獣の動きが止まる。

『今しかない!』

セイオウグレートは拳にエネルギーをチャージ!

『終わりだ………(此处で迎え撃つ、全力全開!!)フラッシュインパクト!』

『ク、クルナアあああッ!?!』

エクセリオンの叫びと、セイオウグレートの動きはほぼ同時だった。

放った強烈な一撃、フラッシュインパクトが相手の右側頭部を炸裂……巨大魔獣は横ざまに倒れ、

『ぎゃあああッ!?!』

巨大魔獣が大爆発……濁った宝石が残ると……周りの空間が戻る。

『終わったか……。』

……こうしてエクセリオンの戦いは終わった。

人の世に邪悪を成す闇の住人達の野望は粉碎された…… 戦  
え、高町レイジ！ 悪を許すな。セツトアップせよ、次元戦士エウ  
セリオン！」

翠屋

「・・・レイジ君は私の事、どう思ってるの?」

そんな事を聞けば、レイジはきっと困るだろうとアリシアは思っていた。

しかしアリシアにそう聞かれてもレイジの表情は一切変わらず、そして困るどころか、どこか余裕さえ感じる態度でこう答えた。

「どっつて……じゃあさ、アリシアはさ……どう思ってる、俺のとっ?」

そう言いながら少し笑みを浮かべながらレイジは飲み物を口にした。

「…………どっつつて?」

アリシアは自分の事をどう思っているのかと聞いたのに、レイジはそれに答えていない。

「どっつ思ってる?」

だがきつと、レイジは女性からこういった事を言われるのに慣れてるのだろうとアリシアは思った。

「親友だよ、お前は。」

「……親友？」

「そう、アリシアは俺にとって特別なダチだからな。もちろんホクトやシャルルも……」

そんな中、レイフォンが鳴る。

『レイジ君。未確認の反応だ！種類は”魔獣、マリアージュ、ガジエットタイプ”だ！！』

「……解かりました、スグいきます！！……悪い。俺、行くな？」

彼はそう言つて、翠屋を後にする。

「レイジ君……気をつけて。」

アリシアは走る彼に軽く手を振り、見送る。

（海鳴市、上空）

海鳴市の上空は無数の爆発から生まれる黒煙に塗れていた。



空を埋め尽くす無数の魔力弾、時折放たれる砲撃。

「貴様ら、消えろ！」

宙に浮いている男は今度は街の人々を消してしまおうと圧倒的魔力で街に砲撃……、

その時、周囲の建物の屋上にエネルギー状の盾のような物が現れた。

「出たな、違法魔導師。」

すると男も予想外の事態が起こったようで、

「出たな、邪魔をするな！エクセリオン！！」

「デイベインシューター！」

男は回避行動に専念しながらも一瞬の隙を突いての直接打撃による一撃必殺を狙っていた。

「らああ、あああつ！」

彼は体勢を下げ、直後に突進してきた。デバイスの斬撃が襲いかかってくる。

拳を握って鉄拳を穿つ、それを受け止めた途端、高速の突きがフェイスをかすめた。すかさず相手の腹を蹴飛ばし、間髪入れずに真っ向からリンブッカーで斬り下ろす。

「おおおお、らああああっ！」

右手を一閃させた途端、彼は瞬時に跳び下がった。背後にあった建物が切り倒された。

狙って薙ぎ払う。斬り上げる。弾き返し、すさまじい金属音を周囲に響かせる。

1 m ∷ 40 c m

全身に力をみなぎらせ、体勢を低くして疾走する。

30? ∷ 20? ∷

そして距離が0になる

一対一の戦闘に突入してから既に15分以上経過したが、膠着状態に入っていた。

エクセリオンは眼下を見る。

そこにはビル内で待ち構えていたアステイオンと、それを追跡して

きた魔獣達との闘いが開始された。

「……………グウウウウウウウウ……………」

元々闘争本能の高い魔獣を”暴走した魔力”によって作られたモノ、

「これで！ブレイズキャノン！」

『Blaze Cannon』

アステイオンが放った炎弾が迫る。

魔獣はそれをかわし、再びアステイオンに襲い掛かっていく。

そして、戦闘開始から5時間以上経過、空中で対峙する二人。

エクセリオンはそこからアステイオン達を見下ろした。その途中、相手も眼下を見下ろしながら言うと、話しかけてきた。

「心配か？」

エクセリオンは仮面の下で相手を鋭い眼光で睨みつける。

「お前らのやり方……あんまりいい趣味じゃないな……。」

男はとても楽しそうに笑っていた。その笑顔からは狂気すら感じ取られた。

「……………フフフ、楽しいよ……………とてもな。」

その醜悪な笑みに呼応するかのように、

男が生物的な曲面主体の形状を持つ怪人のような魔獣へと変化を遂げる。

「チッ！」

魔獣はデバイスで切りかかる。エクセリオンはリンブッカーで受け止め、斬撃をしのぐ。

何回かの斬撃を受け、魔獣は埒があかないと判断したのが、エクセリオンの攻撃をはじき、距離をとった。

「そういえば名乗ってなかったな！俺の名は「マルス」。」デスクリスタル”の一人だ！！」

追撃にマルスはベルカ式の魔弾を放つが、威力が低いために、エクセリオンは腕で弾く、

「馬鹿が！」

その瞬間、弾いている間に何発もの光の矢が打ち込まれた。

とつさにプロテクションを展開しながら、空を飛び、距離をとる。

高熱のエネルギーだったのだろう。矢が撃ち込まれた屋上は所々溶解していた。

「ウザいよ、お前。消えちまいな！」

エクセリオンは急いでリインブッカーで受ける。

「ほほお……。」

マルスは肉弾戦を仕掛けた。エクセリオンのリインブッカーと鏝迫り合いになる！

「クッ!?」

二度、三度と切り裂かれエクセリオンはダメージを負っていった。

「ハアアアアアアア」

エクセリオンの攻撃がマルスにダメージを与える。

「グウツ！」

「そんなに倒そうだなんて、ずいぶんふざけてるんだな？完膚なきまでにボロボロにして敗北を味わわせて……………」

「ハアツ!!!!」

リンブッカーとデバイスの攻防。二人の勝負は互角。

「クッ!!」

拳や蹴り技を組み合わせ、突きや斬撃が相手の頬を霞め、マルスの攻撃を右肩に喰らい、

エクセリオンは距離をとり、再度戦闘体制に入った。

襲い来る魔力弾がエクセリオンを捕らえようとする……が、

「はっ!」

彼自身の驚異的な回避能力により、爆発と共に飛び散る魔力刃の余波でかする程度で直撃は無し。この攻防が既に何度も繰り返されている。

対してマルスもエクセリオンのストレイトバスターを掻い潜って砲撃、直接打撃を打ち込もうとするも中々その機会が訪れない。

「どうした、俺を殺るんじゃないのか?」

「……甘く見られてるんだな?これからだ!」

魔法陣が大きく展開され、黒い稲妻が走る巨大な光球が出現する。

その攻撃が轟音と共に、エクセリオンを直撃する。

爆煙の影からエクセリオンが姿を現す。

この男は強い。マルスはそう言い切ることができた。射撃魔法は強力とはいえない。速さはあるが、防ぐこと自体は簡単で、誘導性もない。恐らく射撃魔法は苦手なのだろう。

しかし、接近戦や格闘戦になると話は別だ。

「やるな。こいつはどうだ？」

その声と同時にマルスは周囲に魔力誘導弾を数百発ばら撒き、デバイスを振るう、魔力を込められた手動追尾弾、自動追尾弾がエクセリオンに向かって襲いかかる。着発信管、時限信管、近接信管と起爆方式も様々なものが組み込まれている「飛翔する燕」の名を持つ中距離射撃魔法である。

接近戦を仕掛けるしかない。そう考えようとすると、その機会が作れない。とはいえ相手も焦っているようだ。なかなか決着が着かないからだろう。

「ぐあっ!?!」

そんなことを考えていると、回し蹴りが飛んできた。強烈な一撃。とつさにプロテクションを張るが、踏ん張りがきかず、吹き飛ばされた。

吹き飛ばされつつも、なんとか体勢を維持しようとした次の瞬間、上空から火矢の雨が降り注いだ。



時刻は夕方。ここは、桜高近くの河川敷。

普通なら子供などの遊び場だが、そこには一人のヨレヨレのスーツを着た男が、立っていた。

なぜか、男が薄ら笑いを浮かべる。それに呼応するかのようになり、鈍い目の輝きと共に、顔に複数の線が入ると。身体中がもりあがり、異形の怪物の姿 “魔獣” へと姿を変える。

「う…うわああああああ つつ！！」

“魔獣” が地面に濁った宝石を投げ入れると、別の“魔獣（使い魔型）” が現れ、いきなり目の前に居た人達に痛めつけようと襲い掛かる。

『嫌あつ！…！』

（まさか…、あれが今話題の未確認…！）

その場にいた少女達は死に物狂いで必死に逃げようとする…が、前方にも“魔獣（使い魔型）” が。

少女達は“魔獣”の恐ろしい姿に怯え、その場に立ちすくんでしまった。

「いやあ……こないですよ……」

「終わりだ……！」

そう言って、“魔獣”が攻撃しようとした時、

「リボルバースパイク……もどきッ!!」

ホクトがエクセリオンのマネをした、ドロップキックで、少女達から突き放す。

「皆さん、無事ですか〜！」

と、ホクトが少女達に聞く。

「!?! アンタは翠屋の兄ちゃんこの……」

「……レイジのダチ”中島ホクト”です。覚えておいてください”軽音部”の皆さん!」

とぼけた顔でサムズアップを差し出すホクトとは対照的に……”軽音部”の少女達は不安そうな顔をしていた。

「ちっ、貴様アツ、邪魔するなッ！」

そう言って、“魔獣”がホクトに襲いかかる。

「ちょっと、アンタ。危ないって!!」

軽音部の一人の”カチユーシャ娘・・・律”がホクトにそう叫ぶが・・・彼は構わず突っ込み、“魔獣”へと蹴りを入れる。

「へへっ！今日の俺は一味違っぜ！・・・”ブリッツモバイル”こいつがあるからな！」

「あれってっ!?!」

律が驚く。ホクトがレイジとは異なる未来的フォルムな携帯を手に取りっているのに気がついた。

「ま…まさか…」

黒髪の少女、“澪”が結論を抱く前に、ホクトはナンバーを打つと顔の前に翳す。

「いくぜ！スタート・アップ！」

《Start up》

掛け声と共にホクトの身体は光り輝き、防弾チョッキやプロテクターのような形をした黒と銀の装甲に包まれ、フルフェイスヘルメットのような頭部を持った軽めの装甲兵のような姿へと変える。

「わあ、あの子も変身しちゃったよ〜」

「びみよー・・・。」

「っしゃあッ” 番外戦士・ギアセカンド”！やっちやるぜ！！」

敵目掛けて右手を突き出し叫ぶと、ギアセカンドは“魔獣”へと一気に距離を詰める。

それに対し“魔獣（使い魔型）”はただ魔弾を放つだけ。

「おわッ！！？」

とっさに避けるギアセカンド。

「このお！！」

腰に装着した銃を構え、移動しながら撃ちまくる、撃ちながら突っ込んで行く。

「リボルバーシュート！」

ギアセカンドの戦闘能力が相手より勝っている・・・しかし、ウジヤウジヤと複数で出てくる。確かに単独なら弱い、数が多いと厄介。“魔獣（使い魔型）”達は一行に減らない。

それでも、ギアセカンドは次々と自分に襲い掛かる敵を撃ちまくる、霧がなくても。

「チツ……きりが…ねえな…つとおっ！」

『あれを使いなよ。』

遠くからアステイオンの念話が聞こえる。

「んじゃ、やりますか！」

そう言つて、銃をしまつと・・・向かつて来る“魔獣”を見据え、手首を二度スナップさせ、カシャカシャと小意気の良い音を鳴らすと、手首のタービンを回す。

そして目の前に迫ってきた“魔獣”の魔弾を受け止めると、すぐさまがら空きのボディに跳ね返した魔弾を叩き込んだ。

「らああっ！」

「……グああああ！！！」

一体の魔獣を中心に複数の魔獣（使い魔型）は、濁った宝石に変わった。

そんな時、魔獣が槍を振りかざして疾走し、電光の様な突きを繰り出す。そこから流れるように連撃を放つ。

「生憎、俺はレイジほど格闘ができないんでな……。」

魔獣の攻撃をヒョイとかわす。

「ロードキャバリー、フリードロイドセットー!!」

『キュクル〜』

ギアセカンドは銃、”ロードキャバリー”にフリードリヒ・レリッ  
クロイドを装填し、砲身を取り付けた。

《Shooting Mode》

「シューティング・レイ、ファイアッ!!」

二つの翼状のスフィア形の光弾が、魔獣に向かって放たれた。魔獣  
はその攻撃を防御できずに受けるのだが……………

「……面白いな……だが、貴様如きでは我らには勝てない。」

「そつちこそ、面白いことを言っじゃねえか?」

敵にもサムズアップするギアセカンド。

「ギアセカンドといったな？まだ、貴様とは戦う時期ではない。い  
ずれ相手してやる」

魔獣はそう言い残して、どこかへ消えていった……………。

「待ちやがれっ！」

「ちょっと……………あつ、行っちゃった。」

助けてくれた礼を言おうとした軽音部の少女達のことを忘れ、相手を  
追いかけるギアセカンドだった。

上空から火矢の雨が降り注いだ。エクセリオンは腕をクロスさせてガードするが、間に合いそうもない……。が、その時……。

『があああるううっ！！』

謎の小型生物がエクセリオンを突き飛ばし、直撃を逃れた。

「っ？なんだ？」

『うぐぐ……』

エクセリオンの足元にいた生物は……。昔「フェレットを飼っていた」動物好きの「母」が見たら、きつと、キャーキャーいいそうな……。”可愛い小動物”だった。

「お前、もしかして……”セイオウ”か？」

『おん！』

再び襲い掛かる魔獣の攻撃を避けている時、レイフォンに通信が入る。

『レイジ君。どこで覚えたか解からないけど……。彼は”ドウターモード”になれる様になったみたいなんだ。』

「ドウター？それって、未確認の種類のか？」



エクセリオンは走りながら、改めてセイオウを見る……。どう見ても、ホクトのハマっていた”某携帯獣”を髣髴させる姿だ……。

『とにかく、一緒に戦って見るといいよ!』

「ちょー『プツツ』切れたか……。」

エクセリオンが立ち止まったその時、路地裏から強化された人型魔獣が飛び出して来る。

あっという間にエクセリオンを包囲すると魔獣たちは銃口を一斉にエクセリオンに向ける。

「やめる! こいつには銃は効かない」

魔獣たちの輪が開いて、華麗な軍装を身に纏った女騎士が姿を現す。

「どうやらその様子だとお前も”連中”と同じようだな?」

「フフ……その通りだ、エクセリオン。」

「他の奴等と些か風評とは違うみたいだな。それで……。お前らの狙いは何だ?」

その時、大通りのビルの屋上から銃声が響く。

同時にそれに触発された魔獣たちが一斉にエクセリオンに銃弾を浴びせ掛ける。

「プロテクション・パスワードか!?!」

一瞬で蜂の巣にされたかに見えた。魔獣たちはそう確信したが

エクセリオンの数十センチ中空で全ての銃弾が火花とともに弾かれ、兆弾で何人かの魔獣が倒れる。

「グガガ!?」

「ま、今日は様子を見に來ただけだからな……。お前達、撤退だ！」

完全に包囲し圧倒的に優位であったはずの魔獣たちに動揺が奔ると連中は反対方向へ逃げに行った。

海鳴市地上。

真紅の竜型魔獣が五匹四足歩行で建物に突進していた。ティードは警戒し、ティードの部下達は真紅の竜の動きに備えて反撃をする。

《リボルバーシュート！》

その時、襲いかかる魔獣たちへ銃弾の嵐が打ち抜いた、

「グゴオオッ！」

「……面白そうっすね。おれも混ぜてくださいよ？」

「ホクト君か……たく、遊びじゃないんだぞ？」

ティード達は一斉に声のした場所を見上げ、その人物を見る……

「……わかってますって。よっと！」

ホクト……ギアセカンドはひらりとその場から飛び降り……は何事もなかったかのように華麗に着地する。

……しかし、

「ガアアアアアッ！」

魔獣は絶叫しながら、闇雲に突っ込んでくる……が、ギアセカンドは綺麗に突撃を避け、専用武器ロードキャバリーをくるくると回す、

猛り狂っている一匹に、銃口を向け、その魔獣目がけて乱射した！

「足元が御留守だったの……」

ギアセカンドの近くにいた魔獣が目にもとまらぬ速さで腕を振り上げると、そのままギアセカンドの頭上を振りおろすが、後退しなからかわす。

「よっ！」

彼は魔獣を踏みつけ、宙に舞う。ギアセカンドに踏みつけられた魔獣とギアセカンド目掛けて突進しようとした魔獣がぶつかり合うとその巨体が崩れ落ちていく。

「……油断するなホクト君。奴らはまだいる！」

「OK。」

前方から竜の大群が向かってきた。率いているのは、黒くて巨大な翼竜だ。体長は二十メートルくらいありそうだ。

「おおっとー！」

奴はふわりと浮き上がり、すさまじい勢いで突っ込んできた。ギアセカンドは横に跳んでそれをかわす。

翼竜型魔獣が建物に激突すると、それは粉々に崩れ去った。とてもない威力だ。

「……」

「マジかよ!？」

魔獣が空中で旋回し、前方から、大きく口を開け、再び突っ込んでくる。

「リボルバーシュート!」

ギアセカンドは跳躍し魔弾を放って応戦する。

その一撃はまるで超一流のスナイパーのごとく正確に…直後、地面に叩きつけられた…が、すぐに別個体が現れる。

上空を旋回し、空気を切り裂き接近する、ギアセカンドはそれを受け止める。ちっ浅かったか。次は

「うおおおおっ!」

魔獣が咆哮し、彼に向かって急降下してきた。大きく開いたその口に、黒いエネルギーが集束、燃え盛る球を吐き出した。その一秒にも満たない僅かな時間。

「うわあっ!」

あわててよけると、それは近くの建物を直撃した。黒い炎が燃え上がり、周辺一帯を焼き尽くす。

次の瞬間、鋭い牙が並んだ巨大な口が眼前に迫った。

「……ブリツツアクション！」

ギアセカンドが真紅の光と化し、跳び下がった。

「グガオオオオッ！」

雄たけびを上げ、魔獣は突進した。ギアセカンドとの距離がぐんぐん縮まっていく。

「ロードキャバリー、ガリユーロイドセット!!！」

『……』

ギアセカンドは銃、”ロードキャバリー”にガリユー・レリッククロイドを装填し、砲身を取り付けた。

《Shooting Mode》

「トーデス・ドルヒ、いけッ!!！」

魔力付与を行った黒いダガーを射出、魔獣に向かって放たれた。

「グオオオオオオ！」

生き物の様な黒いエネルギーが着弾爆裂すると、魔獣もろとも建物の壁をぶち破る……そして。

最後に叩きつけられると、地面に落ちてもがき苦しむ。

「グあああああああああ！！！！！！！！！！」

その瞬間、魔獣の体が爆散した。

「ここはもう大丈夫だ！レイジ君達のところに行きなさい。」

「へいへい、了解しました。……と、その前に……」

濁った宝石を拾い、そのままエクセリオン達のもとへと向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0955x/>

---

次元戦士エクセリオン

2012年1月6日13時51分発行